

# 京都府遺跡調査概報

## 第 39 冊

1. 丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡
  - (1) 太田・下後古墳群
  - (2) 川向1号墳
2. 中海道遺跡第17次
3. 長岡京跡左京第226次

1 9 9 0

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

## 序

昭和56年4月に開所した財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターも、はや9年目を迎えました。この間、公共事業は年々増大し、それに伴って、発掘調査は、たんに件数の増加にとどまらず、年ごとに大規模化の傾向にあります。当センターでは、こうした状況に対応するために、徐々にではありますが、組織・体制の強化を進め、調査・研究の充実を図ってまいりました。こうした発掘調査の成果については、『京都府遺跡調査報告書』をはじめ、『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』その他の各種印刷物を逐次刊行し、関係者の利用に供するとともに、「小さな展覧会」・「研修会」を開催して、一般の普及・啓発活動にも意を注いでいるところであります。

本書は、昭和63年度に実施した発掘調査のうち、農林水産省近畿農政局・京都府土木建築部・大蔵省近畿財務局の依頼を受けて行った丹後国営農地開発事業関係遺跡・中海道遺跡第17次・長岡京跡左京第226次の各発掘調査概要を収めたものであります。本書が、学術研究の資料として、また埋蔵文化財を理解する上で、何がしかの役に立つところがあれば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された農林水産省近畿農政局・京都府土木建築部・大蔵省近畿財務局をはじめ、京都府教育委員会・弥栄町教育委員会・久美浜町教育委員会・向日市教育委員会などの関係諸機関ならびに、調査に直接参加・協力いただいた多くの方がたに厚くお礼申し上げます。

平成 2 年 3 月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理 事 長 福 山 敏 男

## 凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

1. 丹後国営農地開発事業関係遺跡    2. 中海道遺跡第17次    3. 長岡京跡左京第226次

2. 各遺跡の所在地，調査期間，経費負担者および概要の執筆者は下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	経 費 負 担 者	執 筆 者
1. 丹後国営農地開発事業関係遺跡			農林水産省近畿農政局	増田 孝彦 石崎 善久
(1) 太田古墳群	竹野郡弥栄町和田野小字太田	平元. 8. 17 } 平元. 10. 20		
下後古墳群	竹野郡弥栄町和田野小字猪ノ蔵	平元. 8. 17 } 平元. 10. 20		
(2) 川向1号墳	熊野郡久美浜町大井小字川向	平元. 4. 12 } 平元. 7. 20		岩松 保
2. 中海道遺跡第17次	向日市物集女町御所海道	平元. 11. 20 } 平 2. 2. 15	京都府土木建築部	中川 和哉
3. 長岡京跡左京第226次	向日市上植野町車返8-10ほか	平元. 7. 28 } 平元. 11. 27	大蔵省近畿財務局	三好 博喜

3. 本冊の編集には，調査第1課資料係が当たった。

## 目 次

1. 丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡	
平成元年度発掘調査概要	1
(1) 太田・下後古墳群	4
(2) 川向1号墳	27
2. 中海道遺跡第17次発掘調査概要	45
3. 長岡京跡左京第226次発掘調査概要	55

# 挿 図 目 次

## 1. 丹後国営農地開発事業関係遺跡

### (1) 太田・下後古墳群

第 1 図	太田・下後古墳群周辺主要古墳・古墳群分布図	5
第 2 図	太田・下後古墳群分布図	7
第 3 図	太田 3・4 号墳地形図	9
第 4 図	第 1 主体部実測図	10
第 5 図	第 1 主体部遺物出土状況図(墓壙検出面)	11
第 6 図	第 1 主体部遺物出土状況図(墓壙埋土)	11
第 7 図	第 1 主体部出土遺物実測図(1)	12
第 8 図	第 1 主体部出土遺物実測図(2)	14
第 9 図	第 2 主体部実測図	16
第 10 図	第 2 主体部出土遺物実測図(1)	17
第 11 図	第 2 主体部出土遺物実測図(2)	17
第 12 図	第 3 主体部実測図	18
第 13 図	第 3 主体部出土遺物実測図	19
第 14 図	土坑 1 実測図	20
第 15 図	土坑 1 出土遺物実測図	21
第 16 図	土坑 2～5 実測図	23
第 17 図	下後 1 号墳地形図	24
第 18 図	下後 1 号墳出土遺物実測図(1)	24
第 19 図	下後 1 号墳出土遺物実測図(2)	25
第 20 図	下後 5 号墳地形図およびトレンチ配置図	26

### (2) 川向 1 号墳

第 21 図	調査地位置図	27
第 22 図	調査前墳形測量図	28
第 23 図	調査後墳丘測量図	29
第 24 図	墳丘及び石室内土層実測図	30
第 25 図	石室及び列石実測図	31
第 26 図	石室実測図	33

第 27 図	石室内遺物出土状況実測図(付・閉塞石見通し図)……………	34
第 28 図	SX02実測図……………	34
第 29 図	出土遺物実測図-1……………	35
第 30 図	出土遺物実測図-2……………	36
第 31 図	出土遺物実測図-3……………	37
第 32 図	出土遺物実測図-4……………	37
第 33 図	出土遺物実測図-5……………	37
第 34 図	出土遺物実測図-6……………	38
第 35 図	出土遺物実測図-7……………	39
第 36 図	出土遺物実測図-8……………	39

## 2. 中海道遺跡第17次

第 37 図	調査地及び周辺古墳分布図……………	45
第 38 図	調査トレンチ北壁セクション……………	46
第 39 図	東地区遺構平面図……………	47
第 40 図	西地区遺構平面図……………	48
第 41 図	SD01・02断面図……………	49
第 42 図	出土遺物実測図(1)……………	50
第 43 図	出土遺物実測図(2)……………	51
第 44 図	出土遺物実測図(3)……………	52

## 3. 長岡京跡左京第226次

第 45 図	調査地位置図……………	57
第 46 図	検出遺構実測図……………	59
第 47 図	長岡京期検出遺構実測図……………	61
第 48 図	断面実測図……………	62
第 49 図	溝SD22611実測図……………	63
第 50 図	土坑SK22610実測図……………	64
第 51 図	建物跡SB22621実測図……………	64
第 52 図	土坑SK22622遺物出土状況実測図……………	66
第 53 図	土坑SK22623遺物出土状況実測図……………	66
第 54 図	土坑SK22627遺物出土状況実測図……………	67
第 55 図	出土遺物(1)……………	68
第 56 図	出土遺物(2)……………	69

第 57 図	出土遺物(3).....	70
第 58 図	出土遺物(4).....	71
第 59 図	出土遺物(5).....	72

## 付 表 目 次

### 1. 丹後国営農地開発事業関係遺跡

付 表 1	平成元年度国営農地開発事業に伴う発掘調査一覧表.....	1
付 表 2	国営農地開発事業に伴う発掘調査一覧表.....	2
付 表 3	川向 1 号墳 出土遺物一覧表.....	40

# 図 版 目 次

## 1. 丹後国営農地開発事業

### (1) 太田・下後古墳群

図版第1 (1)太田3・4号墳全景(北東から) (2)太田4号墳主体部全景(南から)

図版第2 (1)太田4号墳第1主体部(北から)  
(2)太田4号墳第1主体部墓壙検出面遺物出土状況(西から)

図版第3 (1)太田4号墳第2主体部(北から)  
(2)太田4号墳第2主体部遺物出土状況(北から)

図版第4 (1)太田4号墳土坑1(北から)  
(2)太田4号墳土坑1遺物出土状況(西から)

図版第5 (1)下後1号墳全景(南から) (2)下後5号墳トレンチ全景(南西から)

図版第6 出土遺物(1)

図版第7 出土遺物(2)

図版第8 出土遺物(3)

### (2) 川向1号墳

図版第9 (1)墳丘全景(北から) (2)墳丘全景(南東から)

図版第10 (1)石室全景(羨道部より奥壁をのぞむ) (2)閉塞石検出状況(西から)

図版第11 (1)閉塞石上遺物出土状況(南から) (2)SD01内遺物出土状況(西南から)

図版第12 出土遺物(1)

図版第13 出土遺物(2)

## 2. 中海道遺跡第17次

図版第14 (1)東地区トレンチ全景 (2)西地区トレンチ全景

図版第15 (1)SH09内遺物出土状況 (2)SR17内遺物出土状況

図版第16 出土遺物(1)

図版第17 出土遺物(2)

## 3. 長岡京跡左京第226次

図版第18 (1)調査地遠景(東から) (2)調査地全景(西から)

図版第19 (1)調査地全景(東から) (2)建物跡SB22620全景(北から)

図版第20 (1)建物跡SB22621全景(北から)(2)溝SD22601全景(南から)

図版第21 建物跡SB22621礎盤検出状況



- 図版第22 (1)溝SD22609全景(南から) (2)溝SD22619全景(北から)
- 図版第23 (1)土坑SK22610堆積状況(南西から)  
(2)土坑SK22622遺物出土状況(北から)
- 図版第24 (1)杭列SX22624・土坑SK22623全景(南から)  
(2)最下層掘削状況(東から)
- 図版第25 出土遺物(1)
- 図版第26 出土遺物(2)
- 図版第27 出土遺物(3)

# 1. 丹後国営農地開発事業 (丹後東部・西部地区)関係遺跡 平成元年度発掘調査概要

## はじめに

本概要報告は、農林水産省近畿農政局が計画、推進している丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)に伴い、平成元年度中に調査を実施し終了した京都府竹野郡弥栄町太田古墳群・下後古墳群・熊野郡久美浜町川向1号墳の発掘調査概要である。

調査は、農林水産省近畿農政局丹後開拓建設事業所の依頼を受けて、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施した。国営農地開発事業に伴う調査は、当調査研究センター<sup>(注1)</sup>では、昭和60年度から開始し、付表2に示すように多大な成果があがっている。

現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第1係長辻本和美、同主任調査員増田孝彦、同調査員岩松保、森島康雄、石崎善久があたった。

本概要の執筆は、「はじめに」を増田が、丹後東部地区の「太田・下後古墳群」の「位置と環境」・「出土遺物」は石崎が、「古墳群の名称」・「調査経過」は増田が、「調査概要」・「まとめ」は増田・石崎が担当し、同西部地区の「川向1号墳」は岩松が執筆した。

調査期間中、地元の有志の方々や学生諸氏には、作業員および補助員・整理員として作

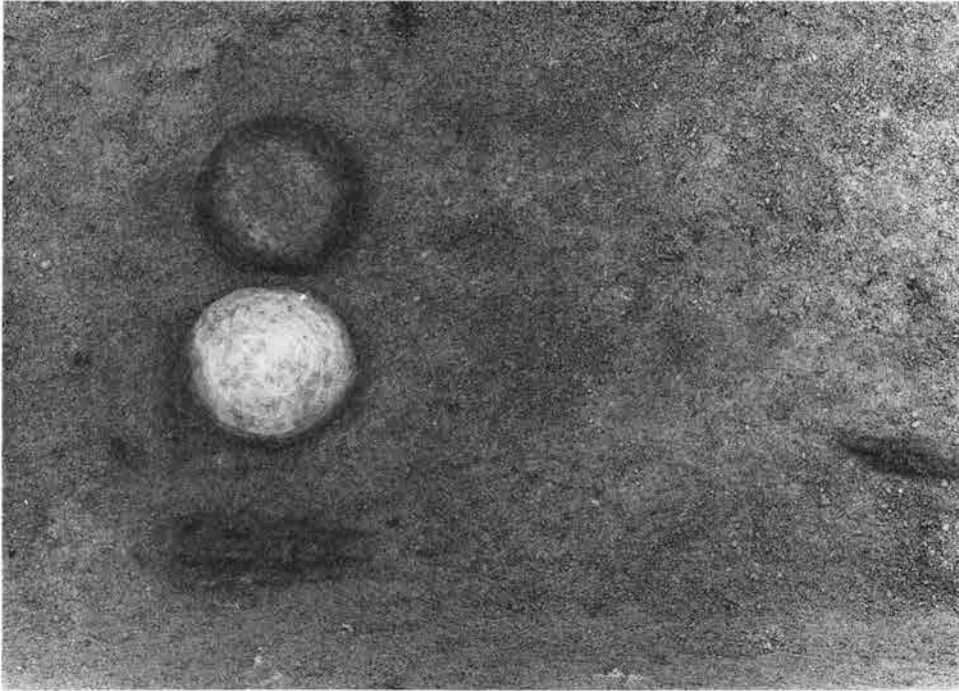
付表1 平成元年度国営農地開発事業に伴う発掘調査一覧表

番号	遺跡名	所在地	調査期間	担当者
1	太田古墳群	京都府竹野郡弥栄町 和田野小字太田	平成元年8月17日 ～平成元年10月20日	調査第1係長 辻本 和美 主任調査員 増田 孝彦 調査員 石崎 善久
	下後古墳群	京都府竹野郡弥栄町 和田野小字猪ノ蔵	平成元年8月17日 ～平成元年10月20日	
2	川向1号墳	京都府熊野郡久美浜町 大井小字川向	平成元年4月12日 ～平成元年7月20日	調査第1係長 辻本 和美 調査員 岩松 保 調査員 森島 康雄
3	山形古墓	京都府熊野郡久美浜町 大井小字山形	平成元年7月17日 ～平成元年8月18日	調査第1係長 辻本 和美 調査員 岩松 保

付表2 国営農地開発事業に伴う発掘調査一覧表

番号	遺 跡 名	所在地	調 査 期 間	概 要
1	有明古墳群・ 横穴群	大宮町三坂	昭和60年10月 ～昭和61年3月	古墳2基(4世紀後半～5世紀) 横穴3基(6世紀末～7世紀中葉)
2	桃山古墳群	峰山町内記	昭和60年11月 ～昭和61年3月	古墳2基(6世紀中葉)
3	宮の森古墳群	弥栄町鳥取	昭和61年4月 ～昭和61年7月	古墳4基(5世紀～6世紀中葉)
4	ゲンギョウの山 古墳群	弥栄町鳥取	昭和61年4月 ～昭和61年10月	古墳9基(4世紀後半・7世紀)
5	高山古墳群・ 高山遺跡	丹後町徳光	昭和61年7月 ～昭和62年9月	古墳6基(6世紀後半～7世紀前半) 中世～近世墓30基 竪穴式住居跡1(7世紀前半)
6	普甲古墳群 稲荷古墳群	弥栄町井辺	昭和62年6月 ～昭和62年12月	古墳11基(5世紀前半～6世紀前半)
7	新ヶ尾東古墳群	弥栄町吉沢	昭和62年10月 ～昭和63年1月	古墳3基(6世紀中葉・後半)
8	鳥取城跡	久美浜町浦 明	昭和62年5月 ～昭和62年6月	城跡(柱穴・土坑)13世紀
9	アバタ古墳群	久美浜町新 庄	昭和62年7月 ～昭和62年11月	古墳2基(6世紀末～7世紀前半)
10	スクモ塚古墳群	峰山町内記 弥栄町荒木	昭和63年4月 ～昭和63年7月	古墳4基(4世紀末～5世紀)
11	アバタ東1号墳	久美浜町新 庄	昭和63年4月 ～昭和63年7月	古墳1基(6世紀中葉)
12	アサバラ遺跡	久美浜町新 庄	昭和63年5月 ～昭和63年7月	竪穴式住居跡5(5世紀後半～6世紀) 溝
13	鳥取城跡	久美浜町浦 明	昭和63年6月 ～昭和63年8月	城跡(土坑・溝)15世紀 土坑(弥生時代中期末～後期初頭)

業に従事していただいた。<sup>(注2)</sup>また、調査にあたっては、弥栄町教育委員会、久美浜町教育委員会をはじめとする関係諸機関の御協力を得ることができ、現地においても多くの方々の御協力と御指導を賜った。あらためて感謝の意を表したい。なお、調査に係る経費は、全額農林水産省近畿農政局が負担した。



太田4号墳第1主体部転用枕(東から)

## (1) 太田・下後古墳群

## 1. 位置と環境

太田・下後古墳群は、京都府竹野郡弥栄町大字和田野小字太田・猪ノ蔵に所在する。太田・下後古墳群は丹後半島最大の河川である竹野川中流域西岸に向け派生する支尾根上に分布する。古墳群の分布する丘陵は中郡盆地と竹野郡盆地の狭隘部に相当する。古墳の分布状況については後述するが、今回、調査の対象となった太田3・4号墳、下後1・5号墳は古墳群の北端に位置する。

ここでは、太田・下後古墳群の所在する竹野川中流域を中心に、必要に応じ竹野川流域まで視野を広め、古墳時代の歴史的環境について概観する。

古墳時代前期、竹野川上流域で畿内の要素をもつ峰山町カジャ古墳(円・径73m)<sup>(注3)</sup>の築造以降、河口域の丹後町神明山古墳(前方後円・190m)、中流域には弥栄町黒部銚子山古墳(前方後円・100m)といった極めて卓越した前方後円墳が相次いで築造される。中期に入ると、古墳の規模は大きく縮小され、中流域の峰山町湧田山1号墳(前方後円・100m)を最後に、卓越した前方後円墳は築かれなくなる。竹野川河口域では在地的長持ち形石棺を直葬する丹後町産土山古墳(円・径50m)<sup>(注4)</sup>、中流域では豊富な形象埴輪を有し甲冑を副葬した弥栄町ニゴレ古墳(不整円?)<sup>(注5)</sup>などが首長墓クラスとみられる古墳である。後期になると、首長系譜墓と考えられる大型古墳は更に減少する。今回調査の太田4号墳に近接し、埴輪列を有する太田2号墳(円・径30m)<sup>(注6)</sup>が首長墓クラスと考えられる。

こうした、首長墓と対照的に低丘陵上には小規模な木棺直葬墳が前期から後期を通じて数多く築造されている。近年の調査例をあげると、前・中期に及ぶものとして、弥栄町ゲンギョウの山古墳群<sup>(注7)</sup>、同宮の森古墳群<sup>(注8)</sup>、同普甲古墳群<sup>(注9)</sup>など調査例が増加し、その実態についても徐々に解明されつつある。これら前・中期の群小古墳は墳丘を地山削り出しにより方形に構築するが明確な盛土をもたない点、副葬品がわずかな鉄器類・土器類・玉類と貧弱である点などを特徴としてあげることができる。これら前・中期の群小古墳は弥生時代以来の墓制の流れのなかで捉えられることが多い。後期の木棺直葬墳の調査例としては、峰山町スクモ塚古墳群<sup>(注10)</sup>、同新ヶ尾東古墳群<sup>(注11)</sup>、同桃山古墳群<sup>(注12)</sup>、弥栄町遠所古墳群<sup>(注13)</sup>、同坂野古墳群<sup>(注14)</sup>などを例示することができる。今回調査の太田4号墳もこの時期に属する。当該期において墳丘が明確な盛土をもつ点、円墳が主流を占めだす点など注目される。竹野川流域における横穴式石室の導入は現在のところ6世紀後半を遡り得ない。比較的古い要素をもつ石室として、弥栄町遠所古墳群<sup>(注15)</sup>、峰山町新ヶ尾東古墳群中に<sup>(注16)</sup>縦穴系横口式石室が木棺直



第1図 太田・下後古墳群周辺主要古墳・古墳群分布図(1/50,000)

- |           |             |             |             |
|-----------|-------------|-------------|-------------|
| 1 : 太田古墳群 | 2 : 下後古墳群   | 3 : 湧田山古墳群  | 4 : カジヤ古墳   |
| 5 : 桃山古墳群 | 6 : スクモ塚古墳群 | 7 : 新ヶ尾東古墳群 | 8 : 黒部銚子山古墳 |
| 9 : 普甲古墳群 | 10 : ニゴレ古墳  | 11 : 遠所古墳群  | 12 : 坂野古墳群  |

葬墳と墓域を共有して所在する。その他、横穴式石室墳として、下流域の丹後町高山古墳<sup>(注17)</sup>、上流域の峰山町桃谷古墳<sup>(注18)</sup>、大宮町新戸1号墳などが首長墓クラス古墳として知られるが、竹野川流域をはじめとする丹後半島部では、10基以下の単位で群を構成し、大規模な群集墳形態をとらないこともひとつの特徴といえよう。

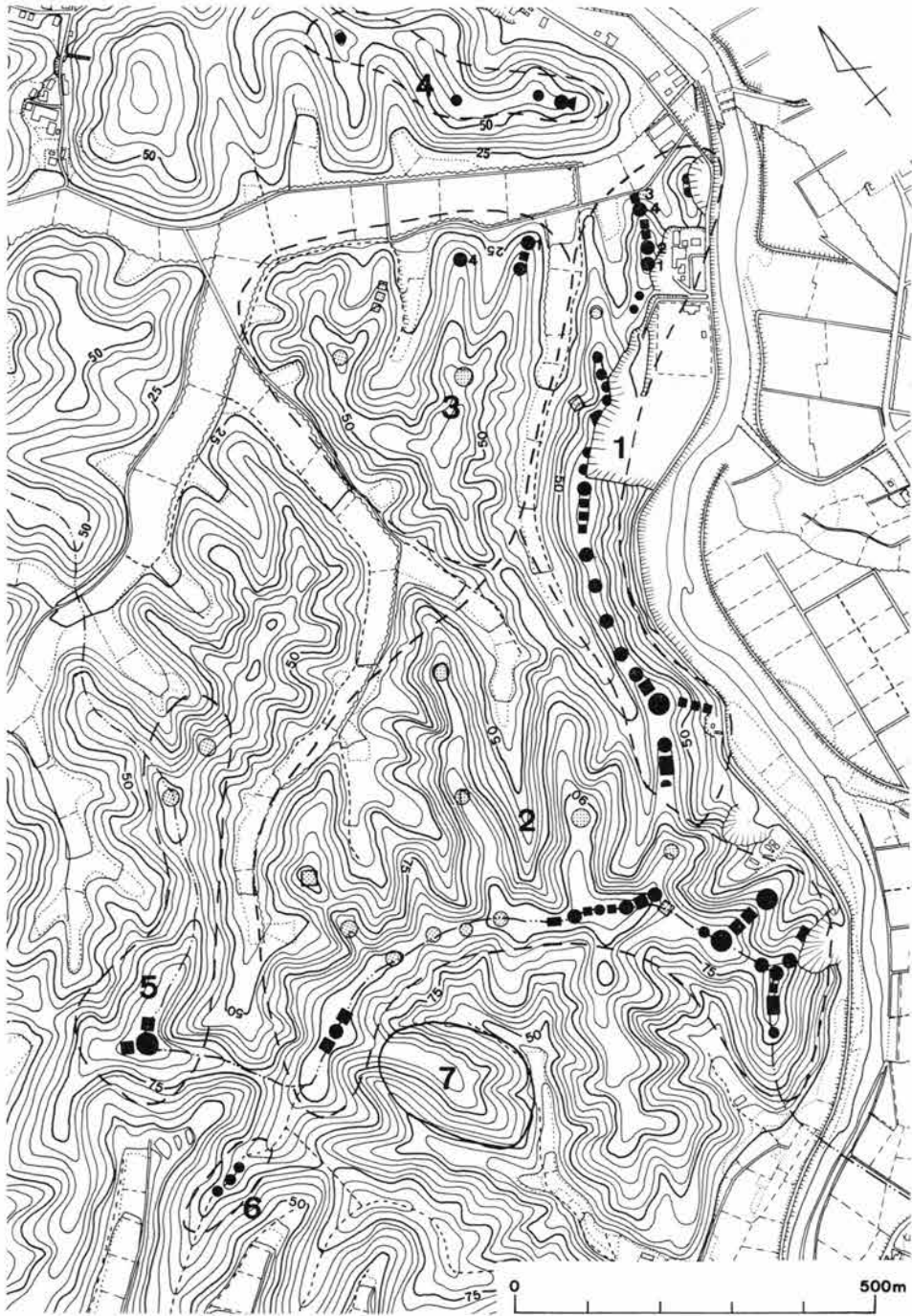
## 2. 古墳群の名称

太田・下後古墳群は、前述したように丹後半島最大の河川である竹野川により形成された中郡盆地と竹野郡盆地の狭隘部の北西側の丘陵上に展開する。この丘陵は、標高90mの水晶山を最高所とする樹枝状に派生した多くの支丘陵から構成されており、多くの古墳が営まれている。東西にのびる丘陵稜線上は、中郡峰山町矢田・橋木、竹野郡弥栄町和田野との町境でもある。

京都府教育委員会が「国営農地開発事業」に伴い当該丘陵一帯に計画されている「和田野団地」造成予定地内を中心に実施された分布調査結果<sup>(注19)</sup>によると、この丘陵上には水晶山古墳(前方後円墳)、太田古墳群(方・円墳 51 基)、下後古墳群(前方後円墳 1・方・円墳 3 基)として、木棺直葬墳・台状墓状を呈するものが総数56基確認されている。今回、和田野団地造成が一部開始されたことや、造成予定地周辺でも開発が予想されるため、丘陵一帯の分布調査を再度行ったところ、木棺直葬墳と思われるものや、台状墓状の形態をなすものが新たに7基確認された。これらとは別に、明確に古墳・台状墓といずれも断定できなかった不明瞭な形を呈するところが18か所あり、立地的にも古墳である可能性があり、今後これらの周辺を開発する場合、特に注意を要する。また、峰山町側の丘陵上には矢田<sup>(注20)</sup>城(城主中条民部のち原主水)があり、町境付近に認められる不明瞭な地形を呈するものについては、築城で削平されたとも考えられ、城跡周辺にある古墳上には土塁状の遺構が残るものもあり、城跡と古墳が重複している可能性があるところも認められた。

再調査の結果、町境の古墳・弥栄町側の古墳については、古墳数の増加や立地の違い等により、古墳群の名称を整理する必要性が生じてきた。このため、京都府教育委員会と協議した結果、当該丘陵内にはすでに水晶山・太田・下後という小字による古墳名が付されているため、登録されている名称はそのまま用い、丘陵を谷により大きく4分割し、古墳増加に伴う分だけその範囲を広げることとなった。前方後円墳として登録されていた水晶山古墳は、方墳と円墳が近接して築造されていることが判明し、その周辺にあるものも含め水晶山古墳群とした。下後古墳群も同様で、前方後円墳が円墳と方墳になり、広範囲を指すこととなった。太田古墳群については、丘陵最北端より町境に立地するものまで広範囲を指していたが、丘陵北端より築造されてきた古墳がとどえる部分と、町境付近に立地するものと二分し、前者を従来どおりの太田古墳群、後者を新たに太田南古墳群と命名した(第2図)。

古墳番号については、旧登録の番号は今回のみ使用し、次の調査からはそれに続く番号を付していくこととなった。



第2図 太田・下後古墳群分布図

- |           |           |          |           |
|-----------|-----------|----------|-----------|
| 1. 太田古墳群  | 2. 太田南古墳群 | 3. 下後古墳群 | 4. 古天皇古墳群 |
| 5. 水晶山古墳群 | 6. 中尾古墳群  | 7. 矢田城跡  |           |



### 3. 調査経過

調査は、和田野団地造成工事に伴う道路建設に先立ち行ったものである。

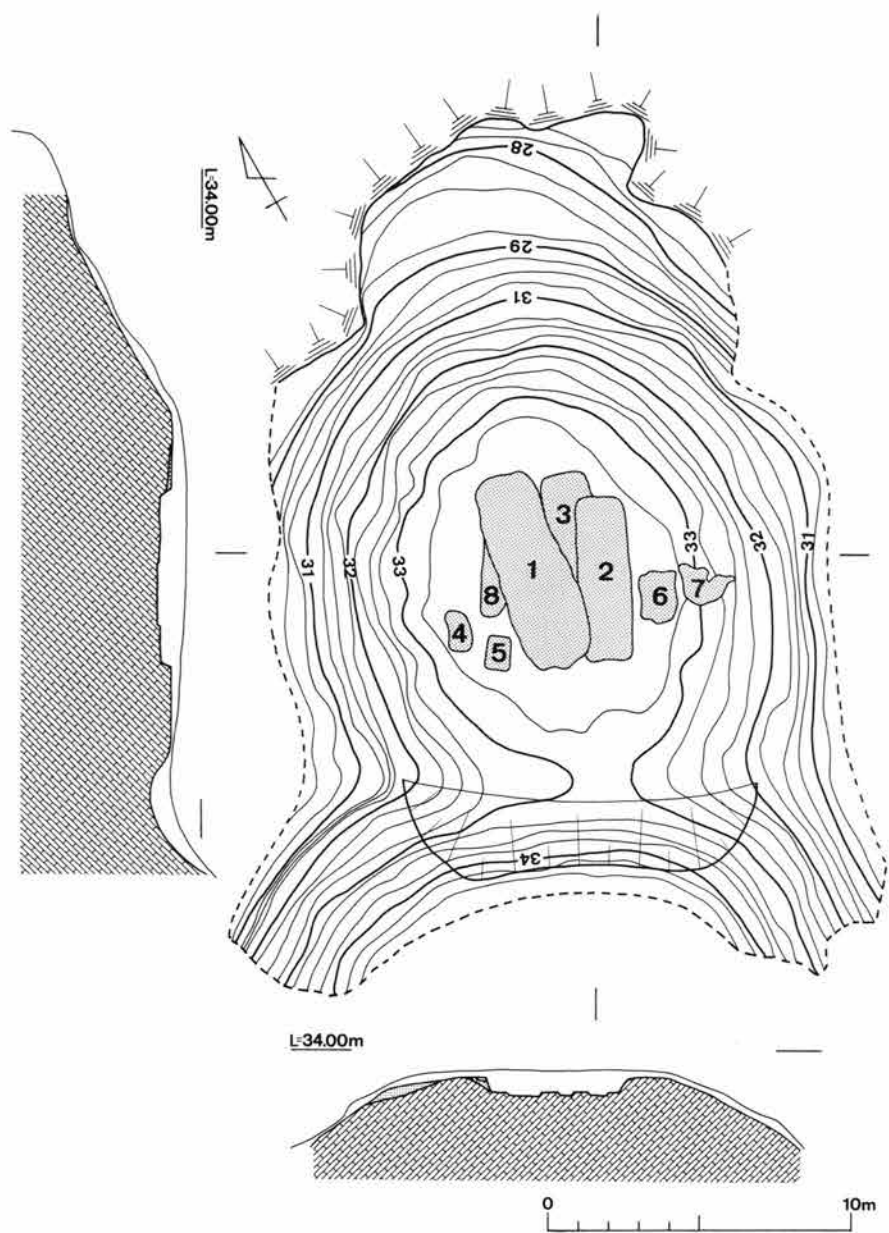
前述した丘陵の北辺部に道路建設が計画されたため、太田・下後古墳群とも丘陵最北端に位置する古墳がその対象となった。太田古墳群は3・4号墳、下後古墳群は1・5号墳<sup>(補注)</sup>を調査することとなり、太田3・4号墳と下後1号墳については全面発掘、下後5号墳は墳丘裾部に対し試掘調査を行った。

現地調査は、樹木伐採より開始し、伐採の終了した平成元年8月7日より9日まで地形測量(100分の1、25cm等高線)を行った。掘削作業は、太田・下後古墳群とも並行して8月17日より開始した。その結果、太田3号墳については、自然地形であることが明らかとなり、太田4号墳は6世紀前半～中頃にかけての埋葬施設3基と、弥生時代後期の土器を埋納する土坑5基を検出した。弥生時代後期に台状墓として構築されていたところを古墳として再利用されたものであることが明らかとなった。下後1号墳については、表土直下で「L」字状の性格不明の土坑が検出されたのみで、主体部は確認されなかった。墳頂部直上で鉄剣が出土しているが、墳丘盛土中に中世黒色土器が認められることから、主体部は削平されたものと推測される。下後5号墳は、自然地形の傾斜が確認されただけで、明確な墳丘裾を持たない古墳であることが判明した。掘削面積は、墳丘及びその周辺も含め行ったため、太田古墳群は330m<sup>2</sup>、下後古墳群は5号墳が試掘調査であるため、200m<sup>2</sup>となった。

調査の結果、古墳は地山の削り出し成形と溝による区画、小規模な盛土により築造されていることが判明した。古墳の埋葬施設は、いずれも木棺直葬と思われ、太田4号墳で3基、その他弥生時代後期の土坑5基を検出した。実測作業、写真撮影はその都度行い、平成元年10月20日にはすべての発掘器材を撤収し調査を終了した。なお、現地説明会は、平成元年10月13日に行い約80名の参加者があった。

### 4. 調査概要

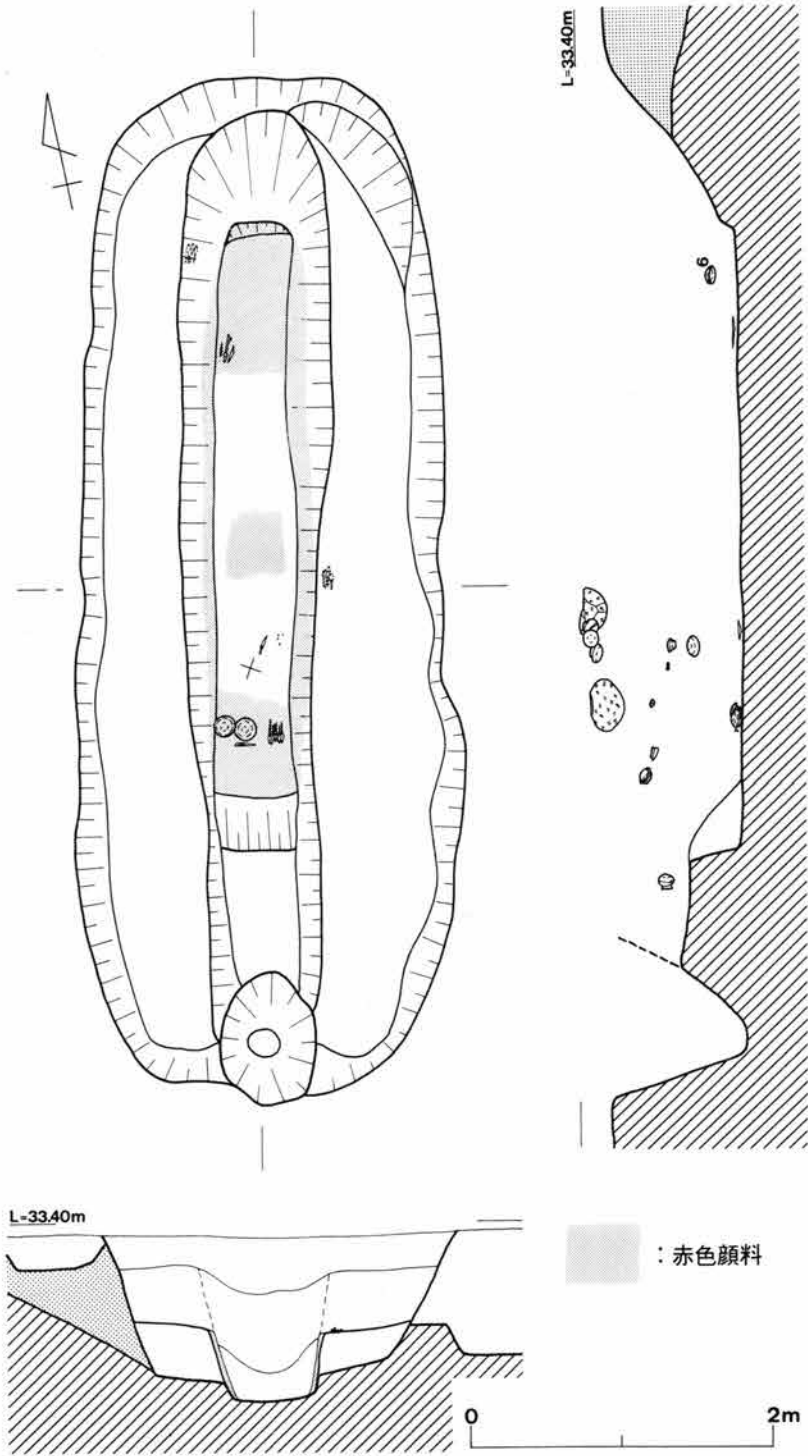
①太田3号墳(第3図) 太田古墳群の分布する丘陵最北端部に位置する。調査前の段階では、幅9m・長さ4mを測る平坦面が確認され、木棺直葬墳である可能性が考えられた。調査は隣接する太田4号墳同様、全面発掘を行ったが、表土直下で地山が確認され、埋葬施設の存在は確認されなかった。地山面が緩やかに傾斜することから、自然地形の可能性も高いが、太田4号墳との間に明確な傾斜変換点が存在しており、太田4号墳構築に伴う緩斜面である可能性を考えておきたい。



第3図 太田3・4号墳地形図

- |           |           |           |         |
|-----------|-----------|-----------|---------|
| 1 : 第1主体部 | 2 : 第2主体部 | 3 : 第3主体部 | 4 : 土坑1 |
| 5 : 土坑2   | 6 : 土坑3   | 7 : 土坑4   | 8 : 土坑5 |

②太田4号墳(第3図) 太田3号墳の南側、標高33m付近に位置する円墳である。墳丘は大半を地山整形により削り出し、北側に若干の盛土を施す。高位丘陵側とは幅2mを測る溝により区画される。墳丘規模は、直径約16m、溝からの高さ0.8m、北側からの見か



第4図 第1主体部実測図

けの高さ2.7mを測る。古墳に伴う埋葬施設3基、土坑5基を検出した。

**第1主体部(第4図)** 第2, 第3主体部を切る最も新しい主体部である。墓壇の平面形は隅丸長方形を呈し, 盛土から地山にかけ二段に掘り込まれる(上段長6.8m・幅2.4m・深さ0.9m, 下段長4.1m・幅0.6m・深さ0.2m, 主軸N9°E)。木棺は組合式箱形木棺と想定され, 塗布されていた赤色顔料の範囲から, 規模は長さ3.6m・幅0.6mと考えられる。なお, 側板の痕跡は確認したが底板の有無については不明である。

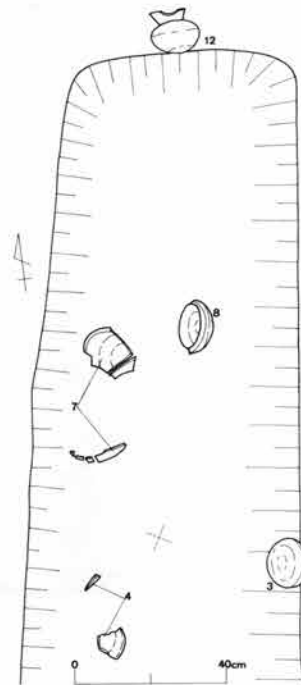
棺外遺物として墓壇検出面で杯身1点, 広口壺1点, 短頸壺1点, 甕1点, 甕2点が出土した(第5図)。層的に墓壇埋土出土の遺物と区別することはできなかったが, 出土状況・接合関係などからみて, 墓壇を埋め戻した後に供献された土器群であると考ええる。墓壇埋土からは杯身2点, 杯蓋4点, 甕1点が出土した(第6図)。棺を安置するための裏込め土上からは, 棺東側板に沿って6本の鉄鎌が切先を南に向け, 棺西側板北端では5本の鉄鎌が切先を北に向け出土した。その他に, 特殊な遺物として棺内埋土より製品ではないが, 軽石1点が出土している。

棺内南側では, 西側に杯蓋を正位にし, 東側に杯身を逆位にした須恵器転用枕が据えられていた。このことから, 棺内には南枕で被葬者が安置されていたことが確認された。以下, 棺内の遺物出土状況については, 被葬者との位置関係を中心に述べる。棺内からは副葬遺物として刀子6点, 鉄鎌7点が出土した。刀子は被葬者の頭頂部に切先を東に向けた状態で1点, 右胸元付近で切先を北に向け1点, 左足元付近で4点出土した。大型の1点のみ切先を北側に置いた状態であった。鉄鎌は体の右側に沿って切先を頭側にした状態で出土した。なお, 部分的に矢柄に塗布された漆膜片が遺存しており, 矢の全長を約70cmと考えることができる。

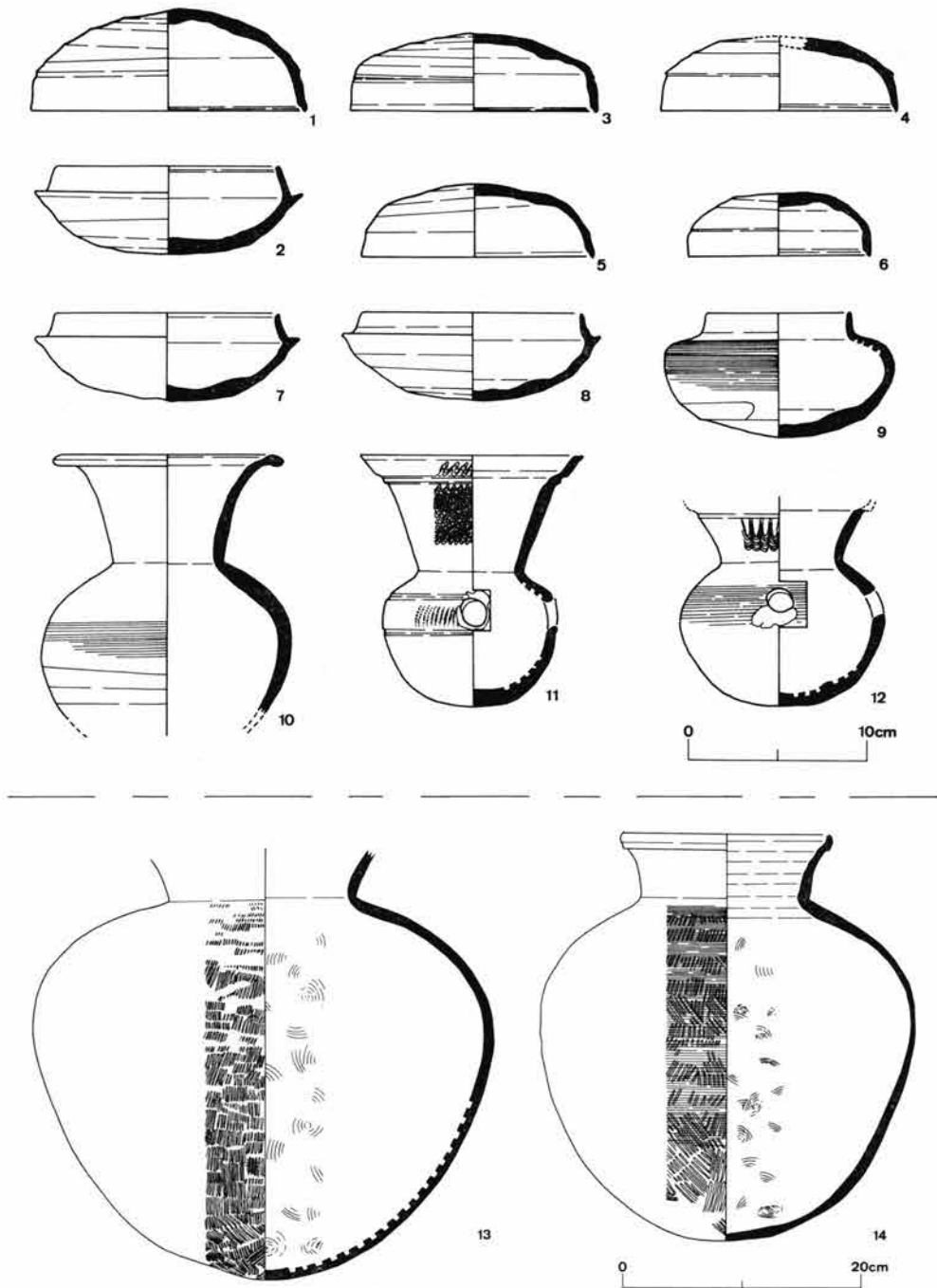
**第1主体部出土遺物** 第1主体部からは須恵器・鉄製品が出土している。



第5図 第1主体部遺物出土状況図(墓壇検出面)



第6図 第1主体部遺物出土状況図(墓壇埋土)



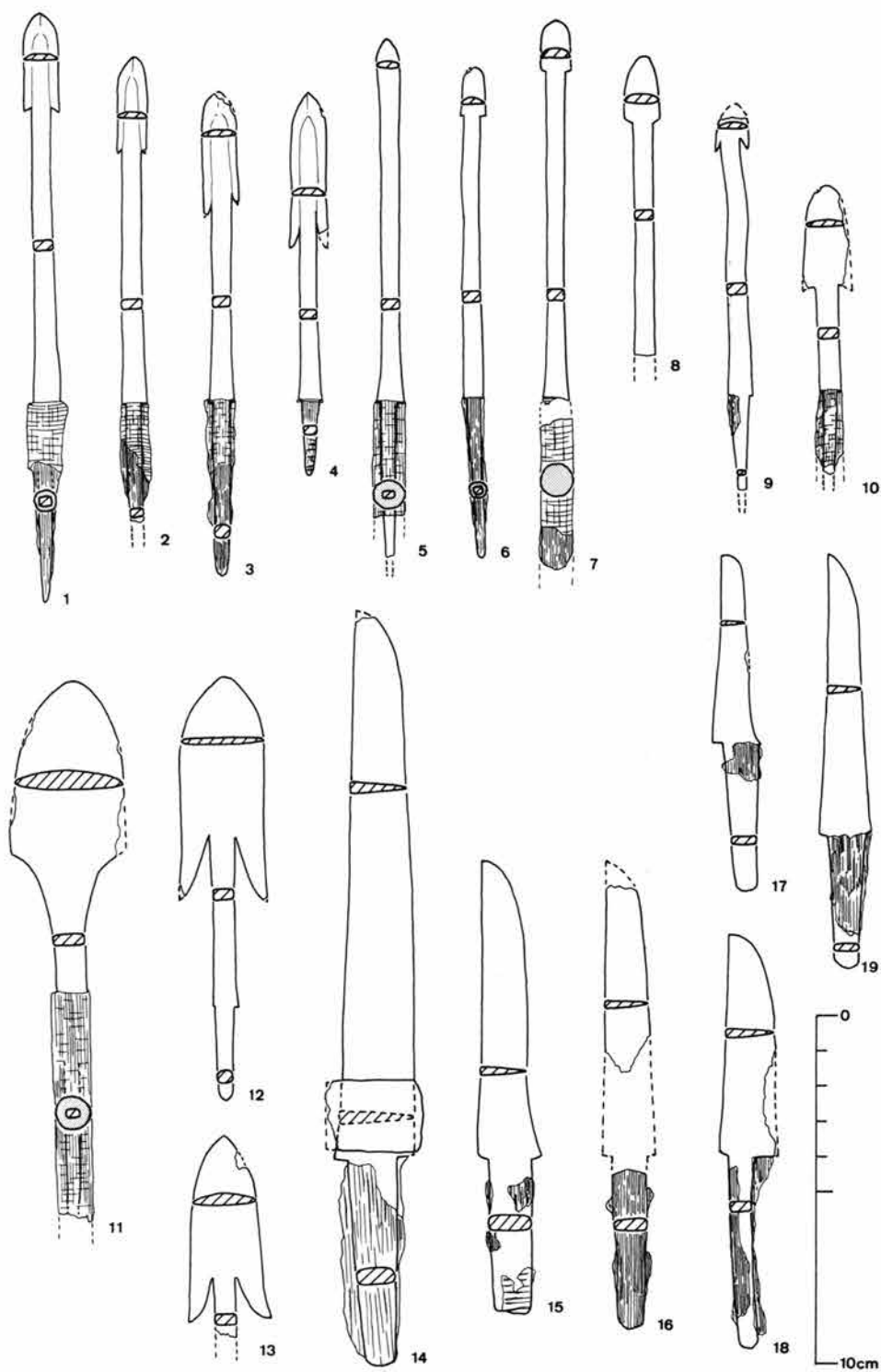
第7図 第1主体部出土遺物実測図(1)

1・2：棺内(転用枕) 3・4・6～8・12：墓壙内埋土 5・9～11・13・14：墓壙検出面

**a 土器(第7図)** 第1主体部からは須恵器14点が出土した。うち、1・2は棺内に転用枕として用いられていたものである。1は口径15.1cm・器高5.7cmを測る杯蓋である。天井部の高い、全体に丸みを帯びたプロポーションを呈する。端部内面に明瞭な段を有するが、稜は形骸化したものである。天井部はていねいなヘラ削りを施す。なお外面に「×」のヘラ記号がみられる。2は口径12.3cm・器高4.8cmを測る杯である。立ち上がりはやや内傾し、端部の段は形骸化が著しい。

3・4・6～8・12は墓壇埋土より出土した。3・4・6は杯蓋である。3は口径13.6cm・器高4.3cmを測る扁平なプロポーションを呈する。稜は形骸化し沈線で表現する。端部内面には明瞭な段を有する。4は全体の半分程度が遺存するのみである。他の物に比べシャープな稜・端面の段を有する。天井部はていねいにヘラ削りし平らに仕上げる。6は口径10.0cm・器高3.4cmを測る。法量からみて短頸壺の蓋になる可能性が高い。天井部は部分的にヘラ削りが施されるが、頂部付近はヘラ起こし後ナデを施すのみである。ごく浅い沈線により稜を表現する。端部内面に段を有する。なお、内面に赤色顔料の付着が認められる。8は杯身である。口径12.1cm・器高4.0cmを測る。立ち上がりはやや内傾し、段を持たない。底部内面にタタキ目痕が残る。12は甕である。最大径11.6cmを測る。カキ目を施した楕円形の体部に太く短い頸部が付く。頸部には6条の波状文を施す。口縁部と頸は段により画されるものと思われるが、口縁部を失っているため詳細は不明である。

5・9～11・13・14は墓壇検出面で出土した。層的に墓壇埋土出土の遺物と区別することはできなかったが、出土状況・接合関係などからみて、墓壇を埋め戻した後に供献された土器群であると考えられる。5は蓋である。半分程度遺存する。稜・段ともすでに形骸化が著しく、出土須恵器のなかでは最も新しい要素をもつ。天井部内面にタタキ目痕が残る。口径12.8cm・器高4.0cm。7は杯身である。焼成軟質のため調整は不明。端部に段を持ち内傾する立ち上りを有する。底部内面にタタキ目痕が残る。口径12.3cm・器高4.0cmを測る。9は口径7.9cm・器高7.0cm・最大径12.9cmを測る短頸壺である。肩の張る扁平な体部に直立する短い頸部が付く。口縁端部は丸く納める。体部上半部にカキ目を施す。10は広口壺である口径11.9cm・最大径14.0cmを測る。球形の体部に緩やかに外反する太く短い頸部が付く。口縁部は外方にやや垂下しながらのび、端部を丸く納める。体部中位にカキ目を施す。11は口径12.3cm・器高14.0cm・体部最大径9.8cmを測る甕である。やや肩の張る体部に太く短い頸部が付く。体部には2条の沈線により画された文様帯を配し、櫛描列点文により装飾する。また、円孔もこの文様帯内に設ける。頸部には13条を1単位とする波状文が2単位以上施される。口縁部と頸部は2つの段により画される。口縁部は内面に面を持ち、外縁を5条からなる波状文で飾る。なお、口縁端部は意識的に打ち



第8図 第1主体部出土遺物実測図(2)

欠かれている。13・14は甕である。13は肩の張るやや扁平な体部に頸部が付く。外面は平行タタキ、内面は青海波文をナデ消す。最大径38.6cmを測る。14は口径17.1cm・器高33.8cm・最大径31.9cmを測る。体部は外面平行タタキ後カキ目、内面は13同様、青海波文をナデ消す。

以上、第1主体部出土須恵器は田辺編年<sup>(注21)</sup>のTK10に併行するものと思われるが、棺内に枕として転用された1や、埋土より出土した4は古式の要素をとどめるものである。

**b 鉄製品(第8図)** 第1主体部出土の鉄製品には、鉄鏃、刀子がある。

**鉄鏃(1～13)** 鉄鏃には長頸鏃(1～9)、短頸鏃(10～13)の両者が存在する。

長頸鏃は鏃身部の平面形態により4類に、短頸鏃は3類に分類が可能である。便宜上、長頸鏃Ⅰ～Ⅳ類、短頸鏃Ⅰ～Ⅲ類として説明を加える。

**長頸鏃Ⅰ類(1～4)** 棺内より5点、棺西側裏込め土上より1点出土している。4点図示した。1～3は棺内、4は棺西側裏込め土上より出土した。腸扶柳葉式の鏃身部をもち、断面は片刃造である。

**長頸鏃Ⅱ類(5)** 1点のみ棺西側裏込め土上より出土した。鑿箭式の鏃身部をもち、断面は両丸造である。

**長頸鏃Ⅲ類(6～8)** 出土した3点すべてを図示した。6は棺内、7・8は棺東側裏込め土上より出土した。三角形の鏃身部をもち、断面片丸造である。

**長頸鏃Ⅳ類(9)** 棺西側裏込め土上より1点のみ出土した。腸扶三角形の鏃身部をもち、断面形は片丸造である。

**短頸鏃Ⅰ類(10)** 棺西側裏込め土上より1点のみ出土した。長頸鏃Ⅰ類同様、腸扶柳葉式の鏃身部をもつ。断面形は片丸造。

**短頸鏃Ⅱ類(11)** 棺西側裏込め土上より1点のみ出土した。幅広の柳葉式の鏃身部をもち、断面形は両丸造。

**短頸鏃Ⅲa類(12・13)** 棺内より1点、棺東側裏込め土上より3点出土している。うち2点を図示した。12は棺内、13は棺西側裏込め土上よりの出土である。やや細身の腸扶柳葉式の鏃身部をもつ。断面形は、12は平造。13は片丸造。

**刀子(15～19)** 総数6点出土した。15は被葬者の頭頂部付近、19は胸部付近、14・16～18は左足元付近に副葬されたと考えられる。14が鯛をもつ全長23.5cmの大型品である以外は、全長9～13.5cmを測る通常の刀子である。15・17・19はとぎべりが観察される。

**第2主体部(第9図)** 第3主体部の長辺西側を切る。墓壙平面形は隅丸長方形を呈し、盛土から地山にかけ二段に掘り込まれる(上段長5.0m・幅2.0m・深さ0.7m、下段長3.4

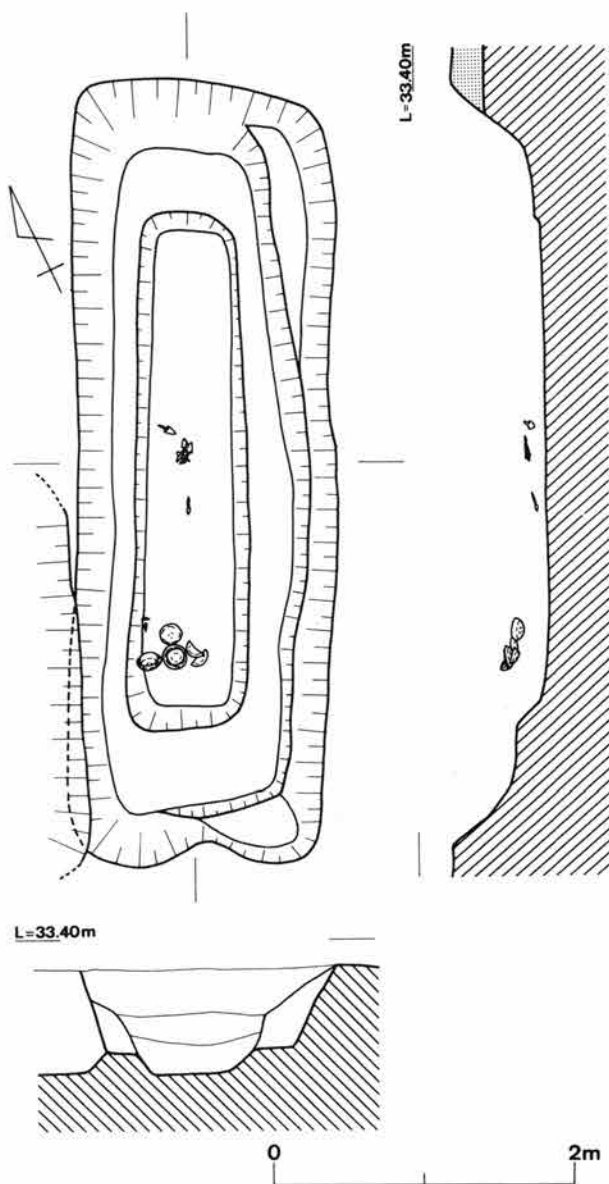


m・幅0.7m・深さ0.1m、主軸N25°E)。木棺痕跡は確認されなかったが、墓壇の形状から組合式箱形木棺が想定される。墓壇南側において須恵器杯身2点、杯蓋2点、刀子1点、鉄鏃1点が、墓壇中央付近からは鉄鏃8点が浮いた状態で出土した。その出土状況からみて、棺蓋上に置かれた副葬品が棺の腐食に伴い棺内に落ち込んだものと考えられる。

**第2主体部出土遺物** 第2主体部出土遺物には須恵器、鉄製品がある。

**a 土器(第10図)** 第2主体部からは須恵器4点が出土している。いずれも棺蓋上に副葬されたものである。1・2は杯蓋である。1は口径14.5cm・器高4.9cmを測る。稜はややシャープさを欠く。明瞭な段を有する。ていねいなヘラ削りにより天井部を平らに仕上げる。2は口径14.5cm

・器高5.1cmを測る。稜は形骸化している。端部に明瞭な段を有する。天井部はやや丸みを帯びている。3・4は杯である。3は口径13.8cm・器高5.9cmを測る。直立気味にのびる立ち上がりを持つ。端部には明瞭な段が残る。外面に自然釉が付着しているため調整は不明である。4は口径12.7cm・器高5.9cmを測る。深い杯部にやや内傾する立ち上がりを持つ。端部には明瞭な段を有する。底部内面にタタキ目痕が観察される。以上、第2主体部出土の須恵器は、田辺昭三編年のMT15型式に対応するものと考えられる。



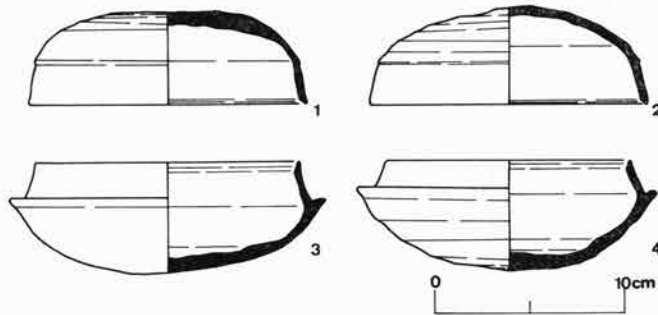
第9図 第2主体部実測図

**b 鉄製品(第11図)** 第2主体部出土の鉄製品には棺上に置かれた鉄鏃8点、刀子1点がある。そのうち図示し得たのは7点である。

**鉄鏃** 鉄鏃には長頸鏃Ⅲ類・短頸鏃Ⅲb類・短頸鏃Ⅲc類が存在する。

**長頸鏃Ⅲ類(6)** 1点のみ出土した。第1主体部の長頸鏃Ⅲ類と同形態である。長頸鏃はもう1点存在するが、銹化が著しく、鏃身部の形態が不明である。

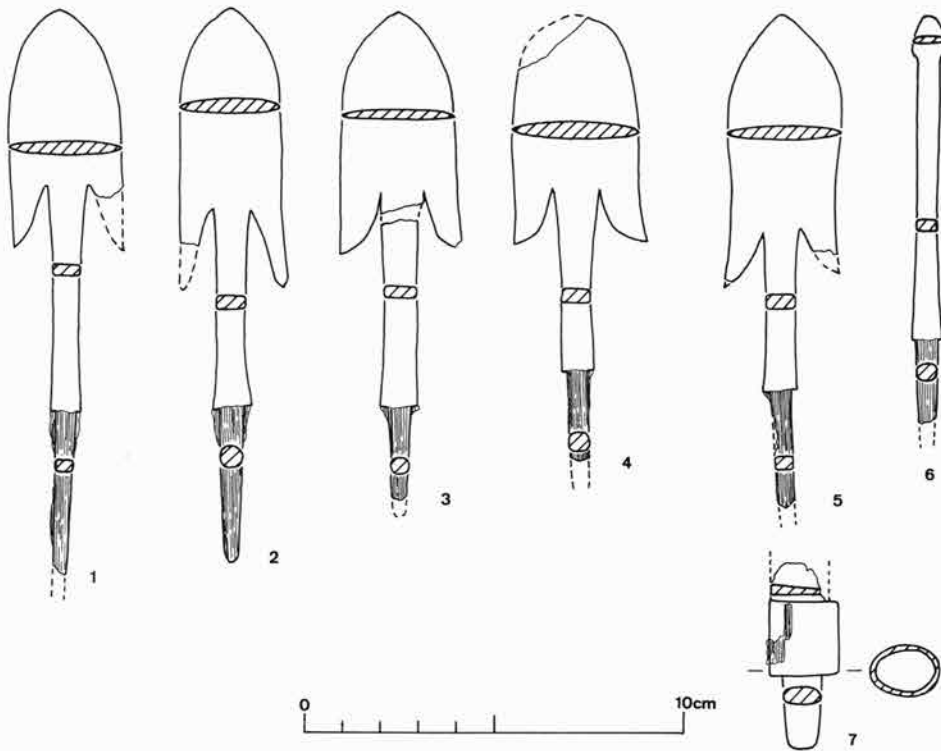
**短頸鏃Ⅲb類(1・3~5)** 総数4点出土した。第1主体部出土の短頸鏃Ⅲa類と基本的な形態は同じであるが鏃身部の幅がⅢa類に比べ広い。



第10図 第2主体部出土遺物実測図(1)

**短頸鏃Ⅲc類(2)** 1点のみ出土した。Ⅲb類のなかでも細長い逆刺を有するものである。断面形は平造。

**刀子(7)** 棺上より出土した。大半を欠損しているため詳細は不明。楕



第11図 第2主体部出土遺物実測図(2)

円形の鰭が付く。

**第3主体部**(第12図) 第1・2主体部に切られ、古墳築造の契機となった主体部である。第1, 第2主体部による削平が著しいが、わずかに遺存する墓壙北端より、墓壙平面形は隅丸長方形を呈するものとする。墓壙は盛土から地山にかけ二段に掘り込まれる(上段長5.0m以上・幅1.8m・深さ0.5m, 下段長4.4m・幅0.8m・深さ0.2m, 主軸N23°E)。木棺痕跡は確認されなかったが、墓壙の形状から組合式箱形木棺が想定される。

墓壙南側より鉄斧1点が出土した。出土状況より棺蓋上もしくは、棺側に副葬されたものが棺の腐食に伴い落ち込んだものとする。棺内北側からは刀子1点が折られた状態で出土した。

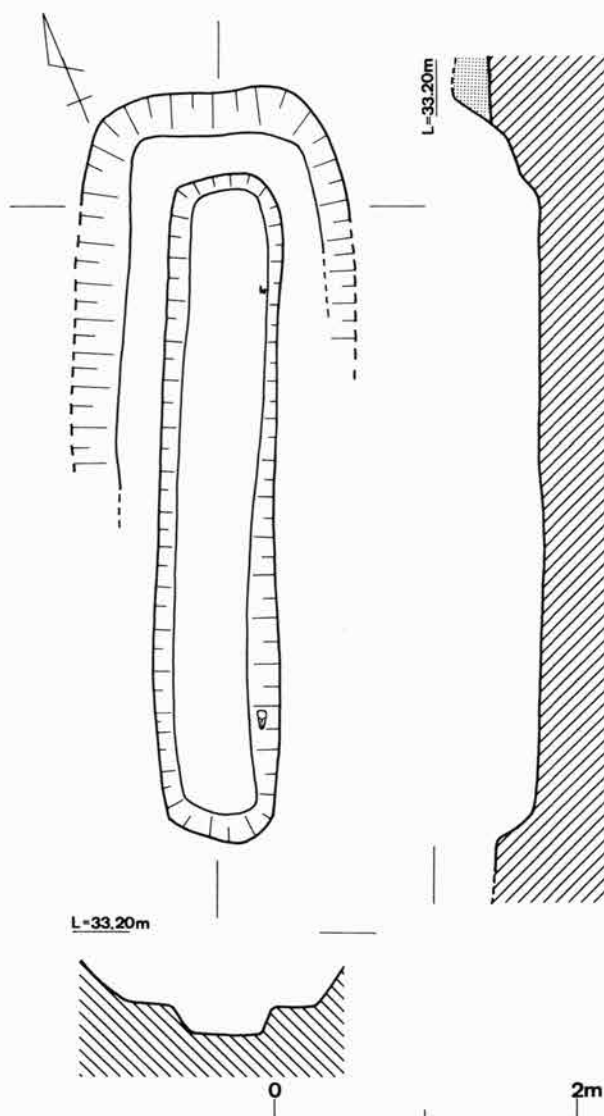
**第3主体部出土遺物**(第13図) 第3主体部からは鉄斧1点, 刀子1点が出土した。須恵器・土師器など土器類の出土は見られなかった。

鉄斧(1)は、無肩の袋状鉄斧で、全長11.6cmを測る。柄の装着部はほぼ正円に近く径3.0cmを測る。装着部内面に木質が遺存する。

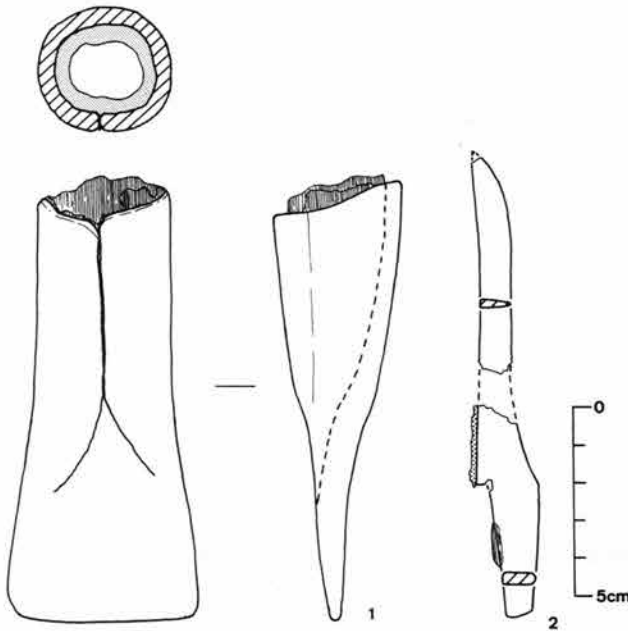
刀子(2)は、棺北側で出土した。通有の刀子であるが、とぎべりが著しい。

**その他の遺構** 古墳に伴わない遺構として、土坑5基を検出した。

**土坑1**(第14図) 墳丘西肩で検出した弥生時代後期末葉



第12図 第3主体部実測図



第13図 第3主体部出土遺物実測図

の土坑である。地山を掘り込んでおり、土坑平面形は隅丸長方形プランを呈する。土坑中央部は更に一段深く掘り込まれ、下段は不整長楕円形を呈する（上段長1.94m・幅0.6m・深さ0.2m、主軸N29°E）。

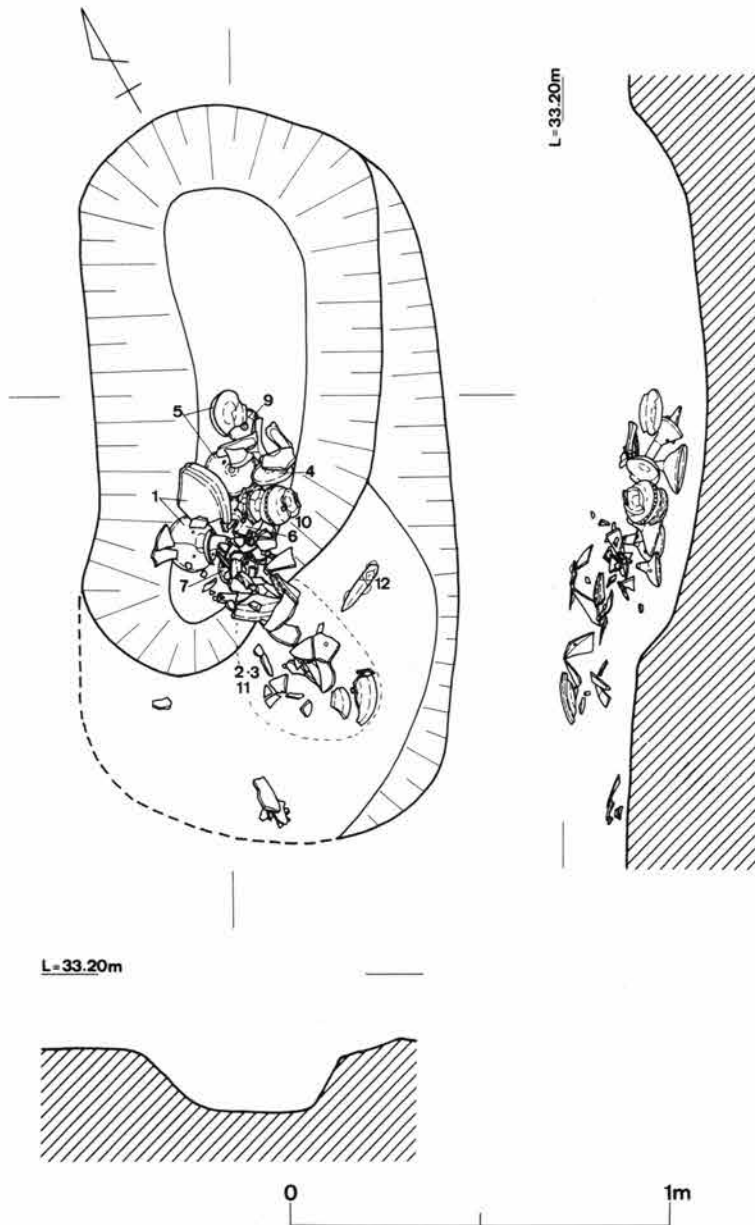
土坑検出面、および埋土から多量の弥生土器が出土している。検出面が表土直下であったため、検出面で確認した遺物は原位置から動いている可能性も考慮する必要があるが、ここでは、

基本的に原位置から大きく動いていないものと考え説明を加える。土坑検出面南側において、細片化した大型高杯(第15図2・3)、器台(11)、剣(12)が出土した。剣は当初より欠損した状態であったが、他の物はほぼ完形に復原できた。土坑内には大型高杯(1)、高杯(5・6・7)の脚部4点が正位でやや床面から浮いた状態で検出された。大型高杯(1)、高杯(5)の杯部はやや離れたところから検出されている。高杯(5)、脚付裝飾壺(10)はいずれも前述した高杯の上に横位で検出された。蓋(9)は高杯(5)の杯部の下より正位で検出された。層位的には確認できなかったものの、遺物の出土状況をみると、全体に棺の腐食に伴い落ち込んだような状況とみられる。以上の点から、この土坑の性格は木棺を安置した弥生時代の主体部であると考えられる。出土した土器群は土坑埋土上に供献されたものと考えることが可能である。

**土坑1出土遺物** 土坑1からは弥生土器、鉄剣1点が出土した。

**a 土器(第15図)** 土坑1から出土した弥生土器は第V様式新段階に比定しうる弥生土器である。器種には大型高杯1～3、高杯4～8、蓋9、脚付裝飾壺10、器台11がある。図示しえた11点のほか、少なくとも大型高杯1個体が存在するようである。

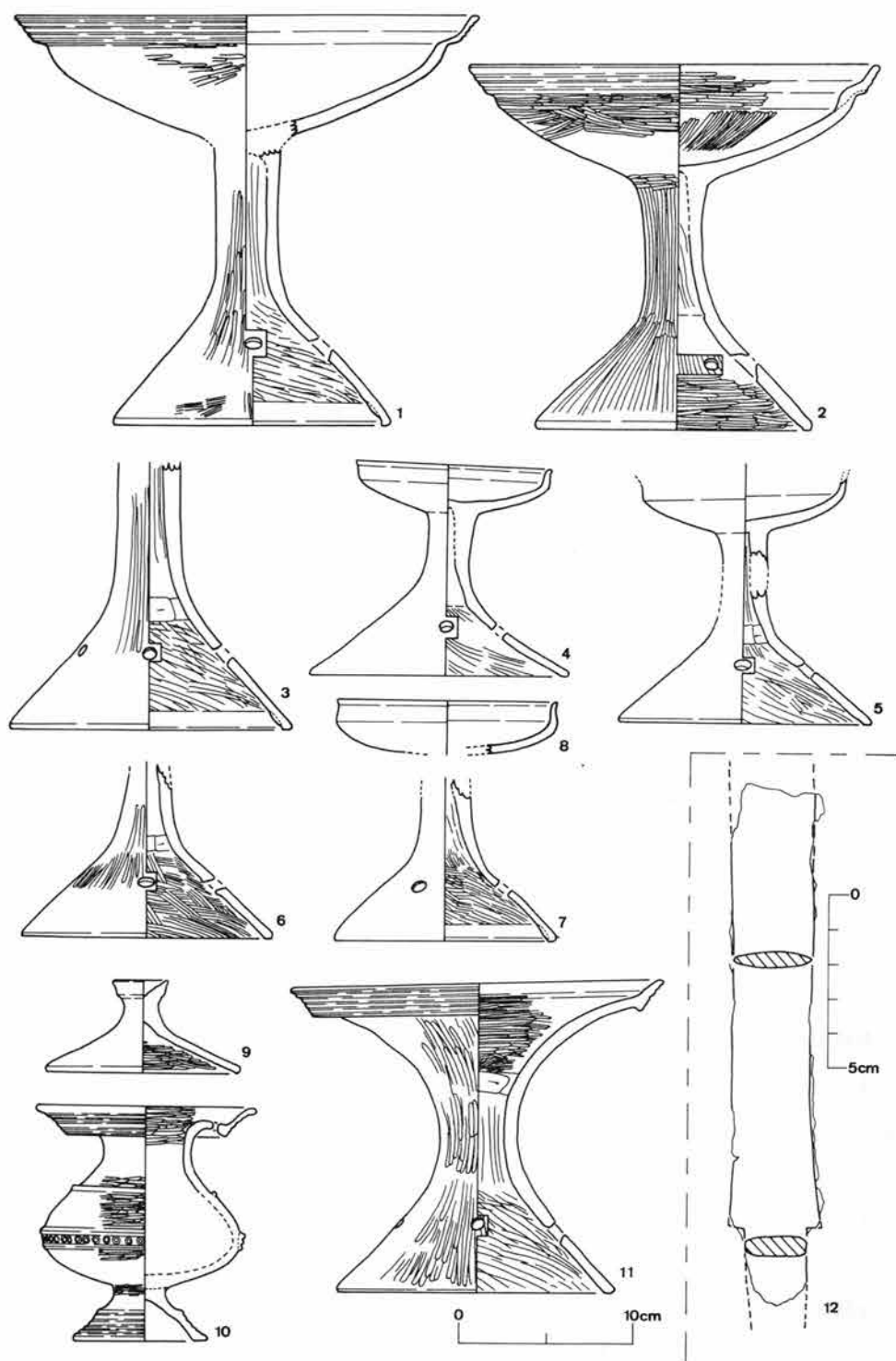
大型高杯はA a 1・3、A b 2の2種に分類される。大型高杯A a 1は浅い椀状の杯部から、複合口縁形を呈する口縁部へ続く。口縁部外面には4条の擬凹線文を施す。脚部は中空の柱状部から裾開きとなる。脚部内面は粗いハケ目調整を施したのち、脚端部に粘土



第14図 土坑1実測図

帯を貼り付け肥厚させる。杯部外面および脚部外面は、ていねいなへら磨き調整により仕上げられる。透し孔は4か所認められる。2は脚部のみ遺存するが、1と同様の技法により作られる。透し孔は4か所認められる。

大型高杯A b 3は全体の形状はA aと大きく変わらないが、脚部の造りが端部に粘土帯を貼り付けることなく単純に終わる。また、脚部内面もていねいなへら磨き調整により仕



第15図 土坑1 出土遺物実測図

上げられている点で相違する。口縁外面には3条の擬凹線文を施す。

高杯は脚部の形状からBa 4・5・8, Bb 6, Bc 7の3種に分類される。高杯Ba 4は脚部の2/3を失う。浅い椀状の杯部をもち口縁端部を外方へつまみ出す。脚部は中空の柱状部から大きく裾開きになる。内面に粗いハケ目調整が部分的に認められる。透し孔は1か所のみ確認できる。5も4同様の形態を示す。透し孔は1か所。杯部のみ遺存する8も同様の脚部をもつものと考えられよう。

高杯Bb 6は脚部のみ遺存する。大型高杯の脚部を縮小した形態をとる。外面へラ磨き調整、内面はハケ目調整により仕上げられる。透し孔は1か所。

高杯Bc 7は脚部のみ遺存する。プロポーションは高杯Bbと同形態である。外面は摩滅のため調整不明であるが、内面は大型高杯Aa同様、粗いハケ目調整の後、端部に粘土帯を貼りつけ肥厚させる。透し孔は3か所。

蓋9は壺用の蓋と思われる。出土遺物の器種構成からみて脚付装飾壺10とセットになる可能性が高い。つまみには擬凹線を施さない。外面は摩滅のため調整不明であるが、内面はていねいなへラ磨き調整で仕上げる。

脚付装飾壺10は胴部の強く張った玉葱状の体部を呈し、頸部とは粘土紐を貼り付けた断面三角形の突帯により画される。頸部から大きく外反する口縁部へと続く。脚部は裾開きとなり、中位に段をもつ。口縁部外面に5条、脚部外面に5条の擬凹線を施す。体部中位には幅1.2cmを測る張り付け突帯を付し、突帯中央部に密に径4mmを測る円形竹管文を巡らす。また、受け部は焼成後2か所の穿孔を施す。調整は外面および受け部をていねいな横方向のへラ磨き調整により仕上げる。

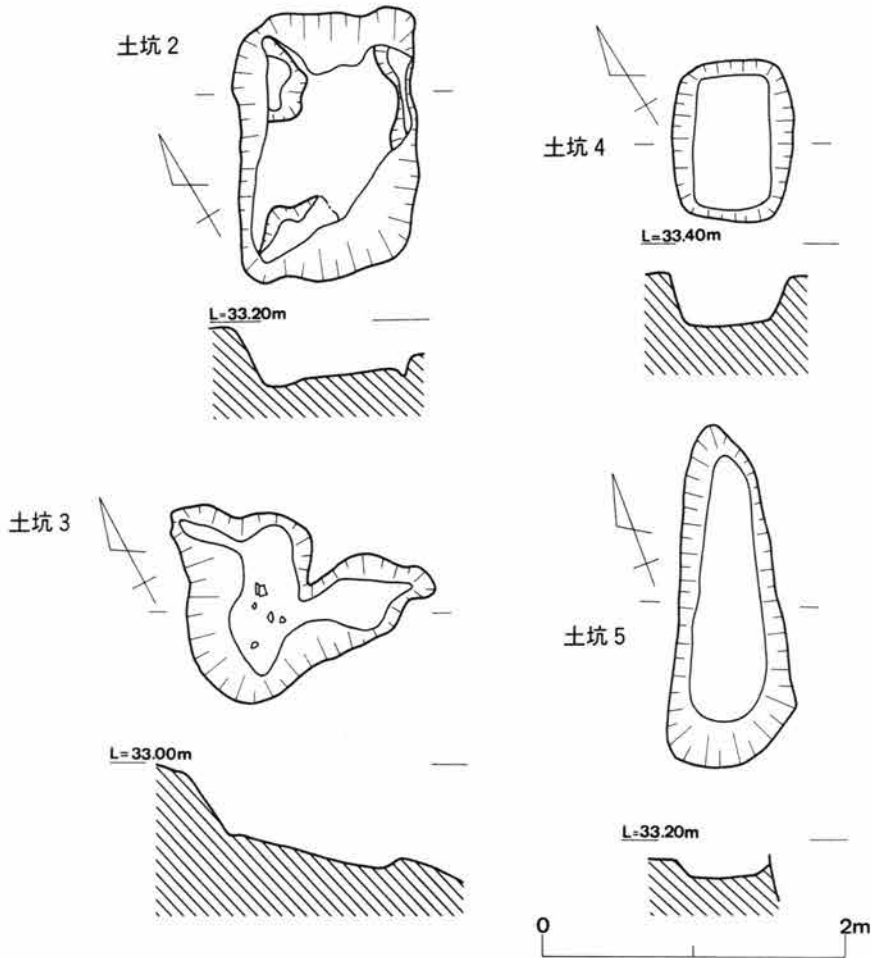
器台11は斜め上方に立ち上がる受け部から、口縁部を上下に拡張して面をつくる。柱状部から裾開きとなる脚部を有する。口縁部外面に5条の擬凹線を施す。外面および受け部をていねいなへラ磨き調整、脚内面は粗いハケ調整により仕上げる。透し孔は4か所。

**b 鉄製品** 鉄剣12 刃部および茎部の大半を欠く。両関で断面レンズ状をなす。

**土坑2** (第16図) 墳丘東肩部で検出した。平面形は不整形な長方形を呈する(長1.7m・幅1.2m・深さ0.4m、主軸N34°E)。床面に浅い掘り込みをもつ。出土遺物はなく、時期・性格については不明である。

**土坑3** (第16図) 土坑2の下方で検出した不整形な土坑である。埋土より若干の弥生土器片が出土しているが、図化するにいたらなかった。

**土坑4** (第16図) 土坑1の東側で検出した。地山を掘り込んでおり、平面形は隅丸長方形を呈する(長1.1m・幅0.8m・深さ0.3m・主軸N32°E)。出土遺物はなく、時期・性格については不明である。



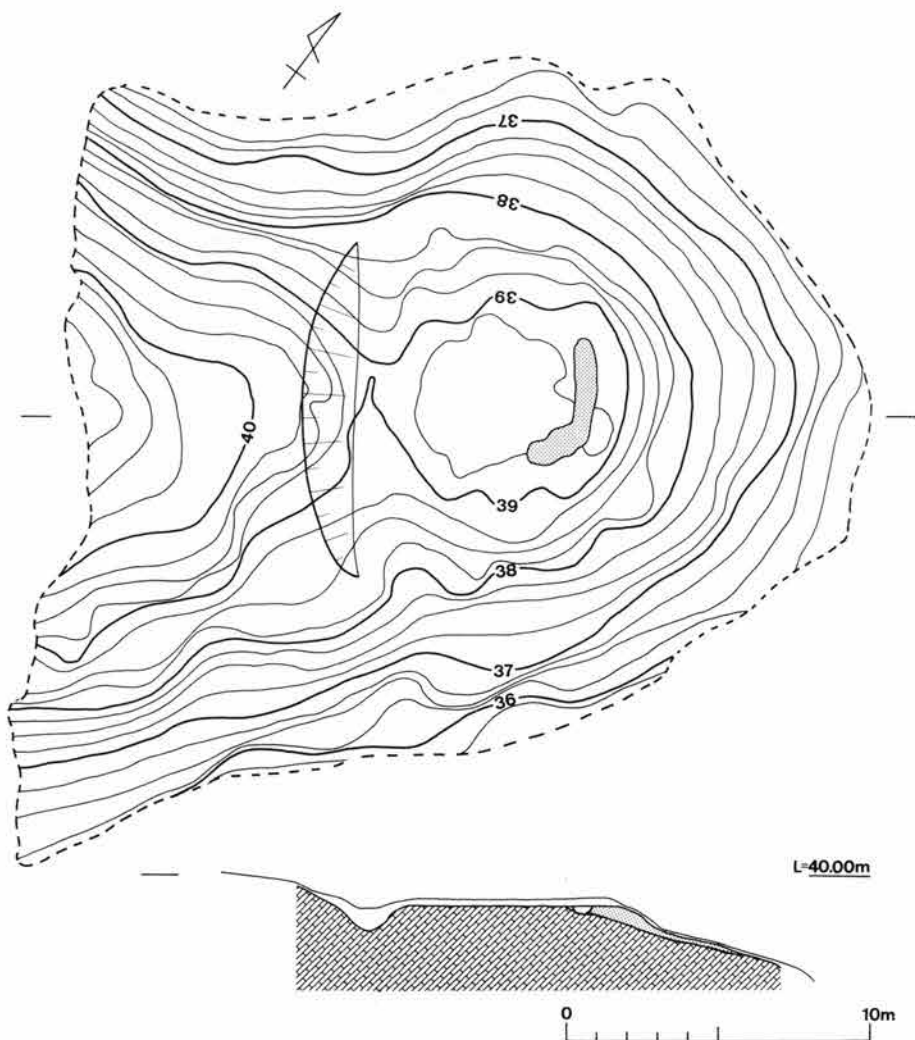
第16図 土坑2～5実測図

**土坑5** (第16図) 土坑4の北側で検出した。土坑南端の丸い長方形プランを呈する。第1主体部に長辺を切られることから、第1主体部に先行することは確実であるが、出土遺物はなく詳細な時期・性格については不明。規模は長さ2.3m・幅0.8m・深さ0.1m。

③**下後1号墳**(第17図) 太田4号墳とは丘陵をひとつ隔てた西尾根端部に位置する円墳である。墳丘は地山整形と若干の盛土で形成し、径12m・高さ1.6mを測る。高位側丘陵とは幅2mを測る溝により画される。墳丘は後世の削平を受けており、主体部を検出することはできなかったが、墳丘中央部の地山直上より完形の鉄剣1点が出土している。原位置をとどめている可能性もあり、本来は木棺内に副葬されたものとする。古墳に伴う遺物として、土師器碗が1点、溝最下層より出土した。

古墳に伴わない遺構として、墳丘の東肩より北肩にかけて「く」の字状に掘られた溝を





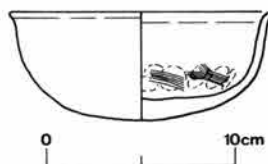
第17図 下後1号墳地形図

検出した。埋土から黒色土器細片が出土しているが図化するにいたらなかった。性格は不明。

**下後1号墳出土遺物** 下後1号墳からは、土師器1点、鉄剣1点が出土している。

**土師器(第18図)**は、椀である。底部はやや丸みを帯び、口縁端部は外上方へつまみだす。外面は調整不明、内面にはハケ目調整を施す。内外面とも丹塗りである。

**鉄剣(第19図)**は、部分的に欠損している。断面菱形を呈する。



第18図 下後1号墳出土遺物実測図(1)

④下後5号墳(第20図) 下後1号墳の西側の丘陵に位置する。現状径15mを測る円墳である。5号墳については、墳丘裾部分の調査であったため、墳丘北側に幅1m・長さ7mの試掘トレンチを設定し掘削を行った。その結果、自然地形の傾斜が確認され、明確な墳丘裾をもたないことが判明した。

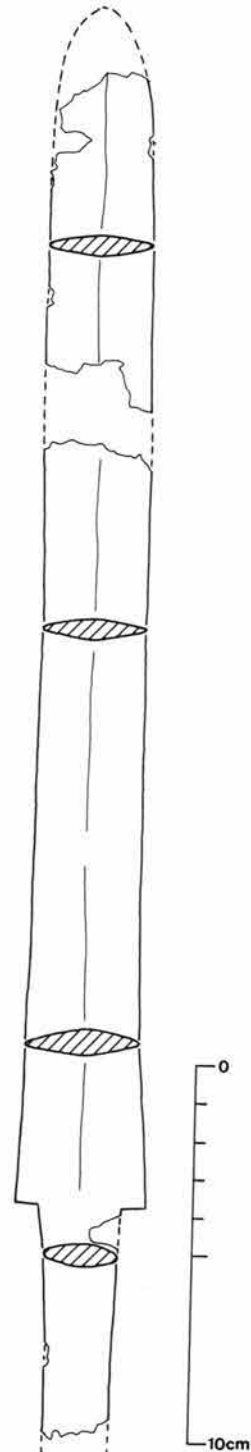
## 5. ま と め

太田古墳群は32基の古墳が尾根稜線上に隣接して分布する。今回の調査では、太田古墳群の最北端に位置する2基の調査を行った。また、下後古墳群は2つの尾根にまたがり分布する。今回はそのうち1号墳については全面発掘を、5号墳については試掘トレンチによる調査を行った。以下、今回の調査成果について、唯一主体部を確認することのできた太田4号墳を中心にまとめを行い、若干の問題点を提示し、結びとしたい。

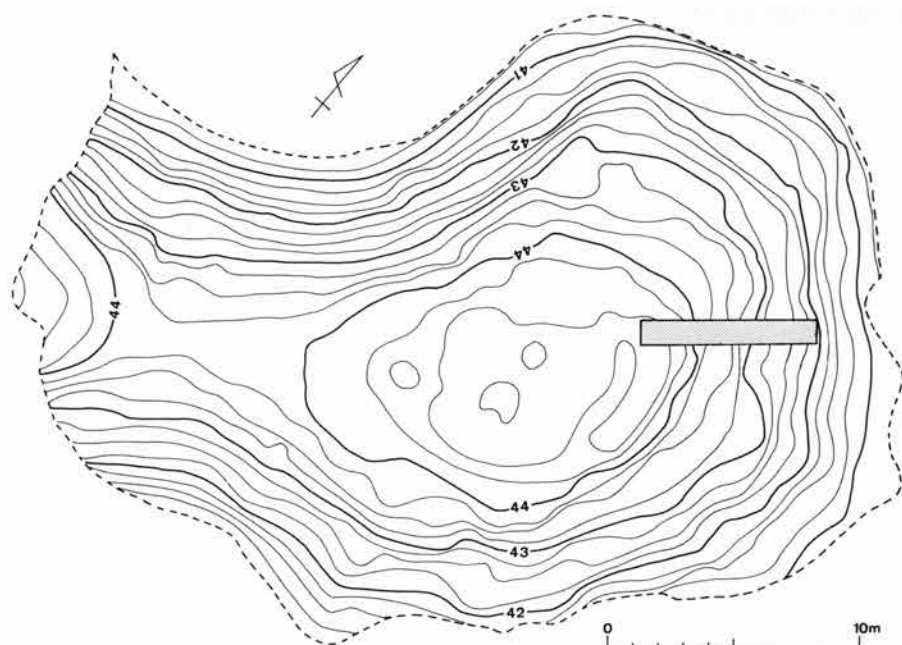
太田4号墳からは3基の埋葬施設を検出した。いずれも、組合式箱形木棺を直葬する形態をとる。切り合い関係・出土遺物から、第3主体部→第2主体部(6世紀前半)→第1主体部(6世紀中頃)の順に構築されたことが明らかとなった。第1主体部は出土遺物から年代を確定できないが、第2主体部と主軸をほぼ同じくすることから、第2主体部とそれほど隔たらない6世紀初頭を前後とする時期を考えるのが妥当であろう。

第3主体部出土の遺物の構成は、鉄斧・刀子と、極めて貧弱な内容である。こうしたわずかな鉄器類を副葬する点は、須恵器採用以前の木棺直葬墳と共通する要素である。現在まで、竹野川流域で調査された木棺直葬墳の大部分がわずかな鉄器を副葬するものであり、前・中期の小古墳の特徴と考えることができる。太田4号墳第3主体部は中期古墳文化の流れのなかで理解することが可能と考える。

第1・2主体部は須恵器を副葬する主体部であった。現在、丹後半島において、古墳出土の須恵器はTK208併行期から確認されているが、須恵器の副葬が一般化するのには太田2号墳などMT15型式からと考えられる。太田4号墳第2主体部出土の須



第19図 下後1号墳出土遺物実測図(2)



第20図 下後5号墳地形図およびトレンチ配置図

恵器もMT15型式に比定することができ、丹後半島における一般的な傾向を示すものとして理解することができよう。

最終埋葬である第1主体部(TK10型式)では、棺上および墓壇埋土内より須恵器が13点出土した。竹野川流域で、棺外から多くの須恵器が出土した木棺直葬墳として、桃山1号墳(MT15型式)・太田2号墳(MT15型式)などがあげられる。太田2号墳は埴輪列をもつ大型円墳、桃山1号墳は豊富な武器・馬具を副葬するなど、当該期木棺直葬墳に比べ、墳丘・副葬品の上で格差が認められる。また、棺内出土の須恵器蓋杯は転用枕として使用されたと考えられる。須恵器転用枕は、鳥取県を中心に兵庫県北部から京都府北部まで広範囲に分布し、丹後半島では現在までに本例を含めて、13古墳・17主体部が知られている。

弥生時代では、弥生時代後期末の主体部1基を検出することができた。太田1・2号墳でも過去に弥生時代後期の土器が採集されており、弥生時代後期、当丘陵が墓域として利用されていたことが考えられ、今後の調査で充分注意する必要があるものと思われる。

最後に下後1号墳の年代に触れておきたい。下後1号墳からは土師器・鉄剣が出土している。当地域の土師器編年の確立していない現段階で即断することは危険であるが、6世紀代に入るものとして大過ないものと思われる。また、鉄剣の副葬例は5世紀代を中心とし6世紀に入ると極端に減少する。以上の点から6世紀初頭を考慮しておきたい。

(増田孝彦・石崎善久)

(2) 川向<sup>かわむかい</sup>1号墳

1. はじめに

平成元年度の熊野郡久美浜町内における丹後国営農地関係の発掘調査は、大井地区に計画されている大井団地内の川向1号墳、山形古墓、山方古墳状隆起の調査を行った。川向1号墳は4月12日から7月20日、山形古墓は7月17日から8月18日、山方古墳状隆起は7月18日から20日にかけて調査した。このうち、山方古墳状隆起では顕著な遺構・遺物は確認されなかった。山形古墓については一部平成2年度に調査を行う予定であり、ここでは川向1号墳の調査について報告し、山形古墓の調査については、残りの調査が終了した来年度に報告することにした。

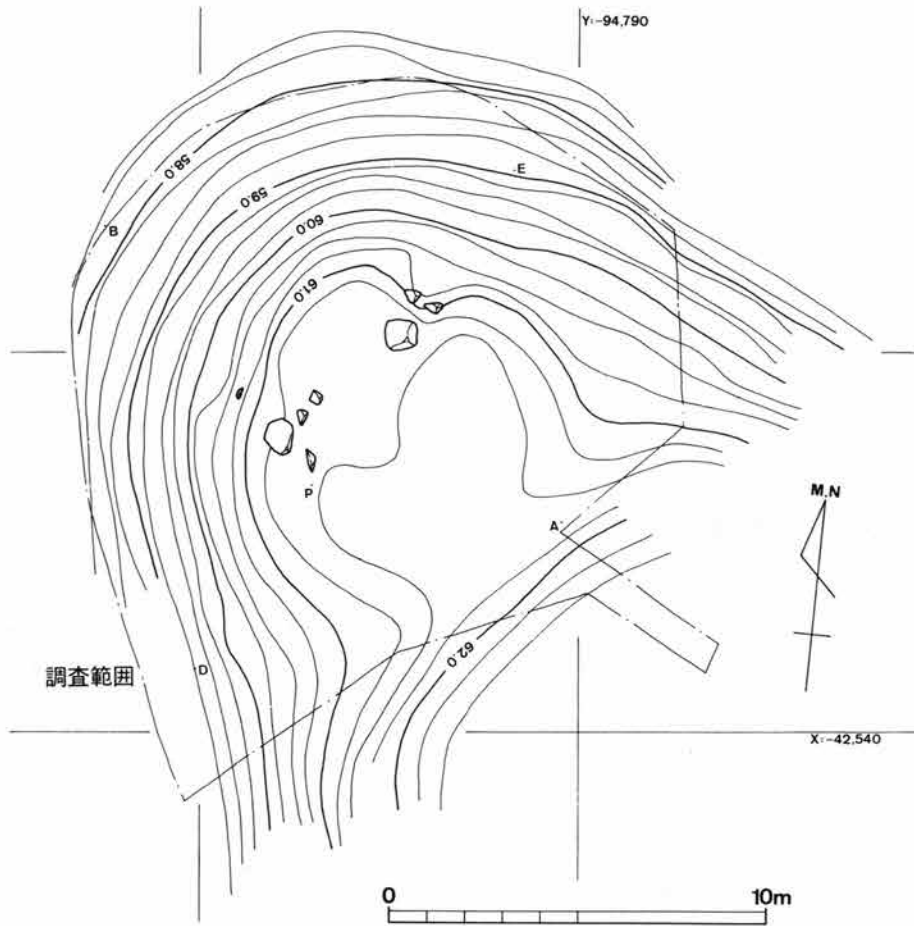
2. 位置と環境

川向1号墳は久美浜町大字大井小字川向に所在する。当古墳は久美浜湾の南東約3 km



第21図 調査地位置図(1/50,000)

1 : 川向1号墳    2 : 山形古墓群    3 : 山方古墳状隆起    4 : ラクビ古墓群



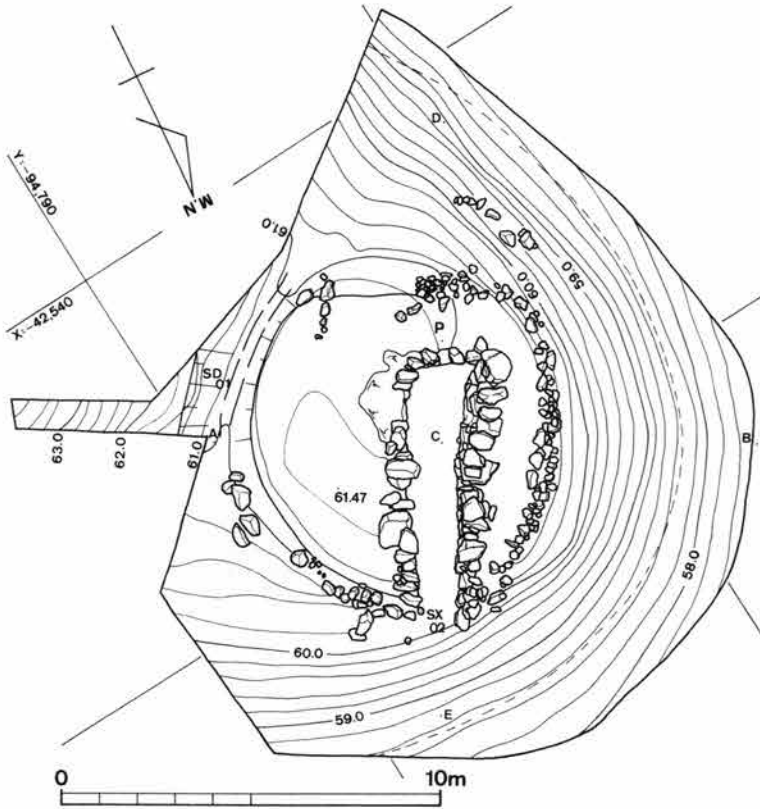
第22図 調査前墳形測量図

に位置し、比高差約50mの東から西にのびる丘陵の端部に造られていて、眼下には佐濃谷川が流れる小さな平野が広がる。この古墳の周辺には数基の古墳があり、小さな古墳群を形成している。その古墳群の中でも1号墳は最高所に位置している。この古墳群を築造した在地勢力のなかで、中心をなす被葬者・家族を葬った古墳と捉えることができよう。

### 3. 調査概要

調査着手前の現地では、腐植土の間から石が散見され、石室部分と墳丘の東側の墳丘裾の溝が若干の窪地になっていた。調査前の推定石室中央ライン(D-E)とそれに直交する任意のライン(A-B)の交点を点Cとし、D-Eライン上に点Pを設定し、測量の基準点として調査を行った。以下、各項目を掲げて概述する。

①墳丘 こ  
 の古墳の墳形は丘陵端に造られていることもあり、墳丘の北・南側で大きく開く形態をとるが、円墳と認められる。墳丘の規模は東側には自然の尾根と古墳を区画する溝(SD01)が造られているが、他は墳丘と自然の地形とを画する溝や列石はなく、

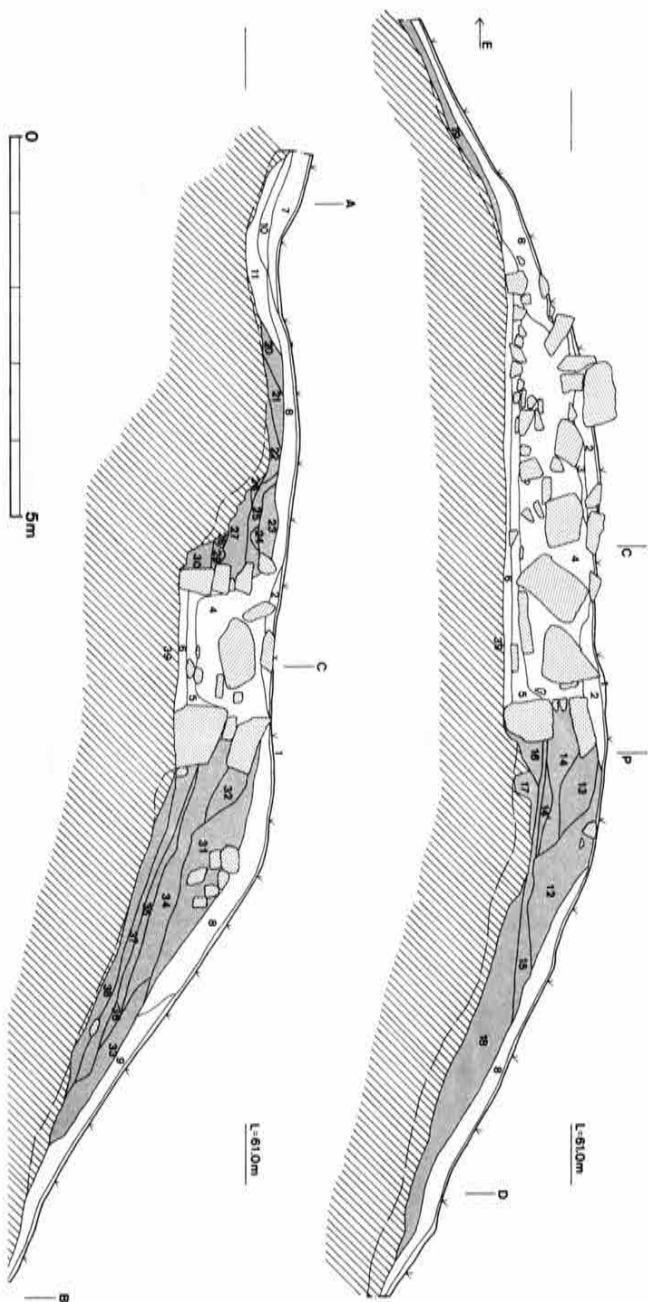


第23図 調査後墳丘測量図

く、平面的にも墳丘裾の傾斜変換点の見極めが困難であった。そこで、各墳丘土層で認めた盛土の範囲から墳丘裾を推定し、丸く巡る西側の円弧から復原すると、直径約16mの値を得る。墳丘の上部は削平されており、石室の天井石は一石も石室に架かっていない。封土は約3mの高さを残していた。

土層はD-E, A-Bに沿ってトレンチを設定して観察した(第24図)。大きく、地山-盛土-流出土に分かれる。石室・SD01は地山を削って造られている。盛土は15層の下面のように平坦な面が見られ、墳丘築造の作業工程の一端が窺える。また、37・38層のように、古墳築造以前の旧地表・土と推定できる土層を確認した。

②列石 墳丘の表土・流出土を剥ぐと墳丘斜面上端部付近で、羨門から墳丘を巡る列石が一部二重に検出できた。丘陵奥に続く墳丘東側では検出できず、転落石もないことから、当初から東斜面には構築されなかったと判断できる。それに対して盛土を高く行っている北・西・南側では丹念に石を積んでおり、残りのよいところで4段にわたって構築していた。断面で観察すると、その内の2～3段は盛土の中に埋め込まれていた。封土の流出を



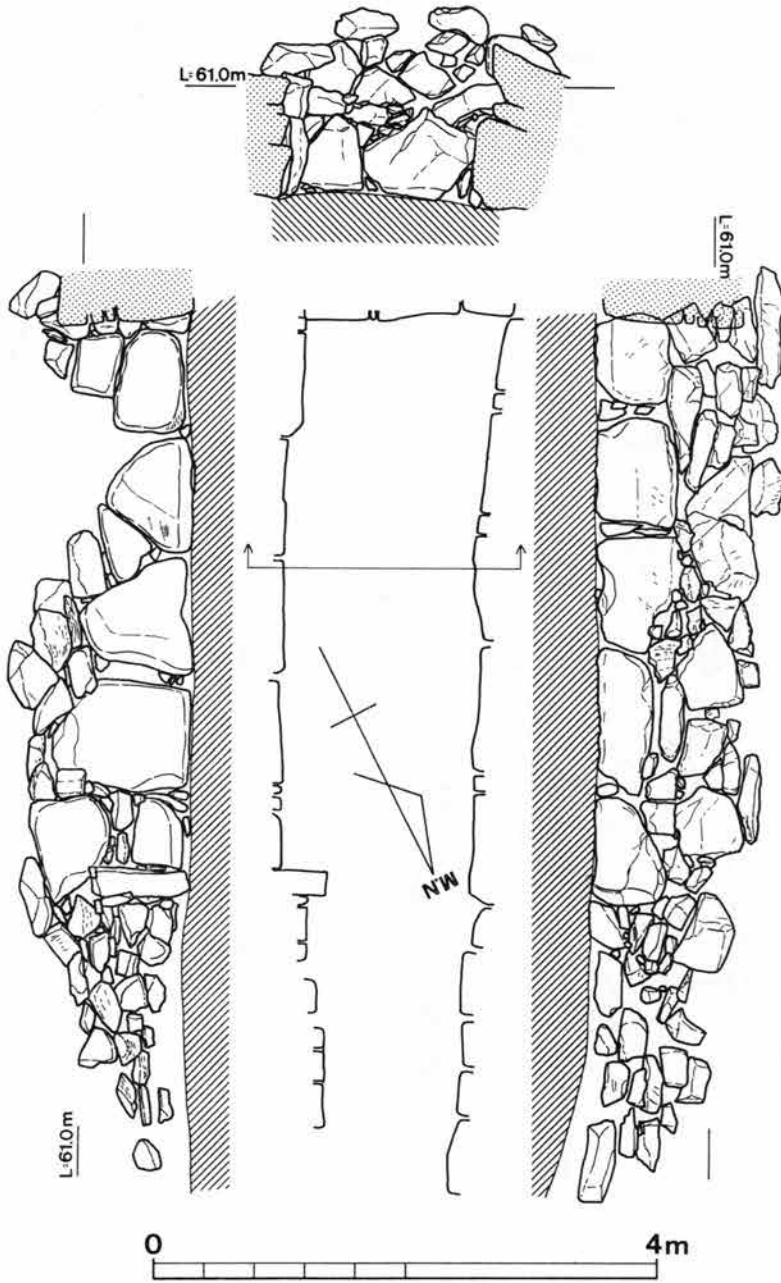
第24図 墳丘及び石室内土層実測図

- 1 : 表土    2~6 : 石室内埋土    8・9 : 墳丘流出土    10・11 : SD01内埋土    12~16 : 墳丘盛土    17~18 : 旧表土等    19 : 地山
1. 表土    2. 暗褐色土    3. 黄茶色粘質土    4. 茶褐色土    5. 茶褐色土(かたい)    6. 暗茶褐色土    7. 茶褐色土
8. 褐色土    9. 暗褐色土    10. 黒褐色土    11. 茶褐色土    12. 黄茶色土    13. 黄褐色土    14. 黒褐色土混じり
- 黄褐色土    14' : 黒褐色土混じり明褐色土    15. 黒褐色土    16. 黒褐色土・黄褐色土・明褐色土の縞層    17. 淡黄褐色土(かたい)
18. 明褐色土    19. 淡褐色土    20. 淡茶褐色土    21. 明黄褐色土    22. 褐色土    23. 黄茶色土
24. 暗褐色土    25. 淡茶褐色土    26. 黄褐色土(やや汚れあり)    27. 暗黄褐色土    28. 黄褐色土    29. 暗茶褐色土
30. 茶黄色土    31. 明黄褐色土    32. 暗茶褐色土    33. 淡褐色土    34. 暗黄褐色土    35. 黄褐色土    36. 淡茶褐色土
37. 黒灰色土(旧表土)    38. 淡黄褐色土    39. 黄褐色土(地山)

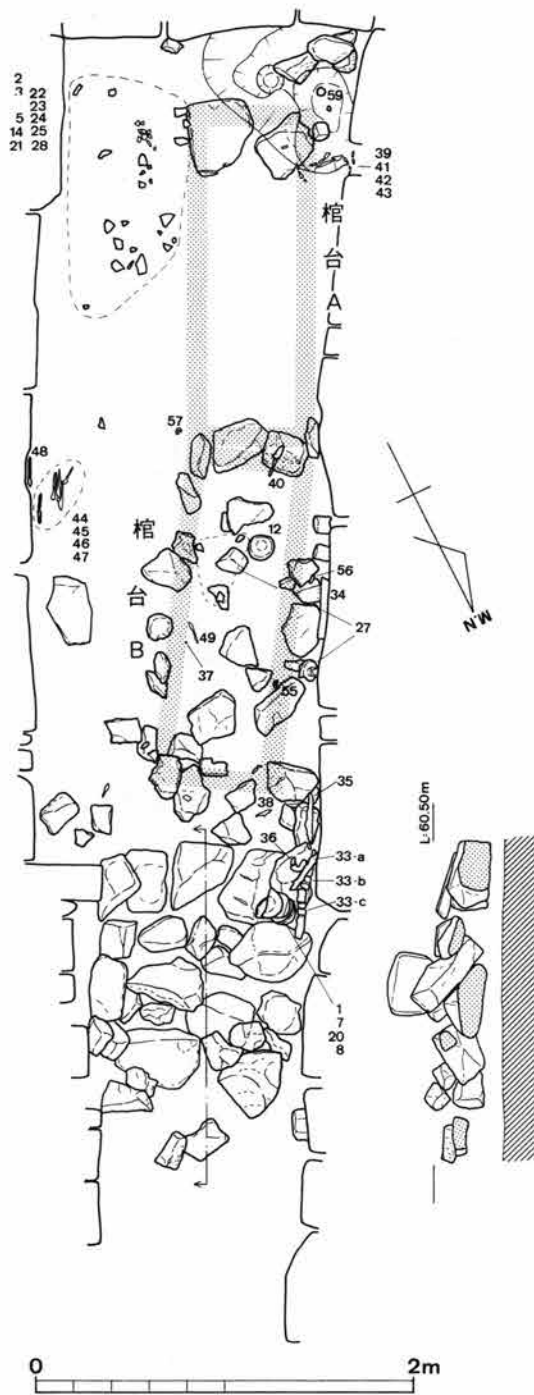


第25図 石室及び列石実測図

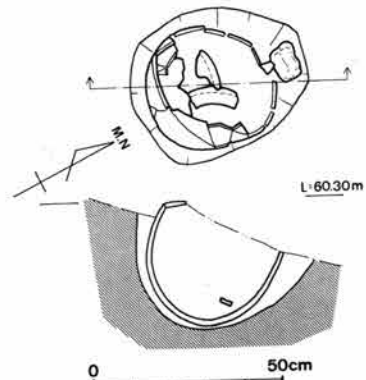




第26図 石室実測図



第27図 石室内遺物出土状況実測図(付・閉石塞見通し図)

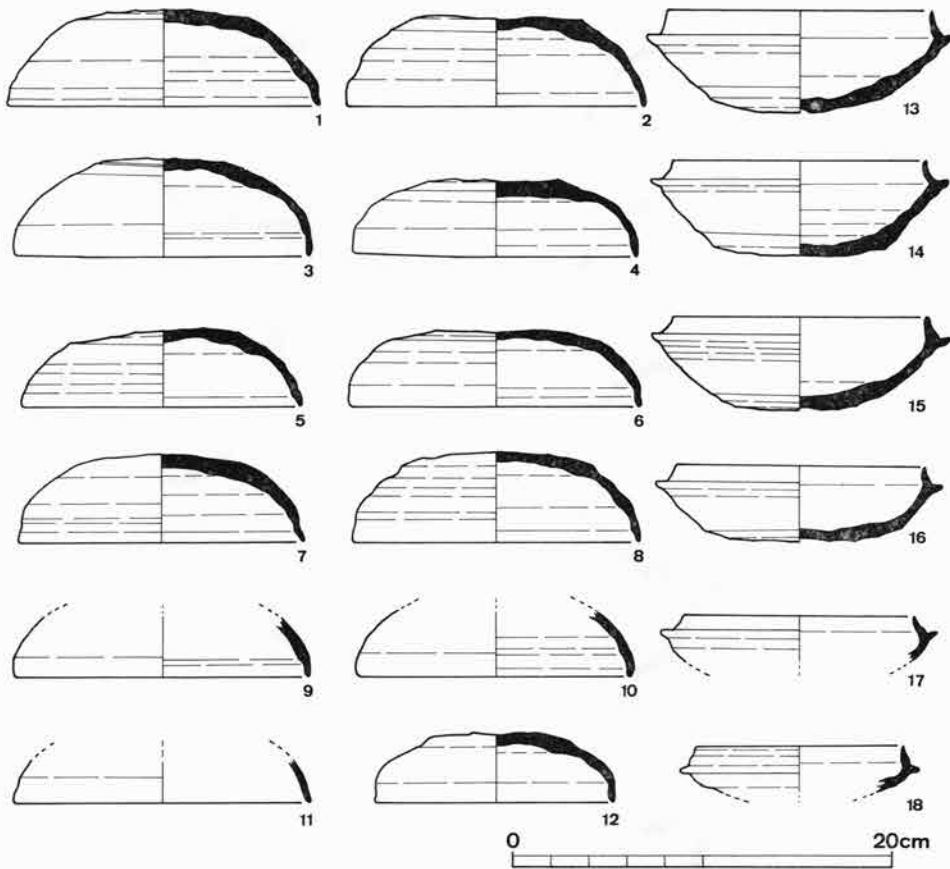


第28図 SX02実測図

考慮すると、築造時にはこれらの列石はすべて封土の中に埋め込まれ、表面には出ていなかったと推定できる。高く盛土を行っている範囲に石組を埋め込んでいることから、墳丘盛土の流出を防ぐための施設と考えられる。また、南・北・西側ともに本来は二重に構築されていたのであろう。

③内部施設 内部主体は横穴式石室で、天井石は一石も原位置をとどめていない。右側壁は石室内部に向けて傾斜——通常に持ち送りするが、左側壁は外側に傾斜する。築造当初からの傾斜とは考えにくく、後世の強い力——例えば地震などのためと想像される。

玄室内に棺台と推定される配石を検出した。その配置から二組の棺台を置く空間が復原できる(後述)。羨道部では閉塞石の痕跡と考えられる石積みを検出した。

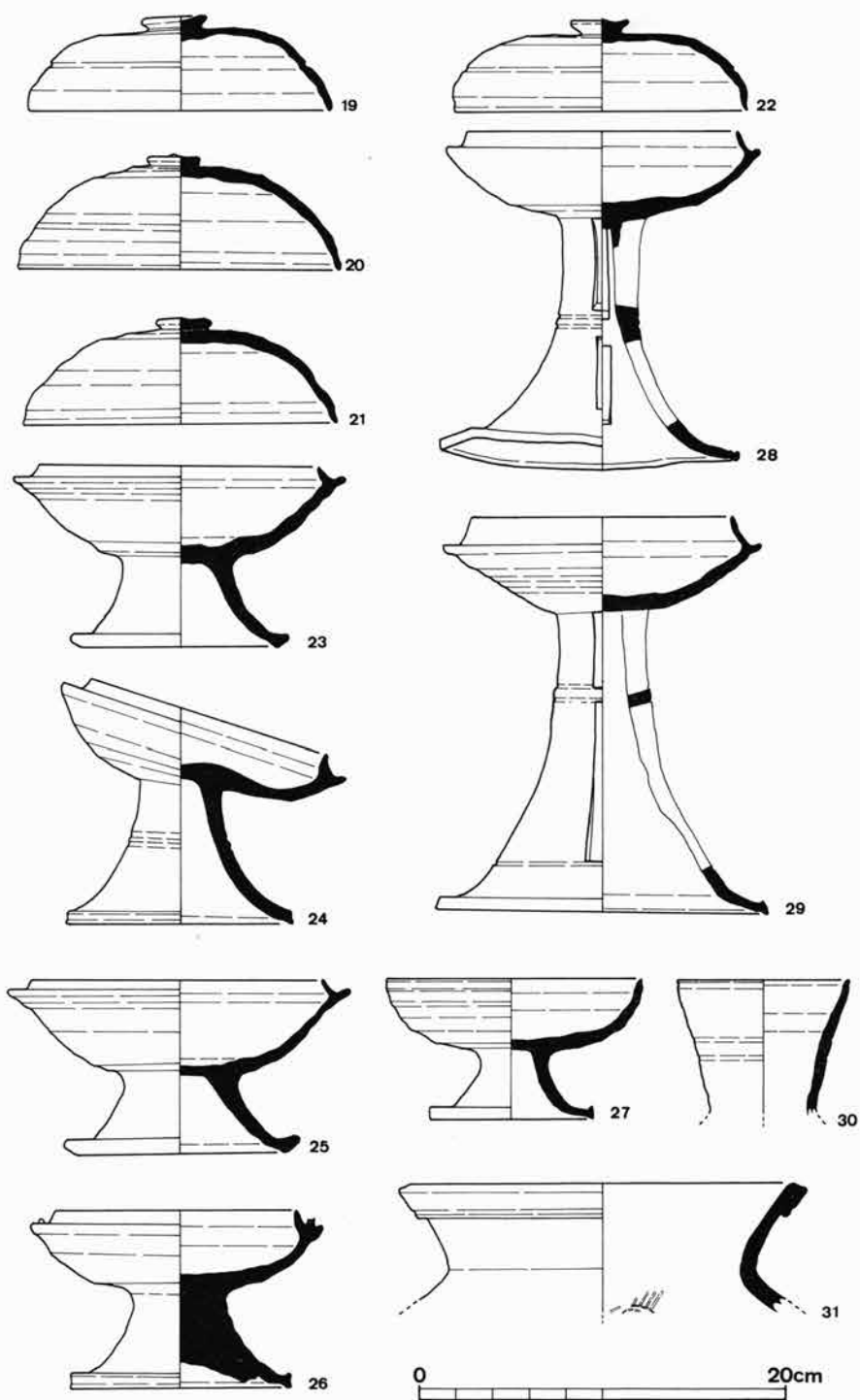


第29図 出土遺物実測図-1 (石室内・SD01)

羨門には列石が墳丘を巡り取り囲んでいるため、検出時の位置が当初の羨門と捉えて大過なく、石室は面的には完存しているといえよう。各部長を掲げておく。玄室長4.35m、玄室奥壁部幅1.58m、同玄門部1.50m、羨道長2.62m、羨門幅(玄門部)1.12m、同(羨門部)0.97m、玄室高1.48m(現存高)、羨道高0.96m(現存高)である。

④SD01 SD01では多くの土器を検出した。これらの土器は溝底から浮いて、第24図10の土層中であつた。このことから、埋葬時とは若干の時期差があり、埋葬に伴う祭祀に関係する土器群とは考えにくい。玄室右側壁部に盗掘坑を検出している。石室内で細片のみが出土した右奥壁近辺の土器とSD01内で検出した土器とが多く接合した。これらのことから、SD01で検出した土器は、石室内の盗掘の際に廃棄したものと考えられる。また、埋葬面の他の地点から出土した土器とSD01の土器とは接合関係が全くないことから、上述の部位にあつた副葬品のみが盗掘の対象になったものと推定される。

⑤石室内遺物出土状況及び追葬 石の配置から棺台が2か所あつたと推定される。奥壁



第30図 出土遺物実測図-2 (石室内・SD01)

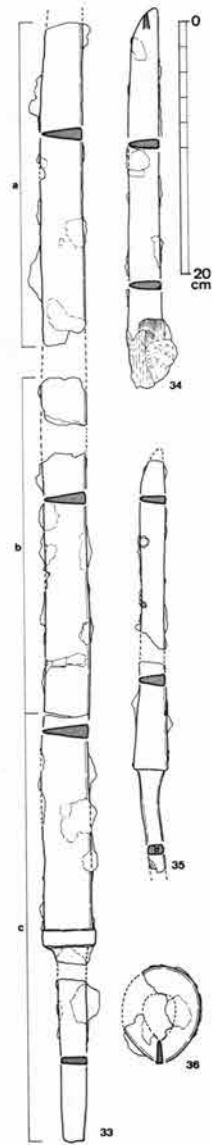
から棺台A・Bとすると、閉塞石上に置かれた土器・鉄器などをはじめ、棺台Bに伴う副葬品は比較的残っている。一方、Aに対する副葬品は盗掘によりあらかたなくなっており、SD01内でその廃棄された土器を検出している。さて、棺台の石列を奥壁より第一～三列とすると、それぞれの棺台が第二列を共有する形であるが、その石の配列状況から、第二列は棺台Bに伴うものと判断される。棺台Bが棺台Aに後出し、棺台Bを組む際に棺台Aの第二列を取り壊して組み直したといえる。これは、それぞれに副葬された土器の年代観の先後関係と矛盾しない。

⑥SX02 石室の羨門部で検出した土器の埋納である。内部には何も納められていなかった。6世紀後半以降の年代観が与えられるが、石室内の埋葬との時間的な関係はよくわからない。

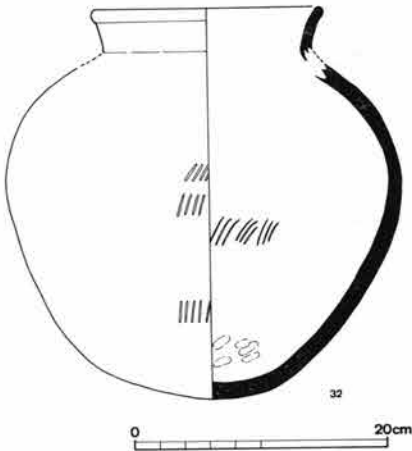
#### 4. 出土遺物

遺物は石室内(石室内堆積土を含む)、SD01、墳丘流出土より出土した。出土した遺物は古墳時代後期の遺物のみである。概して、副葬品の残りは悪く、これは先述のように盗掘を受けたためであろう。石室内とSD01とで接合する各土器は、概ねSD01から出土したものが大きな部位を占める。

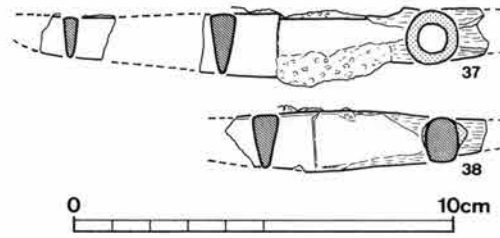
各個体数を見ると、須恵器は杯身(12)・杯蓋(6)・長脚高杯(2)・低脚高杯(5)・高杯蓋(4)、壺(2)・甕(1)がある。墳丘



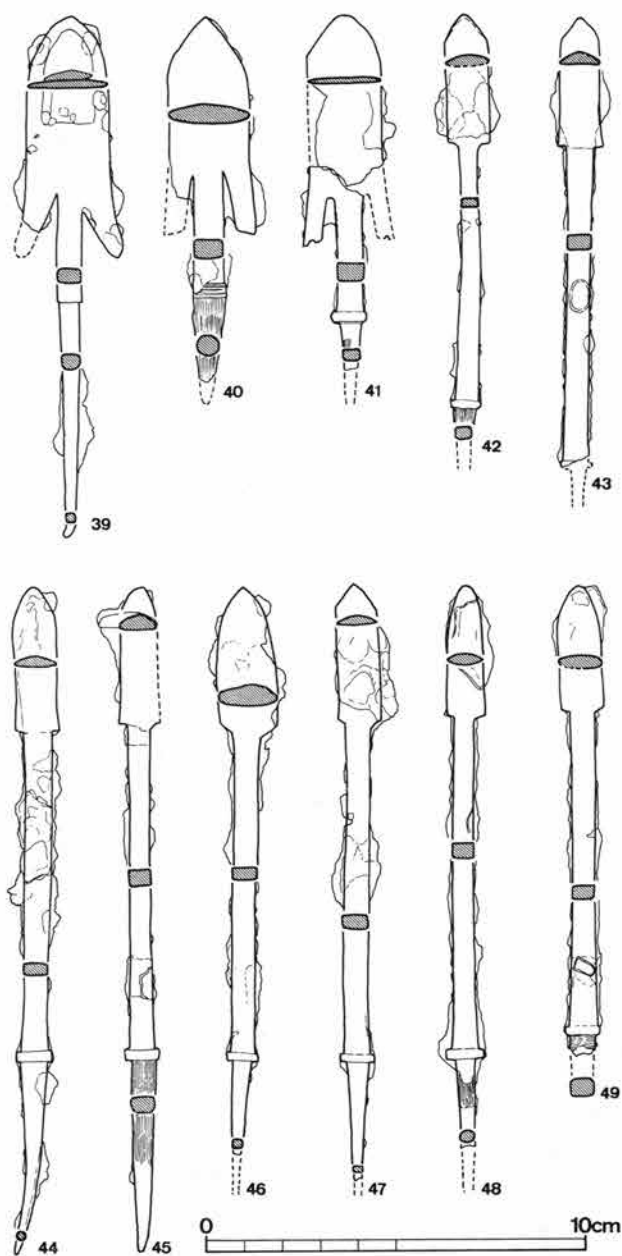
第32図 出土遺物実測図-4 (石室内)



第31図 出土遺物実測図-3 (SX02)



第33図 出土遺物実測図-5 (石室内)

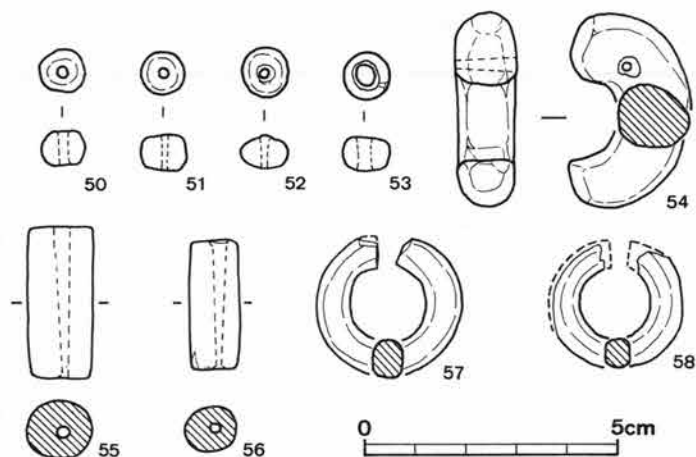


第34図 出土遺物実測図-6 (石室内)

流出土から甕・壺の体部片が整理箱1箱程度出土しており、口縁は31だけである。甕・壺の体部片は、埋葬面・SD01では出土していない。また、土師器は一点も出土しなかった。鉄器には刀(3)、小刀(3以上)、鉄鏃(20本以上)がある。装身具類は、耳環(2)・勾玉(1)・切子玉(2)・管玉(2)・小玉(4)、紡錘車(1)が出土した。

杯身・杯蓋は、2タイプに分類される。第29図の1～12は杯蓋で、天井部が丸く、口縁端部も丸く仕上げる。1～6は天井部の約1/3にわたってヘラ削りし、丸く調整している。口径に比べ器高が高いもの(1～3)と浅いもの(4～6)とがある。7～12は天井部にヘラ削りを施さずに、ヘラ切り未調整で仕上げています。器高・口径ともに先のものに比べて、小型化している傾向がある。7は端面に折

り返しが明瞭になされており、古い様相を示すが天井部の段がなく、全体に新しいものと判断される。杯身は、杯蓋に比して個体数が少ない。13・16は底部をヘラ削りして丸く仕上げる。17・18については不明である。口径・器高の大きいもの(13～15)と小さいもの(16～18)がある。19～22は有蓋高杯の蓋で、胎土・焼成から21は23の低脚高杯と、22は28の



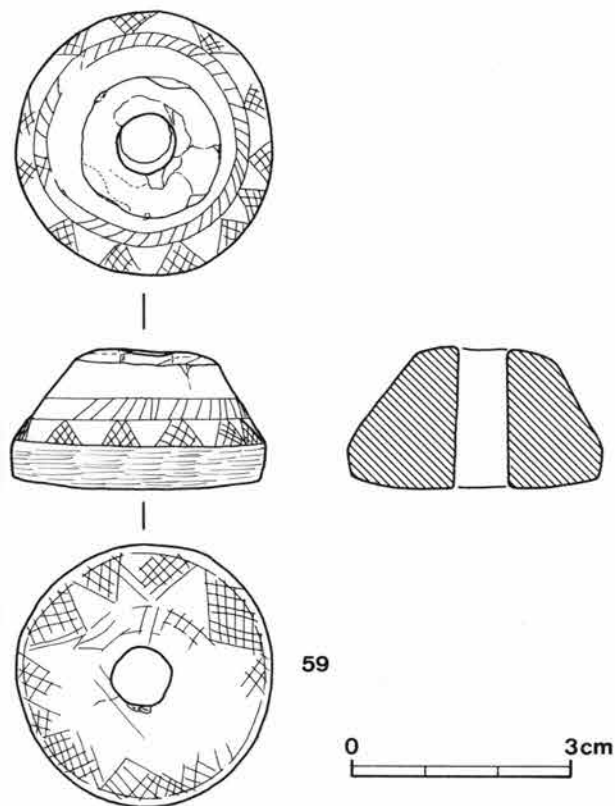
第35図 出土遺物実測図-7 (石室内)

長脚高杯とそれぞれ対をなす。

32はSX02に埋められていた土器である。外面はタタキの後に横方向のカキ目で消している。また内面には青海波文がかすかに残る。色調・焼成は土師質であるが、調整やプロポーションから生焼け

の須恵器と判断される。

33の鉄刀は、検出した際に大きく3片に割れて折り重なって出土した。aについてはb・cと同一個体である確証はないが、可能性が大きい。36の鏝は33と同一場所で出土しており、セットになる。34の刀、37・38の刀子には、把に鹿角が残存している。これらの利器類はすべて棺台Bに伴う位置から出土しており、棺台Aに伴うものはない。42～49は細根式のものである。42～48は一括で出土し、大きさがよく揃っている。50～53の小玉は、すべてガラス製で、府内には64か所の古墳で出土



第36図 出土遺物実測図-8 (石室内)

(注22)  
59の紡錘車はよく使用されていたらしく、底部・側面に擦痕が無数につき、文様が摩耗している。

付表3 川向1号墳 出土遺物一覧表

( )内は現存長 単位はすべて cm \* はほぼ完存

No	器形	器高	口径	底径	色調	残存	備考	出土地点
1	杯蓋	5.0	16.3		淡青灰	完形		閉塞石上一1
2	杯蓋	4.75	15.8		淡青灰	完形*		石室内埋葬面・S D01
3	杯蓋	5.3	15.6		淡青灰	完形		石室内埋葬面・S D01
4	杯蓋	4.1	15.0		暗青灰	完形*		S D01
5	杯蓋	4.1	14.8		灰白色	5/6	16とセット	石室内埋葬面・S D01
6	杯蓋	5.05	15.4		淡青灰	3/4		石室内埋土・S D01
7	杯蓋	4.7	15.2		淡青灰	完形		閉塞石上一2
8	杯蓋	4.85	15.2		淡青灰	完形	14とセット	閉塞石上一4
9	杯蓋	(3.1)	13.4		淡灰色	1/12	反転復原	墳丘東側流出土
10	杯蓋	(3.4)	14.2		青灰色	1/5	反転復原	羨門下流出土
11	杯蓋	(2.3)	15.6		淡青灰	1/10	反転復原	羨門下流出土
12	杯蓋	3.7	12.5		灰白色	完形		石室内埋葬面
13	杯身	5.35	13.8		淡灰色	完形*		S D01
14	杯身	5.1	14.3		淡青灰	完形	8とセット	石室内埋葬面・S D01
15	杯身	4.95	13.4		青灰色	完形*		S D01
16	杯身	4.1	13.1		灰白色	完形*	5とセット	S D01
17	杯身	(2.4)	12.1		淡青灰	1/6	反転復原	羨門下流出土
18	杯身	(2.4)	10.9		青灰色	1/6	反転復原	羨門下流出土
19	高杯蓋	5.25	16.5		淡青灰	完形		S D01
20	高杯蓋	6.1	17.5		淡青灰	完形		閉塞石上一3
21	高杯蓋	5.35	17.1		淡青灰	完形	23とセット	石室内埋葬面・S D01
22	高杯蓋	5.25	15.9		淡青灰	完形	28とセット 回転カキ目	石室内埋葬面・S D01
23	低脚高杯	9.85	15.8	10.6	淡灰色	完形*		石室内埋葬面・S D01 石室内埋土
24	低脚高杯	13.25	13.55	12.3	淡青灰	完形*		石室内埋葬面・S D01
25	低脚高杯	9.4	15.7	12.8	淡灰色	完形*		石室内埋葬面・S D01
26	低脚高杯	9.85	12.9	11.8	明灰色	完形*	底部・受け 部に重ね焼 きの痕	S D01
27	低脚高杯	7.8	13.7	8.8	青灰色	完形*		石室内埋葬面・埋土
28	長脚高杯	18.4	14.6	16.0	青灰色	完形*	スカシ2	石室内埋葬面・S D01
29	長脚高杯		14.0	18.1	淡灰色	完形*	スカシ3	S D01
30	長頸壺?	(9.2)	7.4		青灰色	2/3	提瓶か?	S D01
31	甗	(7.15)	20.7		淡青灰	1/4	反転復原	墳丘東・北側流出土
32	壺	31.0 推定	18.0		黄褐色	2/3	反転復原 生焼須恵器	S X02



No.	器種	全長	刃渡り	残存	備考	出土地点
33	鉄刀	88.2以上	71.4以上	完存	全長等は推定 36 とセット	閉塞石上
34	鉄刀	29.9	24.5		鹿角装	石室内埋葬面
35	鉄刀	33.4以上	25.4		全長等は推定	閉塞石上

No.	器種	長径	短径	残存	備考	出土地点
36	鉄罎	7.7	6.4	3/4	33とセット	閉塞石上

No.	器種	全長	刃渡り	残存	備考	出土地点
37	刀子	(11.7)	5.35	完存*	鹿角装	石室内埋葬面
38	刀子	(6.9)			鹿角装	石室内埋葬面
39	鉄鍬	13.7			石室内埋葬面	
40	鉄鍬	(9.6)	5.75	完存	茎に木質残存	石室内埋葬面
41	鉄鍬	(9.3)	6.1		茎に木質残存	石室内埋葬面
42	鉄鍬	(11.1)	3.4		茎に木質残存	石室内埋葬面
43	鉄鍬	(11.9)	3.5	完存	湾曲	石室内埋葬面
44	鉄鍬	17.5	3.8			石室内埋葬面
45	鉄鍬	17.5	3.6			茎に木質残存
46	鉄鍬	(15.0)	3.9	完存	茎に木質残存	石室内埋葬面
47	鉄鍬	(15.7)	3.6			石室内埋葬面
48	鉄鍬	(14.8)	3.4			石室内埋葬面
49	鉄鍬	(12.3)	3.3	完存	茎に木質残存	石室内埋葬面

No.	器種	径	厚さ	色調	残存	備考	出土地点
50	小玉	0.9	0.65	青色	完存	ガラス	石室内埋葬面
51	小玉	0.8	0.7	青色	完存	ガラス	石室内埋葬面
52	小玉	0.95	0.65	青色	完存	ガラス	石室内埋葬面
53	小玉	0.95	0.65	青色	完存	ガラス	石室内埋葬面

No.	器種	全長	幅	厚さ	色調	残存	備考	出土地点
54	勾玉	3.8	2.4	1.2	緑色	完存	片側穿孔・碧玉	石室内埋葬面

No.	器種	全長	径	色調	残存	備考	出土地点
55	管玉	3.0	1.2	緑色	完存	碧玉	石室内埋葬面
56	管玉	2.5	0.95	緑色	完存	碧玉	石室内埋葬面

No.	器種	外径	内径	厚さ	残存	備考	出土地点
57	耳環	2.9	1.5	0.8	完存	剥離甚だし	石室内埋葬面
58	耳環	2.7	1.4	0.5	完存	金環*	石室内埋葬面

No.	器種	上径	下径	高さ	孔穴	残存	備考	出土地点
59	紡錘車	1.95	3.45	1.85	0.8	完存	鋸歯文	石室内埋葬面

## 5. ま と め

久美浜町内には多くの古墳が分布しており、大きく佐濃谷川流域と川上谷川流域とに分かれている。町内では、湯舟坂2号墳や畑大塚1・2号墳、崩谷古墳群、アバタ古墳群等の発掘調査がなされているが、これらは川上谷川流域のものばかりであった。今回の調査は佐濃谷川流域の古墳の調査で、この流域の古墳の様相の一端が窺われる資料をえた。また、墳丘内に列石を持つ古墳は、府内では岩滝町千原古墳<sup>(注23)</sup>、但馬では箕谷2号墳<sup>(注24)</sup>や沢原5号墳<sup>(注25)</sup>などがあり、京都府北部と兵庫県北部の特色をなしている。(岩松 保)

注1 増田孝彦・三好博喜ほか「国営農地開発事業(丹後東部地区)関係遺跡昭和60・61年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987

増田孝彦・森 正・荒川 史ほか「国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡昭和61・62年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第29冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988

増田孝彦・中川和哉・荒川 史・森島康雄「国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡昭和63年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第34冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989

注2 調査参加者(順不同、敬称略)

東部地区 吉岡英一郎・横井川博之・三木英樹・村田文幸・藤原康生・山本克則・津金崇樹・高井明樹・水谷一宏・田村幸聖・大橋 敦・大西智也・山本和之介・岡本竜之・村上誠紀・山

- 崎 誠・下ノ村 実・佐藤哲也・一谷忠治・田頭繁雄・今西洋敏・山田和久・池上みさ・松井政子・三井小百合・坂井 晶・戸根説子・川口知香・石那田静香・藤原恵子・伊吹啓子・森本須都子・後藤嘉一郎・藤村多宏・高原与作・田中 正・山副 同・坪倉勇一・上田忠志・吉岡博・林 栄三郎・川戸利雄・松田正之・吉村 保・山副武志・松村 仁・古川亨・平林秀夫・吉岡 茂・行待守夫・深田志郎・藤原義夫・米田武志・谷口勝江・森戸寿美子・今西佳子・梅田重子・森野美智代・田辺末子・平林直美・林 初エ
- 西部地区 東 高志・西山辰玉・平林一馬・田中照夫・田中正省・秋田義和・山添圭三・中西博・川岸恵理・保田由美・安川貴代美・安田由美子・保田栄子・山崎とも子
- 注3 杉原和雄・林 和広・坪倉利正「カジャ古墳発掘調査報告書」(『京都府峰山町文化財調査報告』第1集 峰山町教育委員会) 1972
- 注4 梅原末治「竹野村産土山古墳の調査(上)・(下)」(『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第20・21冊 京都府) 1931
- 注5 西谷真治・置田雅昭「ニゴレ古墳」(『京都府弥栄町文化財調査報告』第5集 弥栄町教育委員会) 1988
- 注6 堤圭三郎「太田2号墳発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1970)』京都府教育委員会) 1970  
杉原和雄「丹後地方の横穴式石室採用以前の須恵器資料」(『水と土の考古学』京都府) 1973
- 注7 三好博喜「国営農地開発事業(丹後東部地区)関係遺跡昭和60・61年度発掘調査概要(4)ゲンギョウの山古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注8 増田孝彦「国営農地開発事業(丹後東部地区)関係遺跡昭和60・61年度発掘調査概要(3)宮の森古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注9 森 正ほか「国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡昭和61・62年度発掘調査概要(2)普甲・稲荷古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第29冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 注10 岡田晃治「国営農地開発事業関係遺跡〔2〕スクモ塚古墳群」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1988)』京都府教育委員会) 1988
- 注11 増田孝彦「国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡昭和61・62年度発掘調査概要(3)新ヶ尾東古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第29冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 注12 三好博喜「国営農地開発事業(丹後東部地区)関係遺跡昭和60・61年度発掘調査概要(2)桃山古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注13 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター「遠所古墳群」(現地説明会資料) 1988 増田孝彦「遠所古墳群の発掘調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第31号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989
- 注14 中谷雅治・杉原和雄「坂野」(『京都府弥栄町文化財調査報告』第2集 弥栄町教育委員会) 1979
- 注15 注13に同じ。
- 注16 注11に同じ。
- 注17 増田孝彦「国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡昭和61・62年度発掘調査概要(1)高山古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第29冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 注18 樋口隆康「峰山桃谷古墳」(『京都府文化財調査報告』第22冊 京都府教育委員会) 1961

- 注19 『京都府遺跡地図』第1分冊〔第2版〕 京都府教育委員会
- 注20 中島 至「京都府の城」(『日本城郭全集』8) 1967  
竹岡 林・近藤 滋・河原純之ほか『日本城郭大系』11京都・滋賀・福井(新人物往来社)  
1980
- 注21 田辺昭三『須恵器大成』(角川書店) 1981  
田辺昭三『陶邑古窯址群1』(平安学園考古クラブ) 1966
- 注22 『向日市埋蔵文化財調査報告書 物集女車塚』第23集 向日市教育委員会 1988
- 注23 岡田晃治ほか「千原古墳・弓木城跡」(『京都府岩滝町文化財調査報告』第6集 岩滝町教育委員会) 1984
- 注24 谷本 進ほか「箕谷古墳群」(『兵庫県八鹿町文化財調査報告書』第6集 八鹿町教育委員会)  
1987
- 注25 吉識雅二ほか『沢原5号墳・高田遺跡発掘調査報告書』兵庫県教育委員会 1983
- 補注 注19によると、調査した下後1号墳は3号墳、5号墳は4号墳としてそれぞれ登録されていたが、今回の報告にあたって古墳の番号も整理し直した。

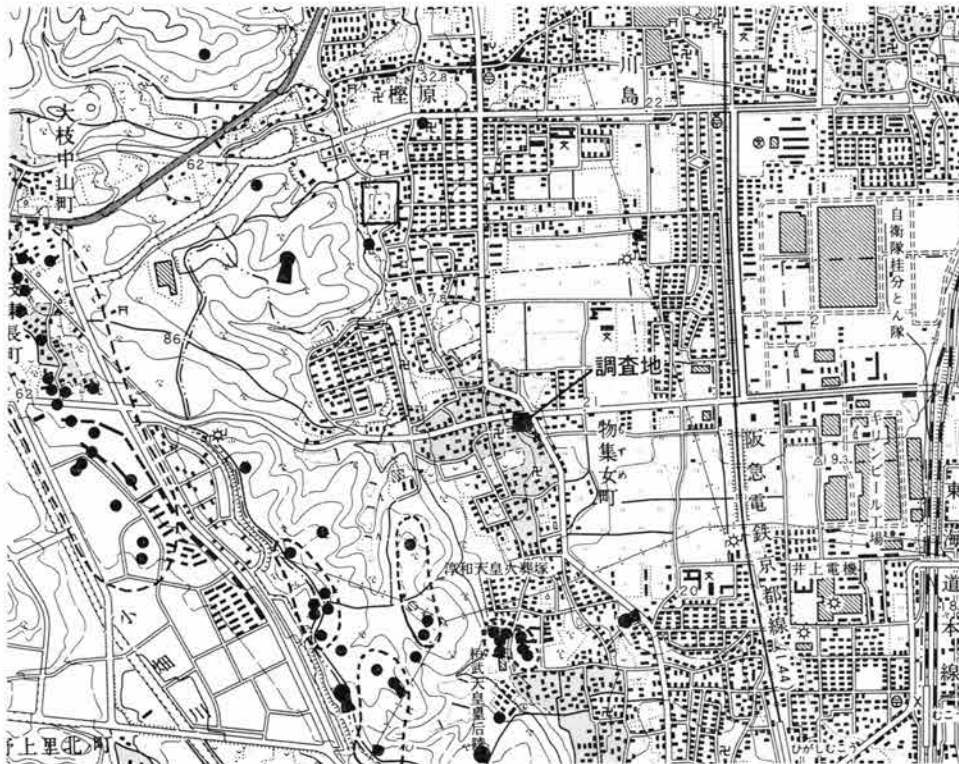
## 2. 中海道遺跡第17次発掘調査概要

### 1. はじめに

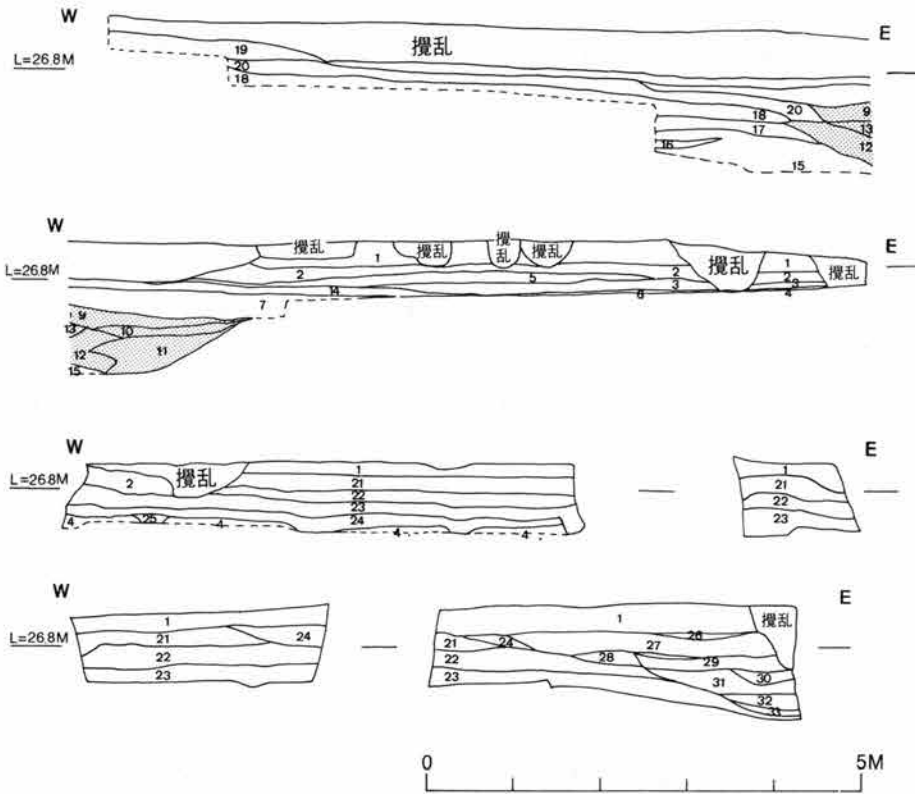
今回の調査地は、京都府向日市物集女町御所海道に位置している。調査は、久世北茶屋線緊急街路整備事業に先立って、京都府土木建築部の依頼を受けて、当調査研究センターが実施した。現地作業は、当調査研究センター調査第2課調査第3係長小山雅人と調査員中川和哉が従事し、平成元年11月20日から平成2年2月15日まで行った。調査にあたっては、向日市教育委員会、(財)向日市埋蔵文化財センターおよび学生諸氏の協力を得た。<sup>(注1)</sup>

中海道遺跡は、向日町丘陵と呼ばれる南北にのびる標高90m前後の丘陵地の東側斜面が桂川へと下る緩斜面から桂川の段丘に立地する。東西約500m・南北約400mと考えられている縄文時代から近世に至るまでの複合遺跡である。

中海道遺跡はこれまで16次にわたって発掘調査が実施されている。とりわけ、第1次調査<sup>(注2)</sup>、第3次調査<sup>(注3)</sup>では大きな成果が見られた。第1次調査では、溝の中から弥生時代第V



第37図 調査地及び周辺古墳分布図 (1/25,000)



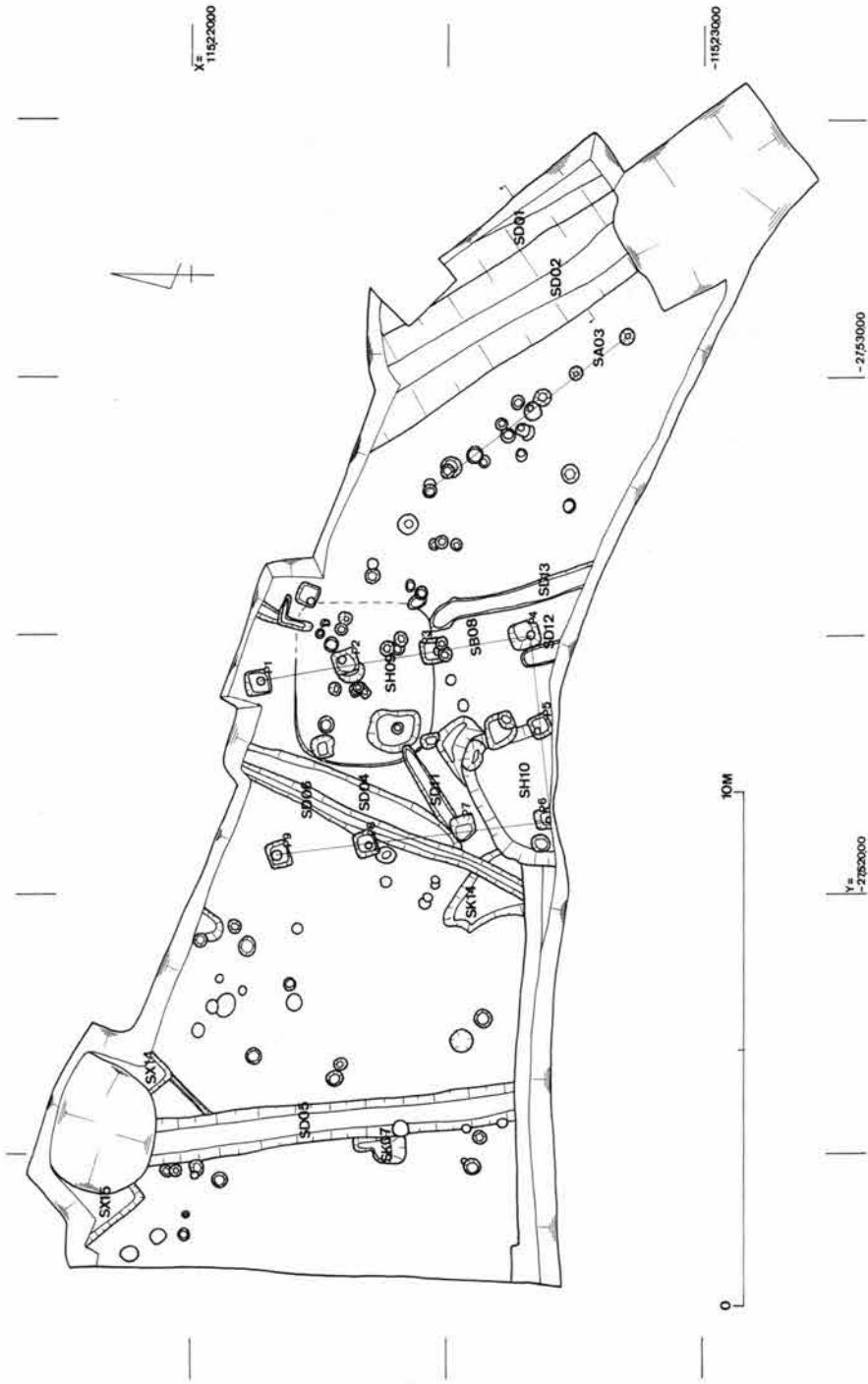
第38図 調査トレンチ北壁セクション

- |              |                 |               |
|--------------|-----------------|---------------|
| 1. 淡茶灰色砂質土   | 12. 暗茶灰色砂       | 23. 暗褐色砂質土    |
| 2. 茶灰色砂質土    | 13. 茶灰色砂        | 24. 暗灰褐色粘砂質土  |
| 3. 灰褐色砂礫     | 14. 黒灰色礫混砂質土    | 25. 暗褐色粘砂質土   |
| 4. 黄褐色シルト    | 15. 淡灰色砂(ラミナ発達) | 26. 灰褐色砂質土    |
| 5. 橙褐色砂礫     | 16. 砂礫          | 27. 21と同じ     |
| 6. 暗橙灰色砂礫    | 17. 暗灰色砂        | 28. 暗灰褐色礫混砂質土 |
| 7. 暗灰褐色礫混砂質土 | 18. 暗茶灰色砂礫      | 29. 淡茶褐色礫混砂質土 |
| 8. 暗灰色砂      | 19. 灰褐色礫混砂質土    | 30. 灰褐色礫混砂質土  |
| 9. 黒灰色砂混シルト  | 20. 淡灰褐色砂質土     | 31. 茶褐色礫混砂質土  |
| 10. 黒灰色砂礫    | 21. 暗灰褐色礫混砂質土   | 32. 黒灰色礫混粘質土  |
| 11. 灰色砂礫     | 22. 黒灰褐色砂質土     | 33. 黄灰色シルト    |

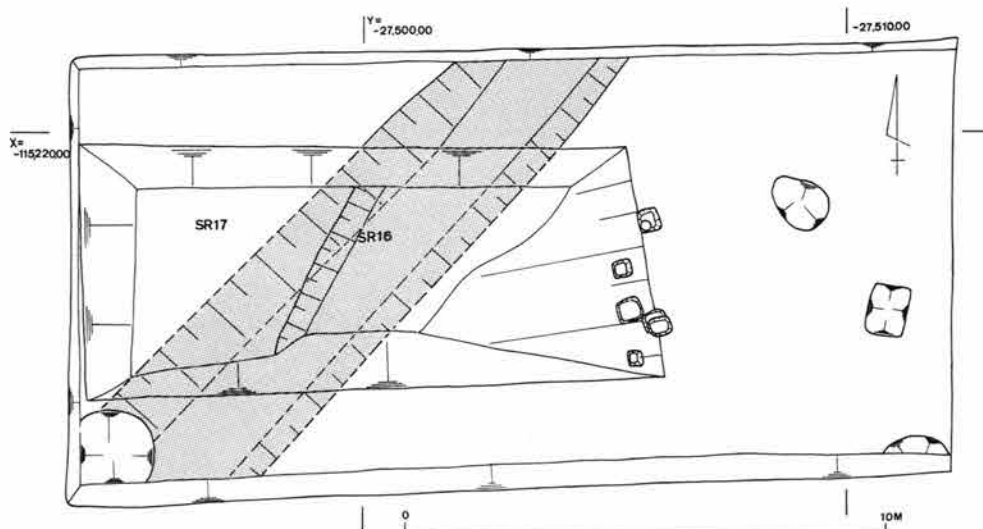
様式末の良好な一括土器資料が出土した。

第3次調査地は今回の調査地に近接し、調査により複数の竪穴式住居跡が検出された。また、1つの竪穴式住居跡からは朝鮮半島と深いつながりをもつ韓式土器が出土している。このため、今回の調査地でも住居跡や他の良好な遺構が検出できると予測された。

なお、調査に係る経費は、京都府が負担した。



第39図 東地区遺構平面図



第40図 西地区遺構平面図

## 2. 調査概要

調査対象地は東西に長く、発掘によって生じた排土を敷地内で処理するため、東地区と西地区にわけて調査を行った。

東地区は、無遺物層となる黄褐色シルト層上に複数の暗褐色系の砂質土が見られ、これが遺構の検出面や包含層となっている。黄褐色シルト層は、東へ向かって下がっていくことが確認できた。しかし、東地区でも西側では後世に削平を受けており、黄褐色シルトにまで切り込む遺構だけが検出できた。またその部分では、暗褐色系の砂質土層のかわりに中世の遺物を多く含む砂礫層が薄く黄褐色シルト層を被覆していた。

西地区は、トレンチの西半分に南から流れる自然流路があり、河川の堆積物がみられた。その侵食は、基盤層である大阪層群にまで至っていた。

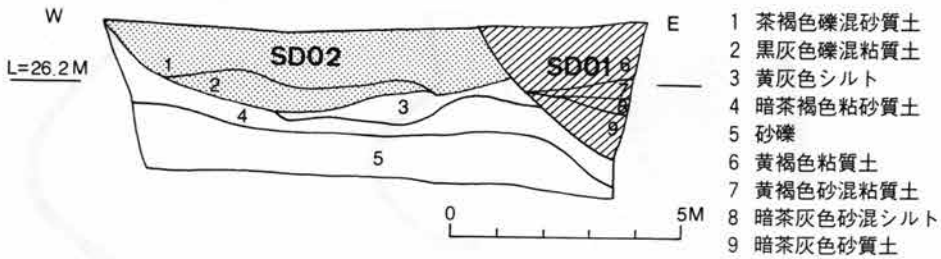
## 3. 遺構と遺物

### a. 弥生時代以前

〔自然流路SR17〕 西地区の西部で検出した砂礫とシルト層が互層をなす堆積状況を示す川である。礫の堆積状況からみて、南西方向から流れていたと想定できる。最下層に堆積していた安定した礫層中から、安山岩を素材とした縦長剥片が出土した。

〔自然流路SR16〕 SR17中の1時期の流れである。検出面における幅は約2.4m・深さ0.8mを測る。遺物は3つの層位から出土している。最下層からは、1の縄文土器が出土した。土器の外には巻貝条痕がみられる粗製の深鉢であることから、縄文時代晩期前半





第41図 SD01・02断面図

のものと考えられる。中層からは、多量の弥生時代第V様式末の土器が出土している。器種には、壺・甕・高杯・器台・鉢がある。壺には2・3のほかたまねぎ形の体部に長い頸部のつく細頸壺がある。甕には、受け口状の口縁部をもつ甕がめだっている。上層からは、口縁部外面に円形浮文が施された広口壺が出土している。中層の土器はそのほとんどが完形に近い状態で東側の1か所から集中して検出できた。このことから一括して投棄されたものと考えられる。

〔SX14〕 東地区の北西隅に検出できた深さ20cmの遺構である。その大半が後世の井戸によって破壊されている。出土遺物には、9の壺の頸部がある。

#### b. 古墳時代

〔竪穴式住居跡SH09〕 東地区中央部にある南北2.7m・東西3.1m前後の隅丸方形の竪穴式住居跡である。北辺の中央部からは、灰と炭の混じった土層が見られた。住居跡の床面中央にあるピットは他のものに比べて著しく深い。

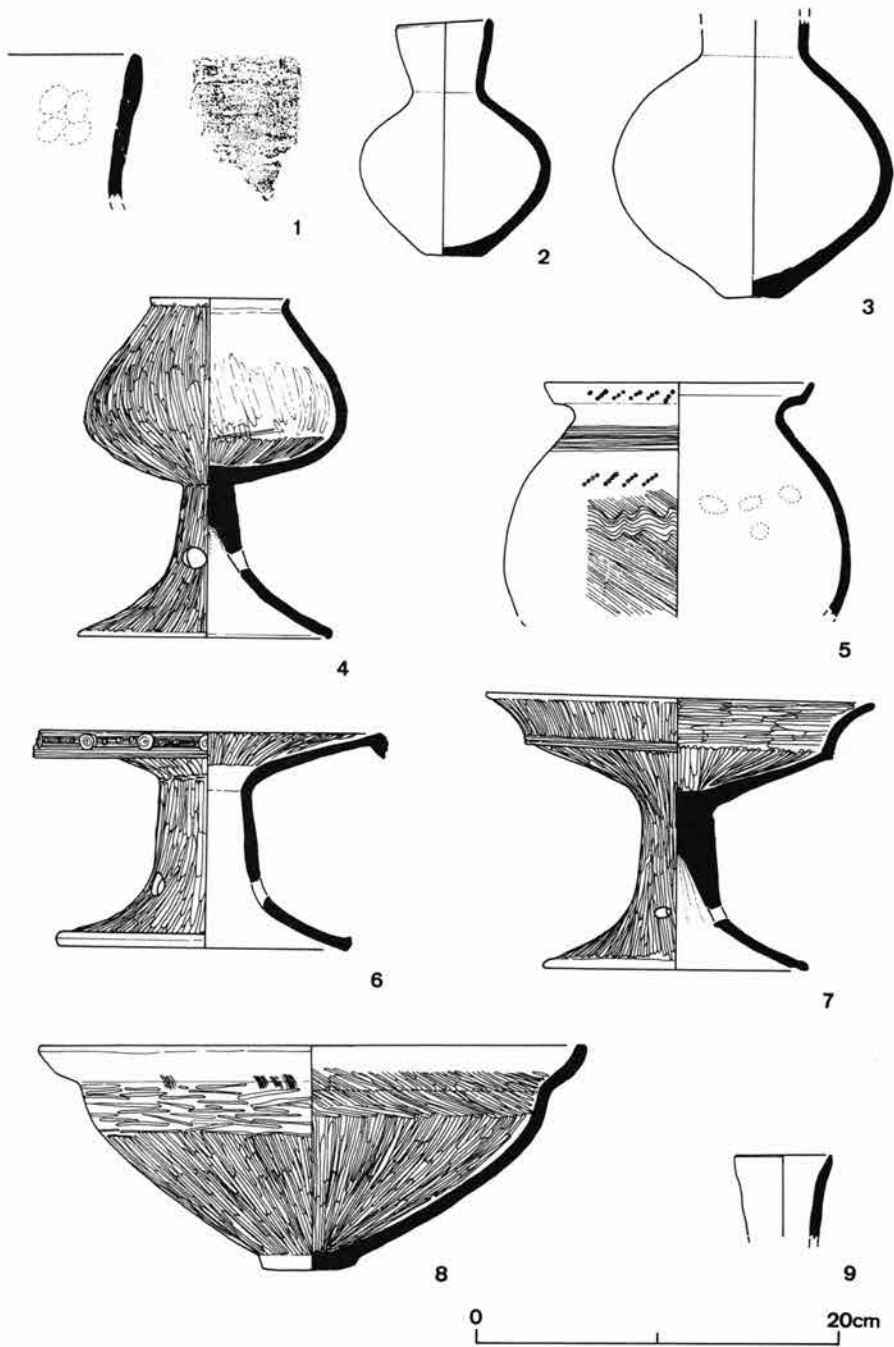
出土遺物には、土師器と須恵器があった。土師器は須恵器に比べ個体数が多く器種も多様である。17は把手の付く土器で、体部の曲線から丸底の鍋状を呈する土師器である。これ以外に把手が2点出土している。土師器には図化したもののほか、丸底壺が2点出土している。18は、赤みがかった色調の須恵器の甕である。外面は、格子目のタタキを施した後、ていねいなナデによってこれを消している。内面は、当て具による青海波紋を板ナデによって消している。陶邑TK73型式と同時期の須恵器と考えられる。

〔竪穴式住居跡SH10〕 東地区南壁にかかり北半分のみが検出できた竪穴式住居跡と考えられる遺構である。北辺中央部には焼土がみられた。出土遺物には、土師器と須恵器がある。須恵器には19・20がある。19は無蓋高杯である。同一個体と考えられる破片から把手が2か所に付いていたものと考えられる。

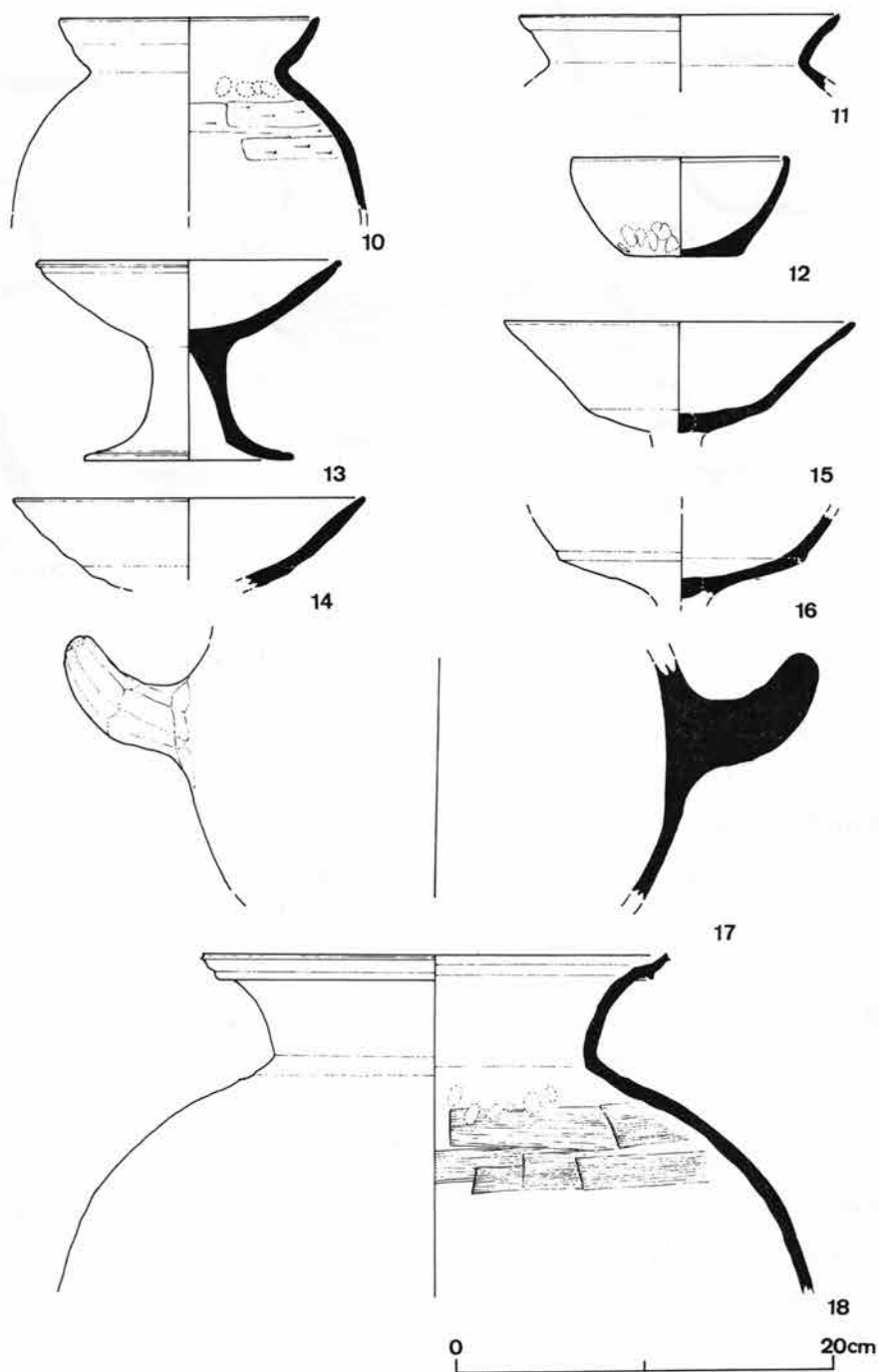
〔溝SD13〕 東西にのびる幅40cmの溝である。出土遺物には、16の土師器の高杯がある。

#### c. 奈良・平安時代

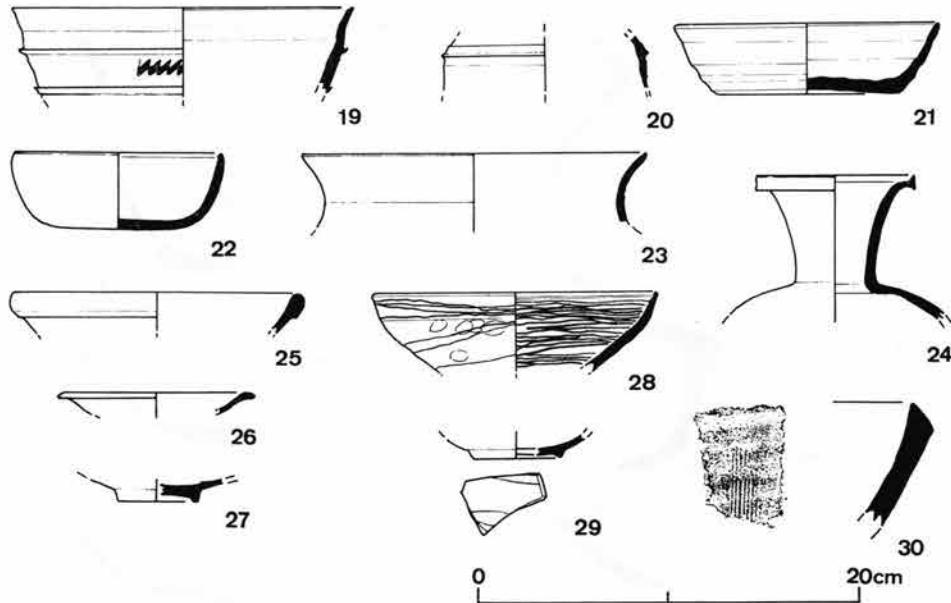
〔掘立柱建物跡SB08〕 南北3間以上、東西2間の方形の掘形をもつ南北棟の掘立柱建



第42図 出土遺物実測図 (1)  
1~8. SR16 9. SX14



第43図 出土遺物実測図(2)  
10~15・17・18. SH09 16. SD13



第44図 出土遺物実測図(3)

19・20. SH10 21・22. SB08 23・24. SD05 25~29. SD02 30. SD01

物跡である。梁間約1.8m・桁行約1.8mを測る。建物跡の長軸は、北で8度東に振っている。出土遺物には、21と22がある。

〔溝SD05〕 SB08と平行する溝である。出土遺物には、23の黒色土器、24の須恵器の壺がある。この他に丸瓦、平瓦が含まれている。SB08と関連性が認められるが、埋没年代は平安時代になるものと思われる。

### c. 中世

〔溝SD01〕 現在の物集女街道に平行する溝である。東側は調査区外のため検出できなかった。出土遺物には、古墳時代から中世までのものが含まれている。後述するSD02を開削して造られているため、SD02の遺物が多量に混入しているものと考えられる。最も新しい遺物は、備前焼の摺鉢である。

〔溝SD02〕 SD01に先行する溝で、SD01に平行している。第41図で見られるように溝の底部東側には、黄灰色のシルト層が存在する。これは、自然地形で低くなっている側にシルトを補填しているものと考えられる。このシルトは、遺跡の基盤層である大阪層群の直上を被覆しているものと似ている。遺物には、土師器・須恵器・瓦器・緑釉陶器・輸入陶磁器(白磁・褐釉・青磁)が見られた。

〔柵列SA03〕 SD01・02に平行する柵である。数回にわたって建て替えられた可能性があるが、SD01・02に関連する施設と捉えられる。柱穴からの出土遺物は見られなかった。

#### d. 包含層

中世の遺物を主体として多く出土している。主要な特徴としては、平安時代後期の軒平瓦や緑釉陶器・輸入陶磁器・金属製品といった、庶民が入手困難であったと考えられる遺物が多いことがあげられる。また、古墳時代の遺物においても、初期須恵器の破片が比較的多くみられ、その個体数も相当数出土している。

#### 4. ま と め

中海道遺跡は、これまで述べてきたように、各時代を通じて一般的な地方集落とは違った様相を見せていることがわかる。そのことを中心にして、各時代ごとに集落の特色をまとめてみたい。

(1) 弥生時代 出土した第Ⅴ様式末の土器群において甕について見ると、いわゆる、近江系の土器が主体を占めている。これまでの調査においても近江系の甕が目立つことから、中海道遺跡全体の様相として考えられる。

(2) 古墳時代 遺構としては、竪穴式住居跡と溝が検出できたが、その中から多くの土師器とともに、初期須恵器(TK73型式併行期)が検出できた。向日町丘陵と桂川に挟まれた地域では、古くから須恵器が導入されていたことが指摘されているが、今回の調査においては、包含層出土分を含めると相当量の初期須恵器が出土しており、集落内における須恵器の保有量もかなり多かったものと想定できる。第3次調査において、韓式土器が出土していることから、朝鮮半島から取り入れられた土器をいち早く入手できた人々が住んでいたと考えられる。

(3) 奈良・平安時代 今回の調査地では、奈良時代から平安時代にわたって集落が営まれているが、長岡京期には京域から外れているにもかかわらず、奈良時代から平安時代までの瓦が出土することから一般的な集落とは様相が異なっている。

(4) 中世 現在の物集女街道に平行する施設があることから、この道が中世にまで遡る古道であるならば、道に係わるものと考えられる。また、包含層中からは青白磁の合子の蓋や青銅製の板状製品や鏡を模したと考えられる鈕の付いた円盤が出土している。このことと、遺構から出土した輸入陶磁器から考え合わせると、中世にもまた一般的な集落とは異なった様相が見られる。

これまでの調査は、面積が小さく、集落景観を明らかにするほどの遺構が検出されていないが、今後の調査によってこのような特徴的な遺物や遺構を持つ集落の全貌が現れるものと思われる。

(中川和哉)

- 注1 広瀬時習，浜中邦弘，西川智子，水沢真樹，熊沢祐子，水沢正一郎，小村美香，中原昌弘（順不同）
- 注2 高橋美久二・金村允人・森 毅「中海道遺跡調査報告」（『向日市埋蔵文化財調査報告書』第3集 向日市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所）1979
- 注3 國下多美樹「中海道遺跡第3次(3NNANK-3地区)発掘調査概要」（『向日市埋蔵文化財調査報告書』第13集 向日市教育委員会）1984
- 注4 平良泰久「乙訓の初期須恵器」（中山修一先生古稀記念会編『長岡京古文化論叢』 同朋舎）1983

### 3. 長岡京跡左京第 226 次発掘調査概要

(7ANFKE地区)

#### 1. はじめに

今回の調査は、向日市上植野町車返地内に計画された向日合同宿舎の建設に先立ち、大蔵省近畿財務局の依頼を受けて、当調査研究センターが実施したものである。

調査対象地は、長岡京条坊復原によれば左京三条一坊十二町・十三町にあたり、東一坊第二小路が調査地内を縦走する地点にあたる。このため、京都府教育委員会文化財保護課と大蔵省近畿財務局とが協議した結果、平成元年度事業分として敷地北半部分の発掘調査を実施することとなった。

現地調査は、平成元年7月28日に開始し、11月27日に終了した。調査面積は、拡張区をも含めて約1,200m<sup>2</sup>である。調査は、当調査研究センター調査第2課調査第3係係長小山雅人、同調査員三好博喜が担当した。

調査にあたって、向日市教育委員会・財団法人向日市埋蔵文化財センター・長岡京跡発掘調査研究所・三楽株式会社関西工場をはじめとする関係諸機関・学生諸氏<sup>(注1)</sup>のご協力を得た。記して感謝の意を表したい。本文の執筆は、3を仏教大学学生古閑正浩が、その他を三好が担当した。

なお、調査に係る費用は、大蔵省近畿財務局が全額負担した。

#### 2. 調査経過

現地調査は、平成元年7月28日にトレンチを設定することから開始した。重機による掘削を8月1日から5日の期間で行い、その後人力による掘削を行った。当初の掘削面積は約1,000m<sup>2</sup>であったが、調査の結果、遺構の規模を確定する必要が生じた。このため協議を行い、10月12日・13日に重機で約200m<sup>2</sup>の拡張を行うとともに、東側部分下層の調査のための掘削を実施した。長岡京跡の調査については、10月20日に関係者説明会を開催した。また、最下層の調査を行うため、10月30日に再度重機による掘削を行った。人力による掘削作業は11月15日に終了し、引き続き実測作業を行った。埋め戻し作業を11月20日から行い、11月27日にはすべての作業を終了して現地を撤収した。

なお、今回の調査区内の地区割りは、国土座標に基づいた3m方眼を用いた。ラインの名称は、X=-118,494.000をAラインとして南方向にアルファベットを、Y=26,451.000

を1ラインとして東方向に算用数字を付した。地区名称は、北西側交点を地区名とした。

基本的な層序は、盛土(西側で約1m, 東側で約1.8m)の下に旧表土・床土と続く。旧表土や床土は、西側や南側の一部に残るだけで、盛土造成に際して、大部分が削られていると思われる。旧表土・床土の下は砂質土層となり、長岡京期以降の遺構面を検出した。砂質土層は、0.5m程度堆積しており、この下は礫層となる。礫層は、2m程度の厚さがあり、溝の落ち込みを呈していたため、流路の痕跡と判断した。礫層を除くと、暗黒褐色粘質土となり、さらに礫混じりの緑灰色粘質土へと続いていた。(三好博喜)

### 3. 周辺の調査

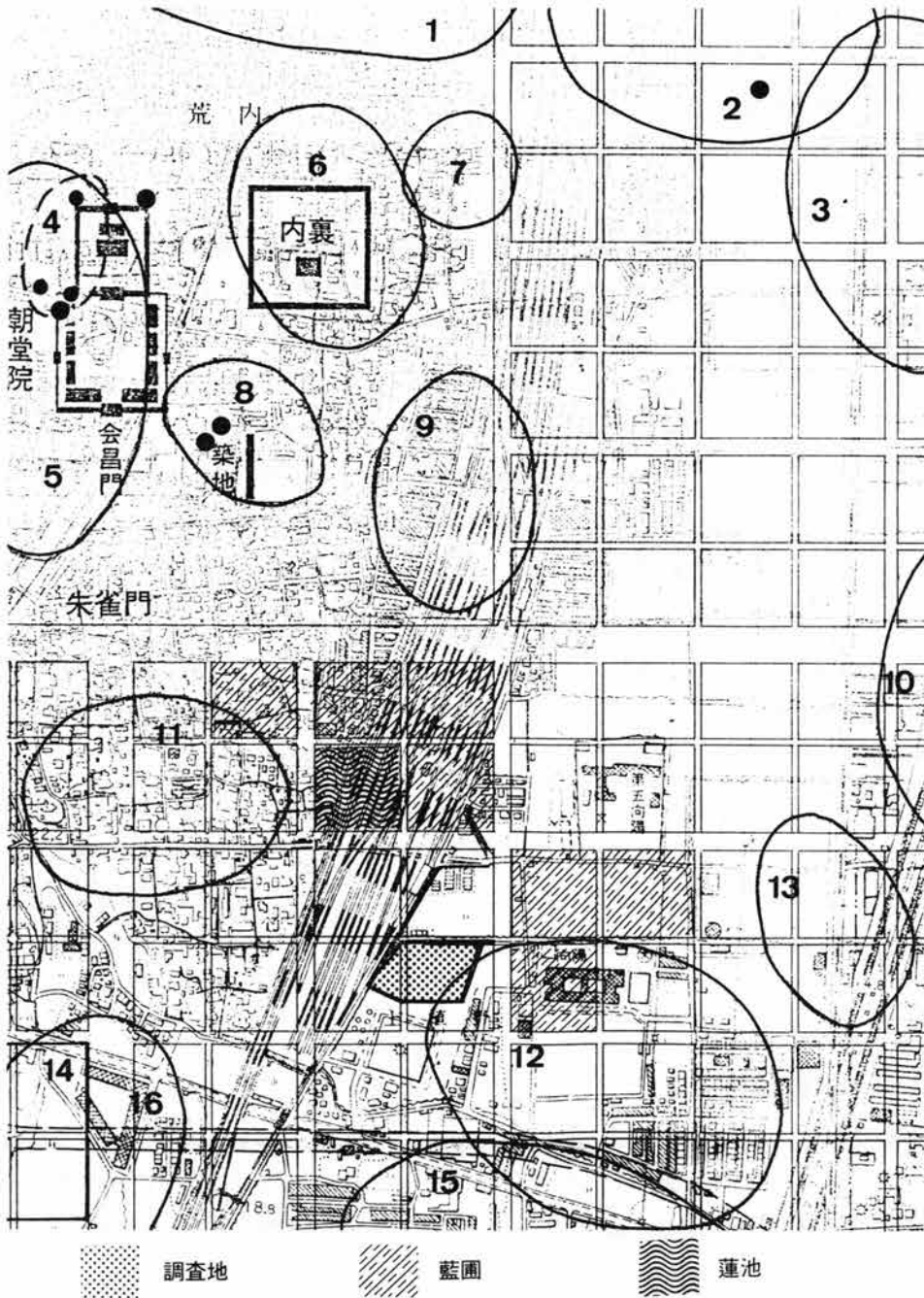
調査地は、東を桂川、西を西山山地によって画された乙訓地域に所在する。調査地西方には西山山地から南東に派生した向日丘陵が張り出し、丘陵縁辺には段丘が形成されている。向日丘陵縁辺から桂川との間には沖積低地が展開されており、桂川の支流である小畑川が現在は南に向けて流れている。

調査地は南流する以前の小畑川が形成した標高17m程度を測る緩扇状地に位置する。緩扇状地の形成年代については左京第120次調査で、上限がB.C.700年という値を得ている。下限の年代については、出土遺物から7世紀と考えられている<sup>(注2)</sup>。一方、調査地南の鴨田遺跡が立地する扇状地南寄りでは、下限の年代が弥生時代前期と考えられており、地域によっては形成の時期に差が認められる。少なくとも、7世紀には扇状地の形成を終えて、河道は東向きに概ね固定化されている。このため、旧小畑川の河道は、平安時代までは向日丘陵南辺で東向きを変え、調査地の南側を東南東に流れた後、赤目崎付近で桂川に合流していたと考えられている。調査地東側の府立向陽高校敷地内の発掘調査によって検出された遺構群は、扇状地の中でも中洲状の微高地に立地したものである。調査地も下層の礫の堆積状況から見て、これに連続する微高地に位置すると思われる。

調査地周辺の弥生時代の集落は、前期末に成立し弥生時代終末まで営まれた森本遺跡を中心集落として、石田遺跡・鶏冠井遺跡・北山遺跡・沢ノ西遺跡などが散在している。乙訓地域では、丘陵などの高燥地に集落が多く営まれているが、調査地の位置する沖積低地一帯でも上植野町樋爪地区や北淀井地区で弥生時代後期や庄内式期の土器が出土しており、弥生時代の遺跡の存在が窺える。

古墳時代の遺跡では調査地南側に鴨田遺跡が、北側に芝ヶ本遺跡がある。鴨田遺跡では、庄内式土器や木製農耕具が多量に出土した。芝ヶ本遺跡では勾玉の鑄型や石釧などが出土している。いずれも前期から後期まで並存した集落であり、向日丘陵の尾根上に造営された前期古墳との関連が考えられている。





第45図 調査地位置図 (1/2,500)

1. 森遺跡 2. 石田遺跡 3. 鶏冠井遺跡 4. 山畑古墳群 5. 乙訓郡衙跡  
 6. 内裏下層遺跡 7. 御屋敷遺跡 8. 南開遺跡 9. 沢ノ西遺跡 10. 鶏冠  
 井清水遺跡 11. 西小路遺跡 12. 中福知遺跡 13. 芝ヶ本遺跡 14. 吉備  
 寺廢寺跡 15. 鴨田遺跡 16. 吉備寺遺跡

奈良時代には向日丘陵の南端に乙訓郡衙が置かれていたことが発掘調査から推定されている。また、調査地東側の府立向陽高校敷地内の調査では、水田の灌漑用水路が検出されており、<sup>(注4)</sup> 調査地内でも奈良時代の遺構の存在が予想された。

長岡京期では、調査地は左京三条一坊十二町・十三町の推定地にあたっている。周辺での調査をみると、府立向陽高校の敷地内で5回の調査が行われている。<sup>(注5)</sup> ここでは、三条大路や三条第二小路・東一坊大路をはじめとして、掘立柱建物跡などが確認された。周辺は、長岡京廢都直後、『類聚三代格』卷十五延暦十四年正月二十日付の太政官符により、左京三条一坊八・九・十五・十六町、二坊三・四・六町を「勅旨所藍圃」に、左京三条一坊十町を「近衛府蓮池」に下賜された地域にあたる。実際、府立向陽高校の調査の際に行われた花粉分析では藍の花粉が検出されており、藍圃の存在を裏付けた。<sup>(注6)</sup> しかし、藍圃の地域を特定するにはいたっていない。なお、現在使用されている長岡京の条坊復原図は、この蓮池を起点として平城京型に復原している。

調査地西方の右京四条一坊一町・二町に当たる一帯には、吉備寺の推定地がある。この周辺では、刻印瓦を含む多量の瓦が出土している。<sup>(注7)</sup>

長岡京廢都後から12世紀末にかけての大規模な集落遺跡としては、調査地の南東に位置する中福知遺跡が知られている。<sup>(注8)</sup> ところが、13世紀を境として、乙訓郡東部一帯は、全域が水田化していくため、集落は段丘裾部に移り、西小路遺跡が営まれる。

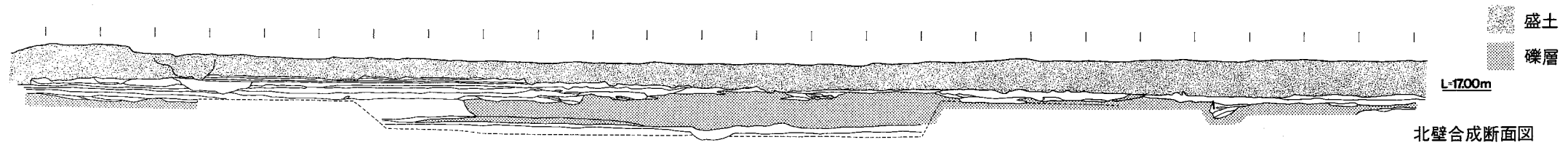
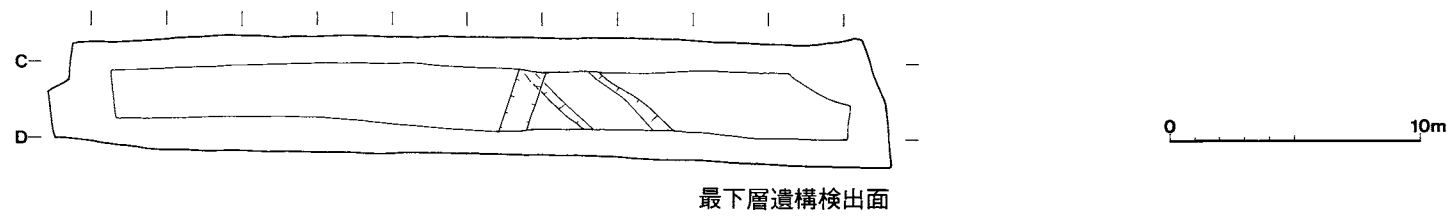
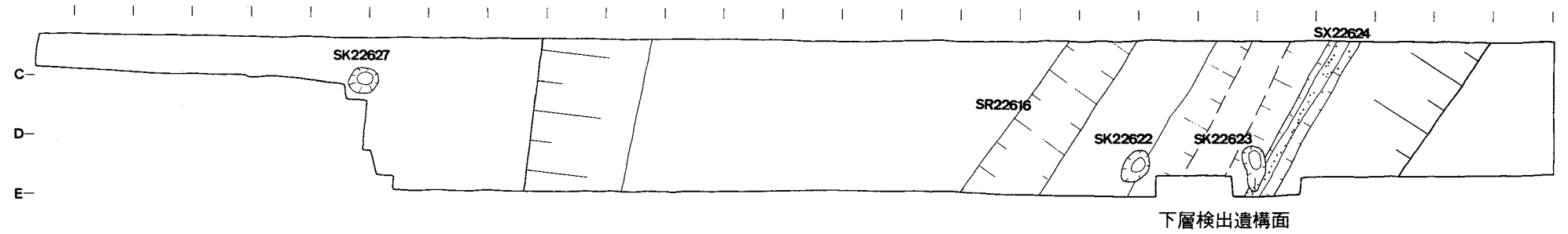
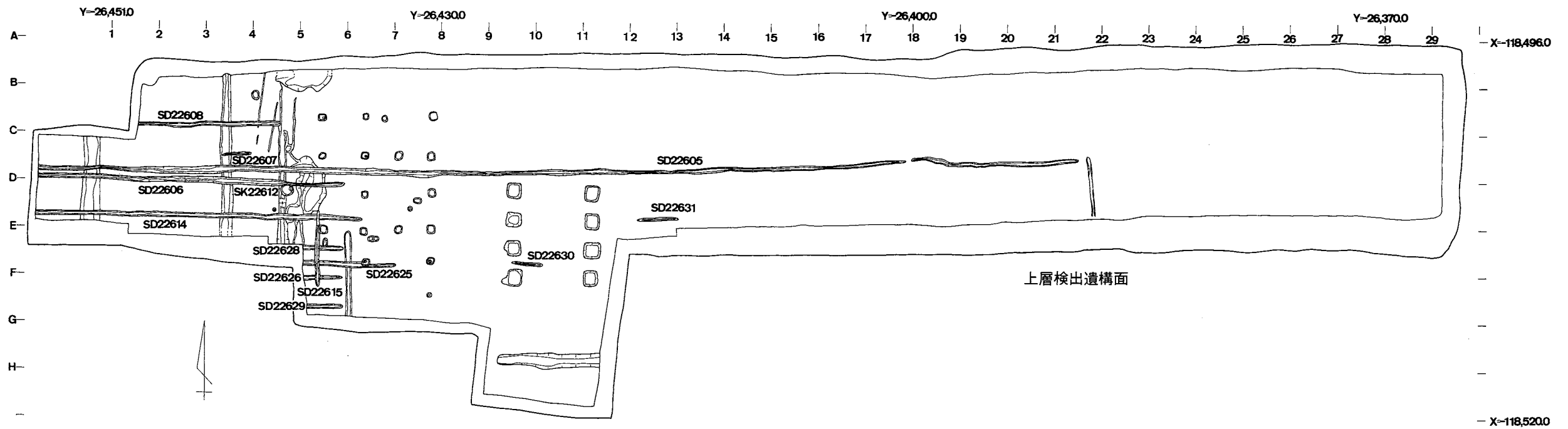
以上のように、調査地周辺では旧小畑川がその流路を大きく変えるなか、各時代の大規模な集落が存在し、数多くの遺構・遺物が検出された。また、調査地は、長岡京跡左京三条一坊十二町・十三町で最初の調査となった。今回の調査では、旧小畑川の影響とこれら集落との係わりを垣間みるとともに、多くの資料を得た。 (古閑正浩)

## 4. 検出遺構

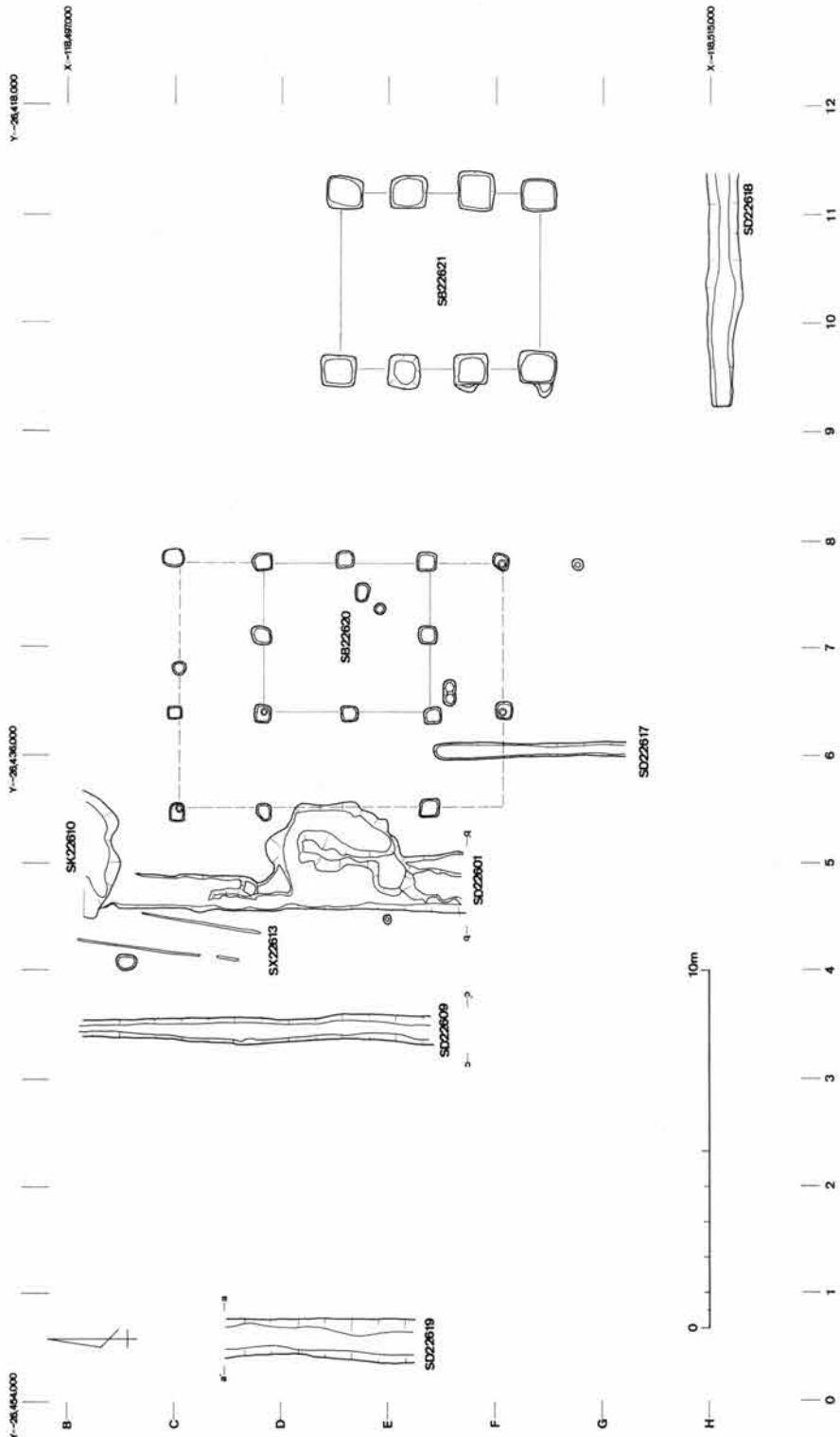
### (1) 長岡京廢都後

**溝SD22605** 東西方向の素掘り溝である。トレンチ西端から70m余りにわたって検出しており、東側で南に屈曲している。幅は0.2mから0.3m、深さは西側が0.2mで東側が次第に不明瞭になっている。溝SD22605は、長岡京期の溝SD22619・溝SD22609・溝SD22601との切り合い関係から、長岡京期よりも後出のものである。出土遺物には、土師器・須恵器の細片がある。

**溝SD22606** 東西方向の素掘り溝である。トレンチ西端から9m余りにわたって検出した。幅は0.2mから0.3m、深さは0.1mを測る。溝SD22606は、長岡京期の溝SD22619・溝SD22609・溝SD22601との切り合い関係から、長岡京期よりも後出のものである。出土



第46図 検出遺構実測図



第47図 長岡京期検出遺構表測図

遺物には、土師器や須恵器・瓦器などの細片が若干ある。

**溝SD22607** 東西方向の素掘り溝である。長さ約1m・幅0.3mで、深さは0.3mを測る。溝SD22607は、長岡京期の溝SD22609との切り合い関係から、長岡京期よりも後出のものである。出土遺物はない。

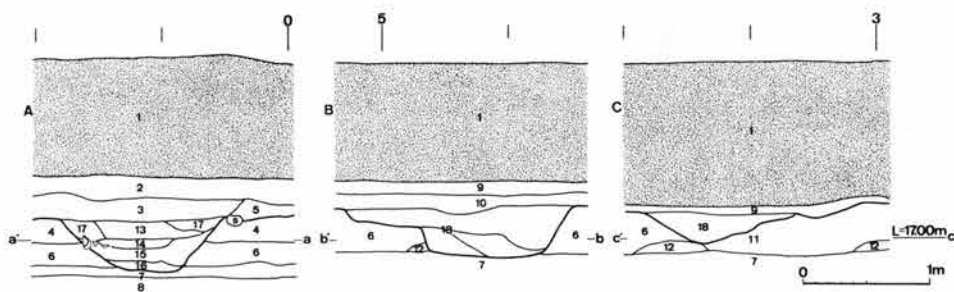
**溝SD22608** 東西方向の素掘り溝である。トレンチ西端から約9.5mを検出した。東端は、溝SD22601の西肩で止まる。幅は0.2m、深さは0.1mを測る。溝SD22608は、長岡京期の溝SD22609・轍跡SX22613・溝SD22601との切り合い関係から、長岡京期よりも後出のものである。出土遺物はない。

**溝SD22614** 東西方向の素掘り溝である。トレンチ西端から21m余りにわたって検出した。幅は0.2m、深さは0.1mを測る。溝SD22614は、長岡京期の溝SD22619・溝SD22609・溝SD22601との切り合い関係から、長岡京期よりも後出のものである。出土遺物には、土師器の細片が若干ある。

**溝SD22615** 南北方向の素掘り溝である。トレンチ南端から4.8m余りにわたって検出した。幅は0.2mから0.3m、深さは0.1m程度を測る。溝SD22615は、長岡京期よりも新しい溝SD22614・溝SD22628・溝SD22625・溝SD22626との切り合い関係から、これらの溝よりも後出のものである。出土遺物はない。

**溝SD22625** 東西方向の素掘り溝である。トレンチ西端から2.7m程度を検出した。幅は約0.2m、深さは約0.05mを測る。溝SD22625は、長岡京期の建物跡SB22620の柱穴との切り合い関係から、建物跡よりも後出のものである。平瓦の破片が若干量出土した。

**溝SD22626** 東西方向の素掘り溝である。トレンチ西端から2.5m程度を検出した。幅



第48図 断面実測図

A：溝SD22619北壁断面図 B：溝SD22601南壁断面図 C：溝SD22609南壁断面図

1. 盛土 2. 旧表土 3. 淡茶褐色砂質土(灰褐色砂質土含む) 4. 灰褐色砂質土(やや茶褐色味を帯びる) 5. 礫層 6. 灰褐色砂質土(マンガン粒含む) 7. 淡赤褐色粘質土 8. 淡灰白色粘質土(鉄分含む) 9. 灰白色砂質土 10. 黄褐色礫混じり砂質土 11. 濃灰白色礫混じり砂質土 12. 灰褐色砂 13. 濃灰色砂 14. 礫混じり灰褐色砂質土(粘性土含む) 15. 灰褐色砂質土(粘性土含む) 16. 黄褐色砂質土 17. 淡茶褐色弱粘性砂質土 18. 濃灰色砂質土

は約 0.2m、深さは約 0.05mを測る。土師器や須恵器・瓦器などの細片が若干量出土した。

**溝SD22628** 東西方向の素掘り溝である。トレンチ西端から約2.5mを検出した。幅約0.2m・深さ約0.05mを測る。出土遺物はない。

**溝SD22630** 東西方向の素掘り溝である。長さは2m、幅約0.2mで、深さは約0.05m程度を測る。出土遺物はなく、時期は不明である。

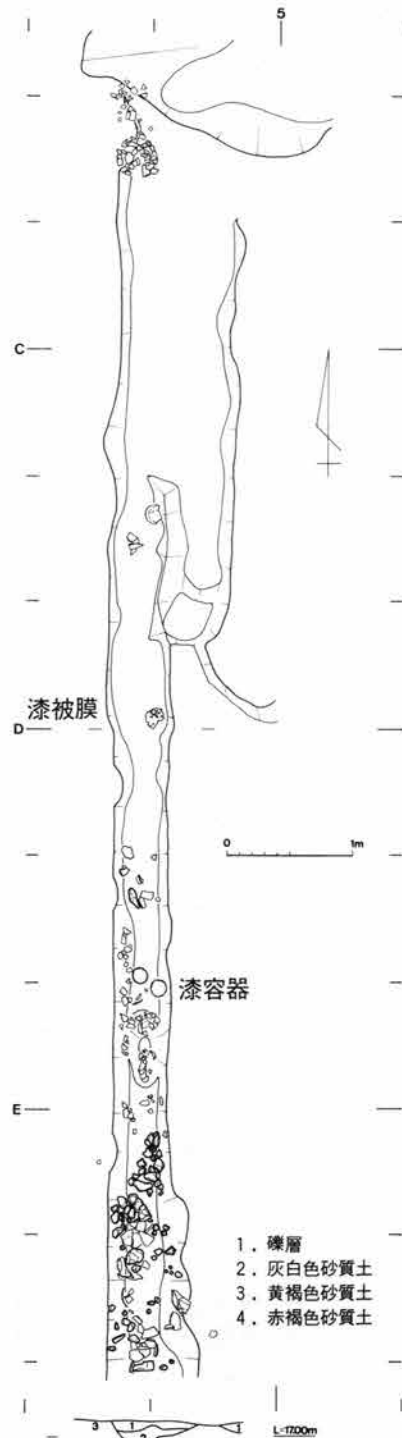
**溝SD22631** 東西方向の素掘り溝である。長さは2.6m、幅約0.2mで、深さは約0.05m程度を測る。出土遺物には、土師器の細片が若干ある。

**土坑SK22612** 径約 0.8m・深さ約 0.17mを測る土坑である。土坑内東寄りには径約 0.2m・深さ約 0.1mを測るピットが認められた。埋土は、焼土状の赤褐色であった。土坑SK22612は、長岡京期の溝SD22601との切り合い関係から、長岡京期よりも後出のものである。出土遺物には、土師器・須恵器の細片が少量ある。

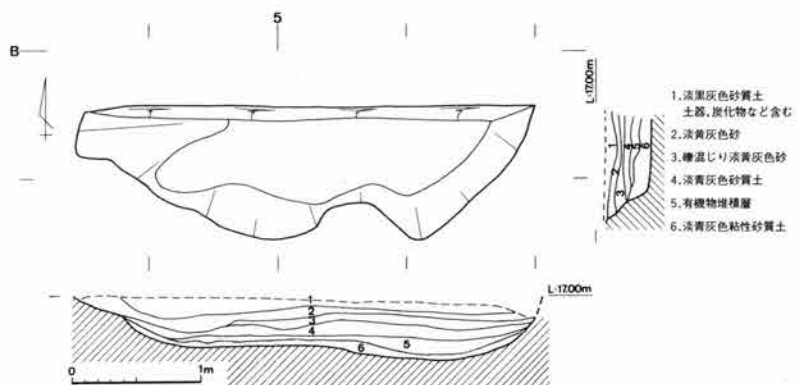
(2) 長岡京期

**溝SD22609** 東一坊第二小路東側溝と考えられる溝である。長さ約10mを検出した。幅は、北側で 0.45m、南側で 0.8mを測る。深さは、北側で 0.07m、南側で 0.2mを測る。溝の心々座標は、Y=-26,443.7である。遺物は、瓦片や土師器の杯・皿が出土した。

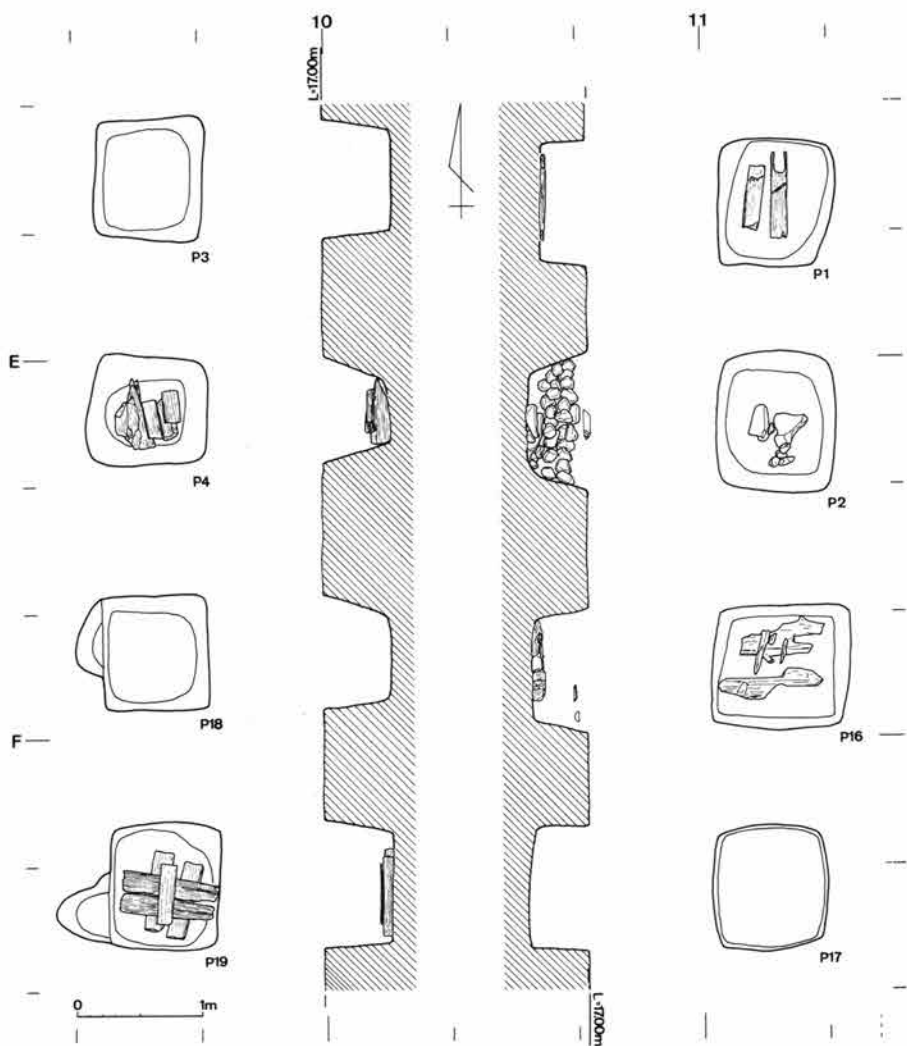
**溝SD22619** 東一坊第二小路西側溝と考えられる素掘り溝である。東一坊第二小路東側溝と考えられる溝SD22609を検出したことにより、西側溝を確認するためトレンチを西側へ拡張した。この西側拡張区で検出したのが溝SD22619である。幅約 1.2m・深さ 0.4mを測り、長さ



第49図 溝SD22611実測図



第50図 土坑SK22610実測図



第51図 建物跡SB22621実測図

5.2mにわたり検出した。溝の心々座標は  $Y = -26,452.3$  である。遺物は、北側で土師器の杯が出土した。

**溝SD22601・溝SD22611** 東一坊第二小路東側溝と考えられる溝SD22609の東側約3mの地点に並行して掘られた素掘り溝である。溝SD22601は、Dライン以南で東側に張り出している。この張り出し部の底から甕一個体が出土しており、当初の溝の形態を示しているものと思われる。溝SD22611は、溝SD22601の張り出し部が埋もれて幅が狭まったものか、埋もれた後掘り直されたものと考えられる。溝SD22601の張り出し部の最大幅は約3m、長さは3.5m程度を測る。深さは最大で0.4mである。張り出し部は中央に峰をもつため馬蹄形を呈している。溝SD22601の北側部分は幅約0.95m・深さ0.1m程度で、トレンチ北で土坑SK22610によって切られている。北側部分からの出土遺物には土師器の蓋や皿・椀などがあるが、数量は少ない。

溝SD22611部分は幅約0.6m・深さ約0.3mを測る。溝の心々座標は、 $Y = -26,441.1$  である。北寄りでは漆被膜、中央寄りでは漆容器を含む土師器の椀などが出土した。南寄りでは、礫に混じって丸瓦などの瓦が多く出土したほか、土師器の甕や須恵器などが見られた。

**溝SD22618** 南側拡張区で検出した東西溝である。溝は西側で明瞭に途切れている。幅約0.8m・深さ0.1m程度で、長さ6.5mにわたり検出した。溝の心々座標は、 $X = -118,515.4$  である。出土遺物には、平瓦や須恵器の破片が少量ある。

**溝SD22617** 南北方向の素掘り溝である。トレンチ南端から5.5m程度を検出した。幅は0.4m、深さは0.2mを測る。建物跡SB22620の母屋部分南辺で止まる。出土遺物には瓦類が多い。平瓦・丸瓦の破片が主で、土師器片が若干混じる。

**建物跡SB22620** 母屋部分が桁行2間・梁間2間で三面に廂をもつ建物跡になると思われる。桁行1間は約2.3m、梁間1間は約2.1m、廂部分は北側および西側で約2.5m、南側で約2.1mを測る。柱掘形は、概ね0.5mの方形で、深さは約0.5mである。母屋部分の北西隅の柱穴内には柱根が残っていた。

**建物跡SB22621** 当初、桁行1間・梁間1間のみを検出し、広がりを確認するために南側への拡張を行った。その結果、桁行4間・梁間1間の建物跡であることを確認した。柱掘形は、概ね0.9mから1mの方形で、深さは約0.6mである。これらの柱掘形のうち、P1・P4・P16・P19の4か所で礎板を、P2で根固石を検出した。礎板のほとんどは、柱材などの建築部材を転用したと思われる。

**土坑SK22610** トレンチの北端でその一部を検出した。溝SD22601を掘り込んで作られており、溝SD22601とは時間的差をもつ。推定径4m程度と思われ、深さ0.7mを測る。最下層では0.1m程度の草本類の腐植層をほぼ全面にわたって検出した。堆積層は、基部が



主と思われ、押し潰された状態で堆積していた。出土遺物には土師器の破片が多く、碗や杯・皿などが見られた。須恵器も少量の破片がある。また、鞆の羽口状のものや、鉄滓状の塊が若干出土している。

**轍跡SX22613** 溝SD22609と溝SD22601との間で検出した。検出面が砂質土層であったため、痕跡として残ったものと思われる。車輪間の幅は、約0.9mである。深さは0.14m程度である。東一坊第二小路と推定される道路面からは離れた、築地塀もしくは目隠し塀

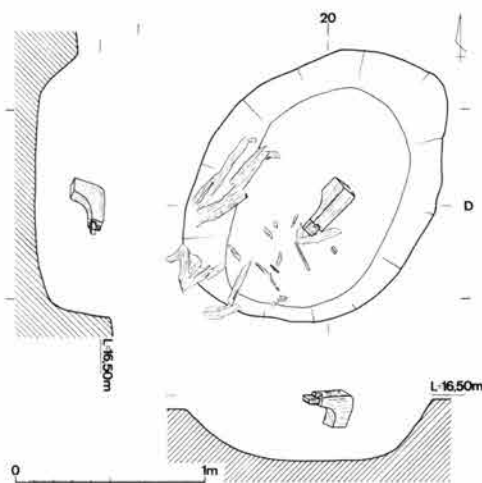
などが位置すると考えられる場所で検出しており、長岡京造営時の轍跡と考えたい。

### (3) 長岡京造営前

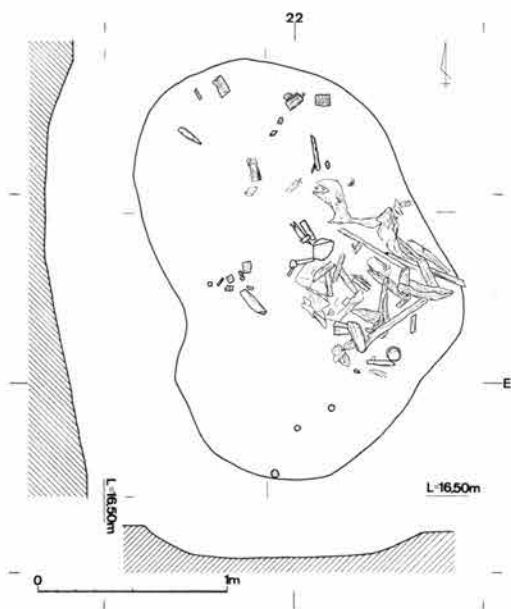
**自然流路SR22616** 幅約45m・深さ約1.6mの砂礫層の堆積である。上面の流路痕跡となった砂層部分からは、古墳時代後半頃の須恵器が出土している。古墳時代頃の自然流路と思われる。

**土坑SK22622** 長径3.3m・短径2.4mの楕円形を呈する土坑である。深さは、0.4mを測る。自然流路SR22616の砂利層面の窪みに濃灰色粘質土が堆積したものと思われる。土坑内からは、多量の木皮や木材の削り屑が検出された。木材の加工時の廃棄物捨て場と考えられ、建築部材と思われる木製品1点が出土した。長岡京期の遺構面を検出した砂質土層面から0.5m下で検出しており、自然流路SR22616埋没後から長岡京造営前の時期の遺構と考えられる。

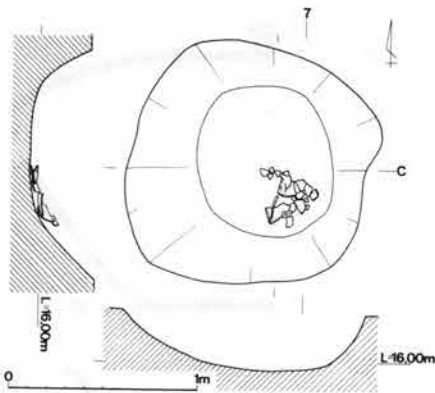
**土坑SK22623** 長径4.5m・短径2.7mの楕円形を呈する土坑である。深さは、0.2mを測る。土坑SK22622



第52図 土坑SK22622遺物出土状況実測図



第53図 土坑SK22623遺物出土状況実測図



第54図 土坑SK22627遺物出土状況実測図

と同様に多量の木皮と木材の削り屑とを検出した。杭列SX22624の上に土坑SK22623の堆積層が形成されており、杭列SX22624よりも後の遺構である。周辺状況から推測して土坑SK22622と同時期に形成されたものと思われる。

**杭列SX22624** 自然流路SR22616の東岸近くで検出した。護岸用に打ち込まれた杭列と思われる。杭は、直径10cm内外、長さ70cm程度の丸木の先を尖らせたものである。杭列

の間からは、古墳時代後期後半の須恵器片が出土している。

**土坑SK22627** 自然流路SR22616の西側の暗灰黒色砂質土層面で検出した。直径約2.8m・深さ0.3mを測る。土坑内からは、須恵器の壺が出土した。

#### (4) 最下層

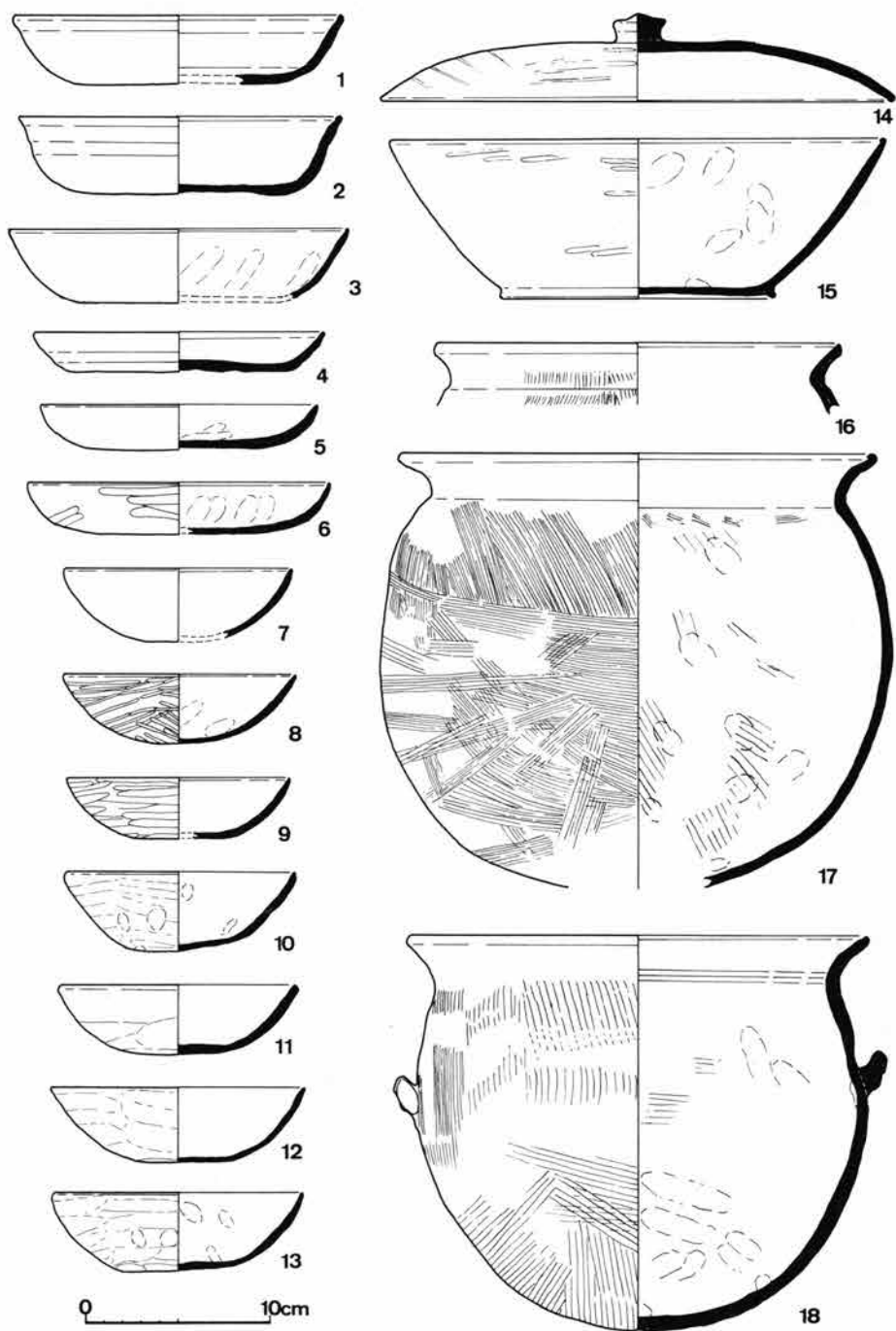
自然流路SR22616の砂礫層を除去したところで暗黒褐色粘質土を検出した。暗黒褐色粘質土の堆積は0.3m程度で、礫混じりの緑灰色粘質土へと続く。最下層の調査では、自然の流路跡と思われる砂利の堆積を2か所で確認しただけである。そのうちの1か所では、流木と思われる比較的大きな自然木を検出した。遺物は、土器片が若干出土した。

## 5. 出土遺物

**溝SD22601・溝SD22611出土遺物**(第55図、図版第26-42) 1～18は、いずれも土師器である。これらのうち、溝SD22601の張り出し部から出土した土器は18のみで、大部分は、溝SD22611から出土した。須恵器は、少量出土したものの、図示できるものはない。また、瓦類では、丸瓦1点が完形で出土したほか、平瓦の破片が若干量ある。

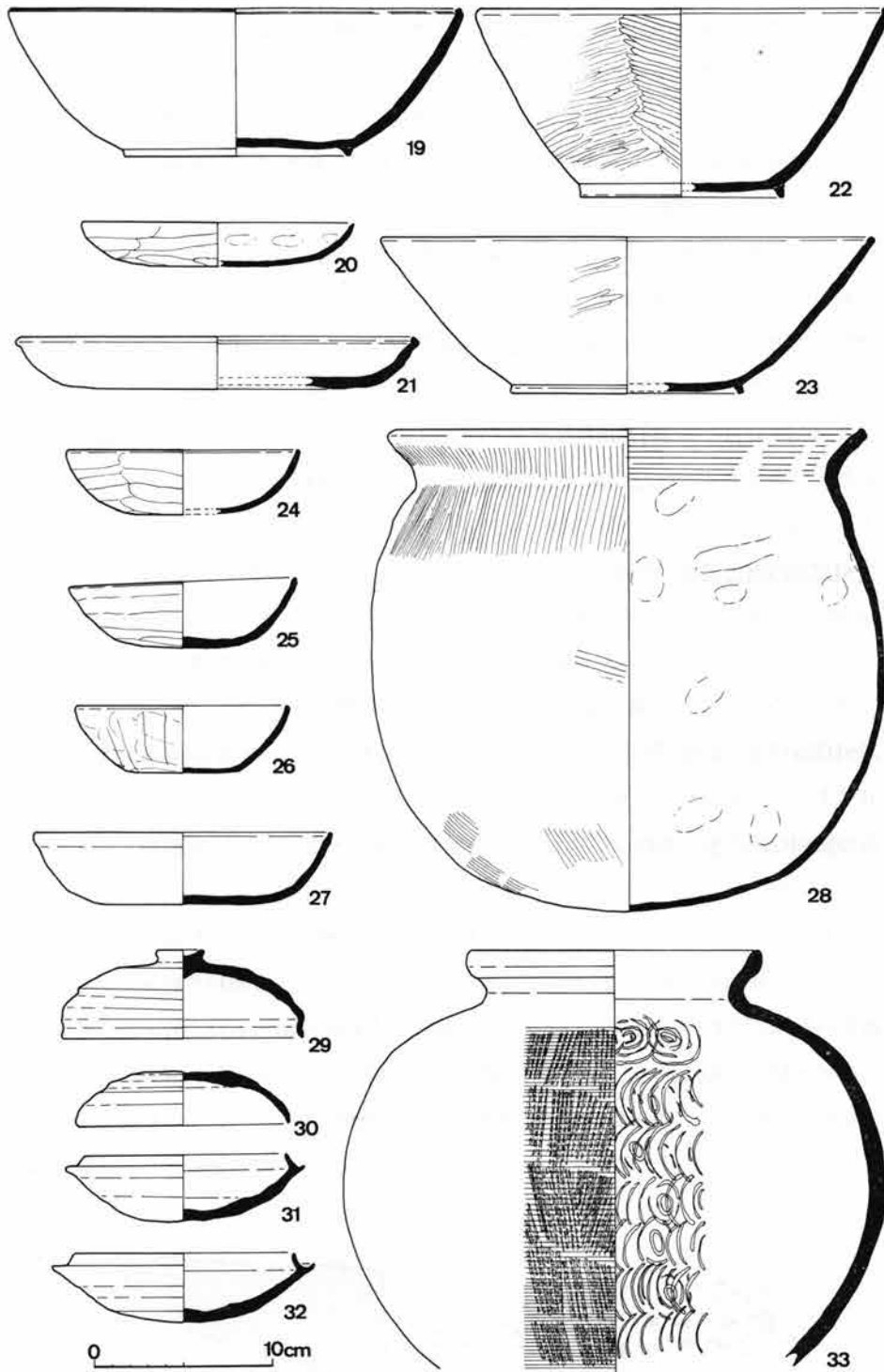
1～3は、無高台の杯Aである。いずれも口径18cm前後、器高4cm程度を測る。調整手法は、1・2が口縁部をヨコナデし、底部外面をヘラケズリするb手法、3が磨滅してはいるが、外面全体をヘラケズリするc手法である。

4～6は、無高台の皿Aである。いずれも口径16cm前後・器高2.5cm程度を測る。調整手法は、4・5がb手法、6がc手法である。7～13は、底部から内湾しながら立ち上がる椀Aである。いずれも口径13cm前後、器高4cm程度を測る。7は、磨滅しているため調整手法は不明である。9・11・12の調整はc手法によるもので、12は薄手に仕上げられている。8はc手法ののちヘラミガキを施している。10・13は、漆容器として使用され



第55図 出土遺物 (1)

1~18. 溝SD22601・溝SD22611出土遺物



第56図 出土遺物 (2)

19~21. 溝SD22609  
26~32. 包含層

22. 溝SD22619  
23・24. 土坑SK22610

25. 建物跡SB22621

33. 土坑SK22627

たものである。溝SD22611内から並んで出土した。調整手法は、いずれもc手法によるもので、口縁下半に指頭圧痕が目立つ。10の内面には漆が全面に付着している。13は、口縁部の内外面に付着している程度であるが、外面の数か所に明瞭な指紋が残る。

14は、口径28cm・器高5cmを測る蓋Aである。鈕は宝珠形で、口縁端部は三角形状につまみ出している。調整は、磨滅しているものの、ヘラミガキが認められる。

16・17は、甕Aである。17は、口径26cm・器高23.5cmを測り、外面をハケ調整している。16は、口径22cm程度を測るもので、外面はハケ調整している。

18は、甕Bである。口径25cm・器高21.5cmを測るもので、把手がつく。外面はハケ調整を行っている。

図版第26・42は、直径17cm程度を測る漆被膜である。片面に木目様の平行線が走り、縁辺部には巻き込んだ状況が認められることなどから、曲物の底板外面に塗られた漆が被膜として残っていたものと考えられる。

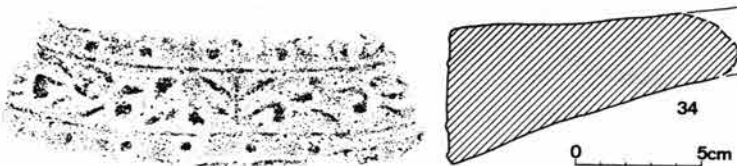
溝SD22609出土遺物(第56図19~21) 19から21は、土師器である。19は、杯Bで、口径26cm・底径13cm・器高8.3cmを測る。調整は磨滅のため不明である。20・21は皿Aである。20は口径15cm・器高2.5cm程度を測り、c手法による調整を施している。21は口径23cm・器高3cm程度を測るもので、b手法による調整を施している。

溝SD22619出土遺物(第56図22) 22は、口径23cm・底径12cm・器高10.5cm程度を測る杯Bである。調整はヘラミガキで仕上げられている。

建物跡SB22621出土遺物(第56図25, 第59図37~48) 柱掘形から土師器や瓦、木製品などが出土した。

25はP16から出土した碗Aである。口径11cm・器高4cmを測る。調整はc手法である。

37~48は、柱掘形内部から出土した礎板である。いずれも建築部材を転用したもので、柱掘形の規模に合わせて切断している。37~41は、P19から出土した。37・38を並べ、その上に40・41を井桁に置き、さらに39を置くという構成をとっていた。37・38は、片側面に溝状の凹みをもつ。40・41は、厚さ1.2cm程度の板材である。42は、P16から出土した。中央部付近のくびれ部に溝状の挟り込みが一周する。対となる礎板としては自然木が



第57図 出土遺物(3)

用いられていた。43～46はP3から出土した。43を置き、その上に44・45・46を置く構成をとっていた。43は柱材の転用材と思われ、縦方向に溝状の凹みが走る。44も柱材の転用材と思われる。45・46は厚さ3cm程度の板材である。47・48は、P1から出土した。厚さ最大6cm程度の板材で、ともに片側面に溝状の凹みをもつ。二分されたものと思われる。48は、扱状の挟り込みをもつ。

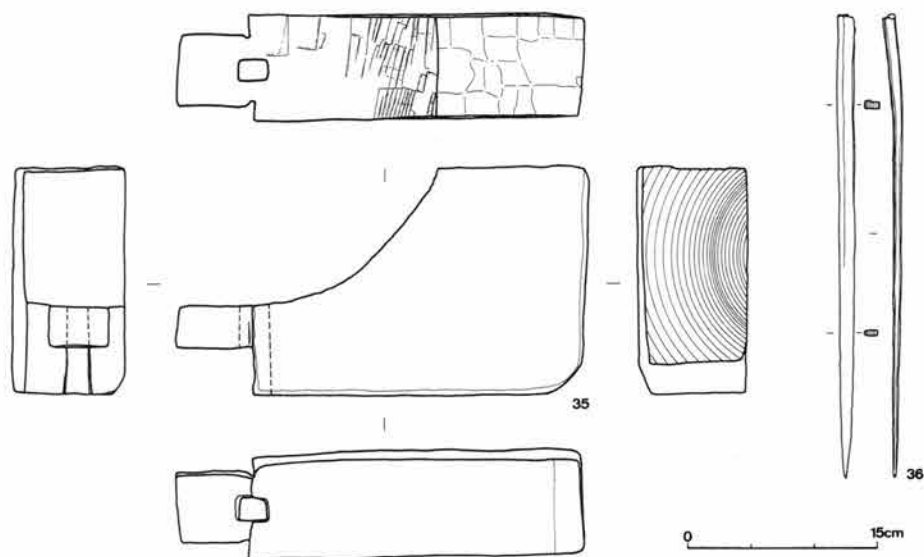
**土坑SK22610出土遺物**(第56図23・24) 土師器を主体として比較的多くの遺物が出土したが、破片が多いため、図示できたものは少ない。23は口径28cm・底径13cm・器高9cm程度を測る杯Bである。磨滅のため調整は不明であるが、ヘラミガキが認められる。24は口径13cm・器高3.5cm程度を測る椀Aである。調整はc手法である。

**土坑SK22622出土遺物**(第56図35) 主な出土遺物は木材の削り屑であるが、1点のみ木製品がある。35は、全長32.5cm・幅18.5cm・厚さ8cm程度を測る。弧状の削り面をもち、他の部材と連結させるための柄と柄穴とをもつ。建築部材の一種と思われるが、現時点では用途不明である。

**土坑SK22623出土遺物**(第58図36) 36は、長さ36.5cm・幅1.2cm・厚さ0.7cm程度を測る串状木製品である。下半部以下を削って尖らせ、串状に加工している。

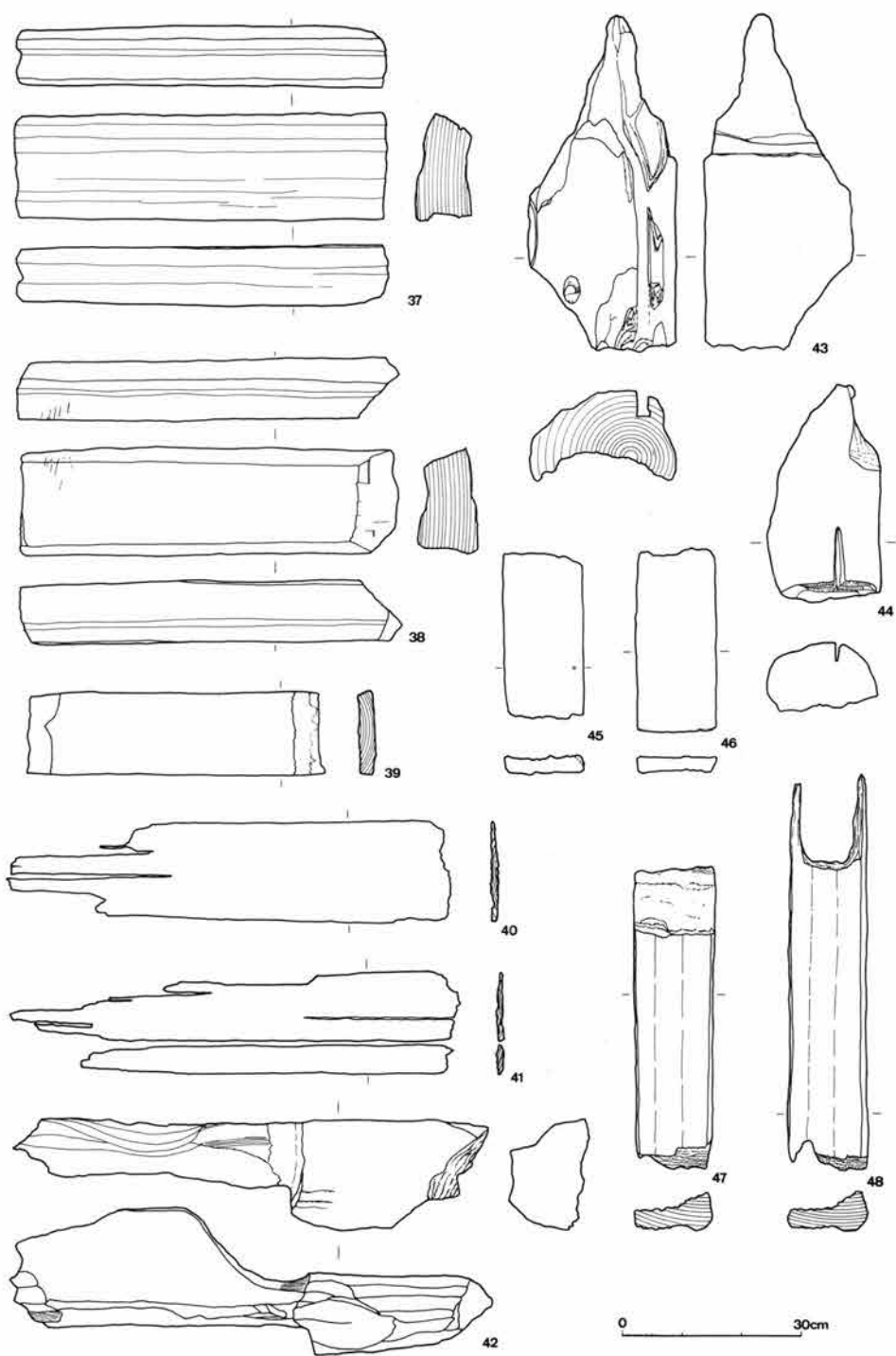
**土坑SK22627出土遺物**(第56図33) 33は、須恵器の壺である。口径16.5cm程度を測る。体部外面は平行タタキを行い、内面には青海波文を残す。色調は、赤褐色を呈している。

**包含層出土遺物**(第56図26～32・第57図34) 26～32・34は包含層出土の遺物である。26



第58図 出土遺物 (4)

35. 土坑SK 22622 36. 土坑SK 22623



第59図 出土遺物 (5)

37~41. 建物跡SB22621の P 19 42. 同建物跡 P 16 43~46. 同建物跡 P 3 45・46. 同建物跡 P 1

～28・34は、長岡京期の遺構検出面までに出土した。28は15B地区で出土した土師器の甕Aである。口径27cm・器高27cm程度を測る。外面はハケ調整を行っている。26・27は、14C地区で出土した。26は口径12cm・器高3.7cm程度を測る椀Aである。調整手法はc手法である。27は、口径17cm・器高4cm程度を測る杯Aである。調整手法はb手法である。<sup>(注9)</sup>34は、15D地区で出土した均整唐草文軒平瓦である。『長岡京古瓦聚成』軒平瓦分類の760型式に類似した特徴をもつ。

29～32は、長岡京期遺構検出面の下層、砂質土層内あるいは礫層上面から出土した須恵器である。30・32は、調査区西側から出土したもので、30は杯蓋、31は杯身である。29は有蓋高杯の蓋で、10D地区の礫層上面から出土した。31は、23C地区の砂質土層内から出土した杯身である。30・31はTK209、29・32はTK209または若干古い時期のものである。

## 6. ま と め

今回の調査で検出した東一坊第二小路の道路幅は、両側溝の心々間距離で約8.6mを測る。東一坊第二小路は、これまでに左京第176次調査、左京第204次調査においても検出されている。道路幅は、前者が9.3m、後者が9.5mである。今回の成果をみると、若干の差異はあるものの、東一坊第二小路が9m程度の道路幅であることを追認することができた。

溝SD22601は、東一坊第二小路の東側溝から約3m東の地点にある。先の左京第176次調査においても、SD17636が同様のあり方を示している。宅地の西辺を画するものか、築地が存在すれば内側の雨落ち溝に相当する溝と考えられる。また、溝SD22618も宅地割りの溝と考えられる溝で、十三町内を南北に三分割した場合の北から1/3の地点に当たる。

建物跡SB22621のように梁間を大きくあける掘立柱建物跡は、長岡京跡の京城では、左京第9次調査のSB09(1間6間、梁間4.15m)、右京第10・28次調査のSB2803(1間6間、梁間4.6m)、SB1069(1間6間、梁間3.9m)など数例がある。しかし、建物跡SB22621のように柱掘形が比較的大きく、礎板を持つような構造の掘立柱建物は知られていない。梁間を大きくあける理由については不明であり、このような建物跡の性格については類例の増加を待って検討したい。

既述したように、この地域は、従来の長岡京条坊復原図によれば、「藍圃」や「蓮池」に近接した地域に当たる。しかし、長年にわたる調査の成果の中には、従来の長岡京条坊復原図に合致しない結果も幾つかみられるようになった。左京第120次調査で検出された二条大路は、南北両側溝の心々間距離が8.9mで小路規模であることがわかった。一方、右京第26次調査で検出された三条条間小路は、南北両側溝の心々間距離が25mで大路規模である。このため、宮域の南限が現在の想定ラインよりも南北いずれかに二町分動くこと



は確定的となってきている。条坊再復原の際の要件としては種々あるが、発掘調査による「蓮池」の確定も重要である。仮に東西道路が二町分南に下がることになれば、調査地のうち東一坊第二小路の西側が左京三条一坊十町となり「蓮池」に、東一坊第二小路の東側が左京三条一坊十五町となり「藍圃」に相当する。今回の調査では、東一坊第二小路から西側部分の調査は、ほとんど行うことができなかった。次回の調査に期待したい。

(三好博喜)

- 注1 北村 清・古閑正浩・松本とも子・政田美弥・塚本映子・田中あゆみ・小村美香・針尾有章子・市川美佳
- 注2 中塚 良「長岡京跡二条大路，東二坊第一小路，東二坊坊間小路，交差点付近における微地形と<sup>14</sup>C年代について」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第18集 向日市教育委員会) 1986
- 注3 山中 章「長岡京跡左京第143次(7ANFTB-4地区)～左京四条二坊五町，鴨田遺跡第6次～発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第21集 向日市教育委員会) 1987
- 注4 高橋美久二ほか「長岡京跡左京三条二坊第2次発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1976)』京都府教育委員会) 1976
- 注5 第1次. 高橋美久二「長岡京跡左京三条二坊第1次発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1975)』京都府教育委員会) 1975  
 第2次. 注4に同じ  
 第3次. 山下 正「長岡京跡左京第98次発掘調査概要(7ANFNT-3地区)」(『京都府遺跡調査概報』第8冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983  
 第4次. 山口 博「長岡京跡左京第119次発掘調査概要(7ANFNT-4地区)」(『京都府遺跡調査概報』第15冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985  
 第5次. 竹井治雄「長岡京跡左京第202次発掘調査概要(7ANFNT-5地区)」(『京都府遺跡調査概報』第34冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989
- 注6 注4に同じ
- 注7 國下多美樹「長岡京跡右京第271次(7ANFDC地区)～右京四条一坊三町，吉備寺遺跡～発掘調査概報」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第24集 向日市教育委員会) 1988
- 注8 山中 章「長岡京跡左京第154次(7ANFHM-4地区)～左京四条二坊一町，中福知遺跡～発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第27集 向日市教育委員会)1989
- 注9 『長岡京古瓦聚成』(向日市埋蔵文化財調査報告書第20集 向日市教育委員会) 1987
- 注10 木村泰彦「左京第176次(7ANLZS地区)調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和62年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1989
- 注11 昭和63年度長岡京連絡協議会資料
- 注12 梅川光隆ほか『長岡京跡発掘調査報告 京都市埋蔵文化財研究所調査報告一Ⅱ』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1977
- 注13 山本輝雄ほか「長岡第九小学校建設にともなう発掘調査概要 長岡京跡右京第10・28次調査(7ANMMB地区)」(『長岡京市文化財調査報告書』第5冊 長岡京市教育委員会) 1980
- 注14 秋山浩三「長岡京跡左京第120次(7ANFZN-2地区)～二条大路，東二坊第一小路，東二坊坊間小路交差点～発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第18集 向日市教育委員会) 1986
- 注15 高橋美久二ほか「長岡京跡右京第26次発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-2)』京都府教育委員会) 1980

圖

版



(1) 太田3・4号墳全景（北東から）



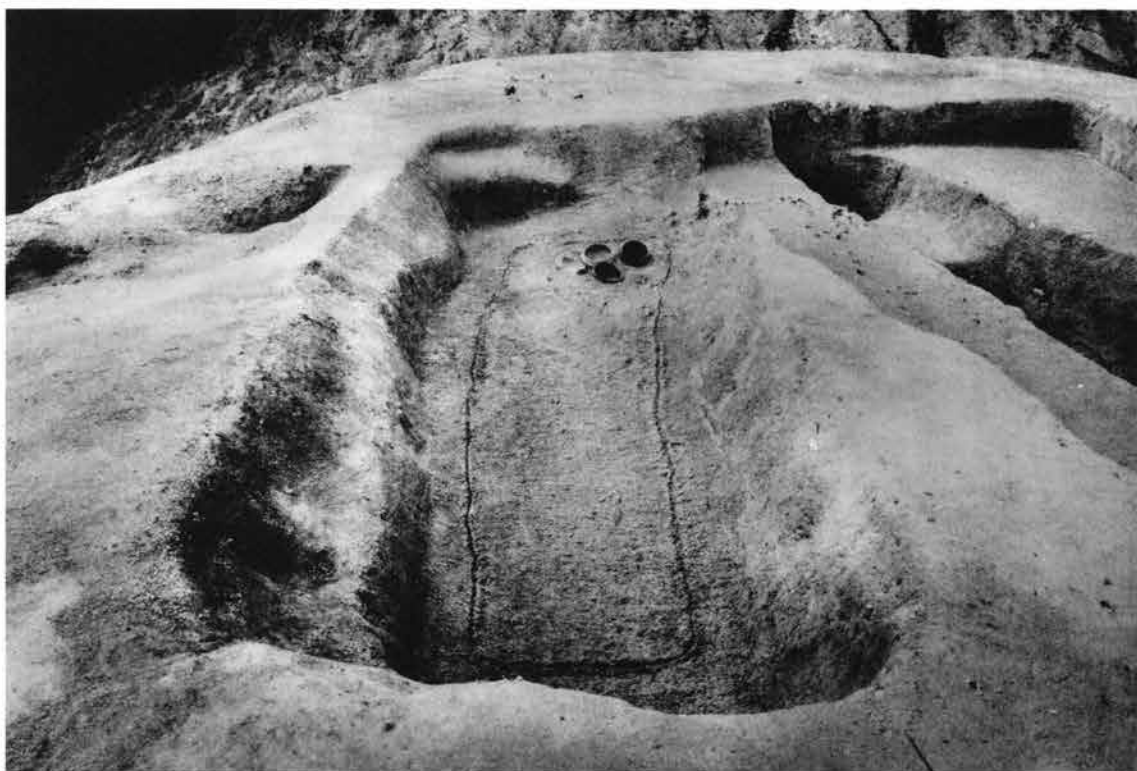
(2) 太田4号墳主体部全景（南から）



(1) 太田4号墳第1主体部（北から）



(2) 太田4号墳第1主体部 墓壙検出面遺物出土状況（西から）



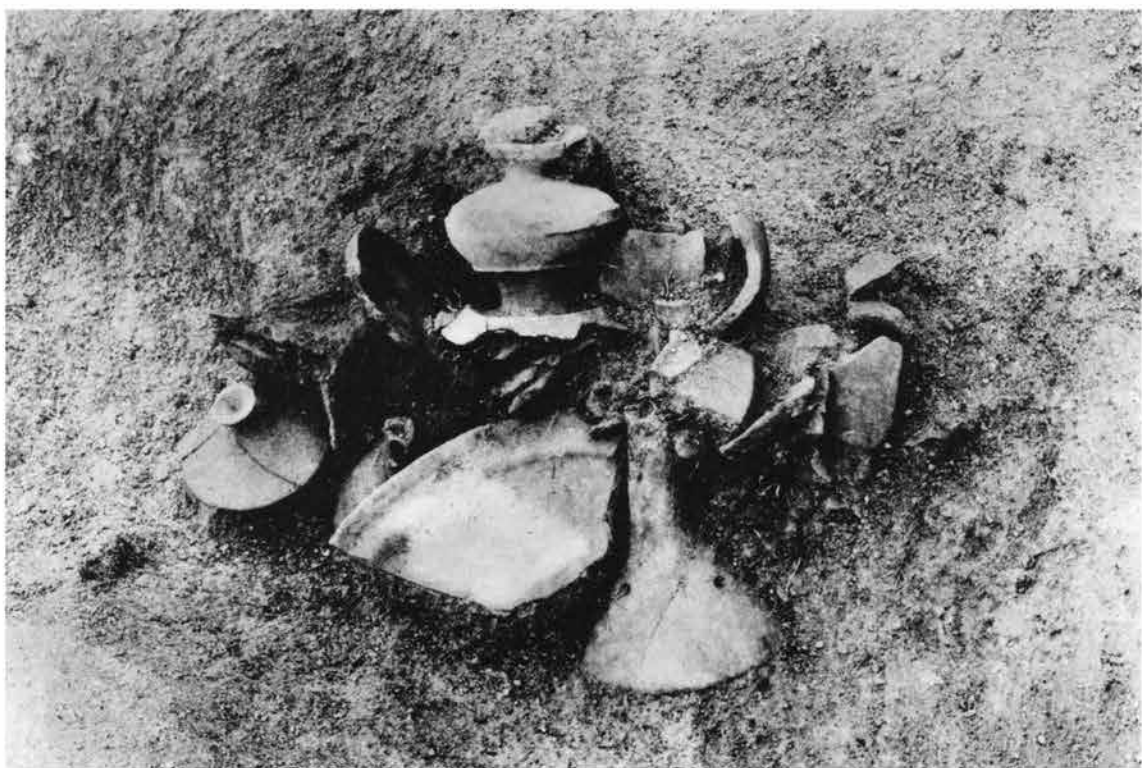
(1) 太田4号墳第2主体部（北から）



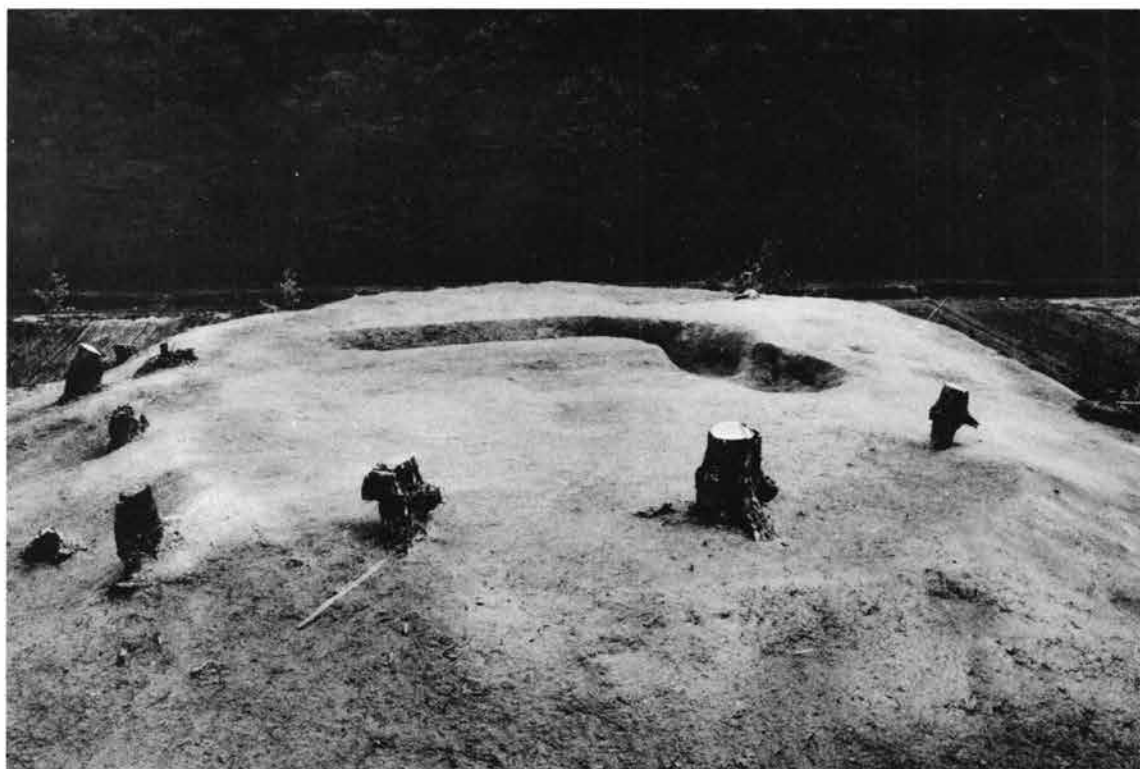
(2) 太田4号墳第2主体部 遺物出土状況（北から）



(1) 太田4号墳土坑1 (北から)



(2) 太田4号墳土坑1 遺物出土状況 (西から)



(1) 下後1号墳全景(南から)



(2) 下後5号墳トレンチ全景(南西から)



1



6



2



7



3



4



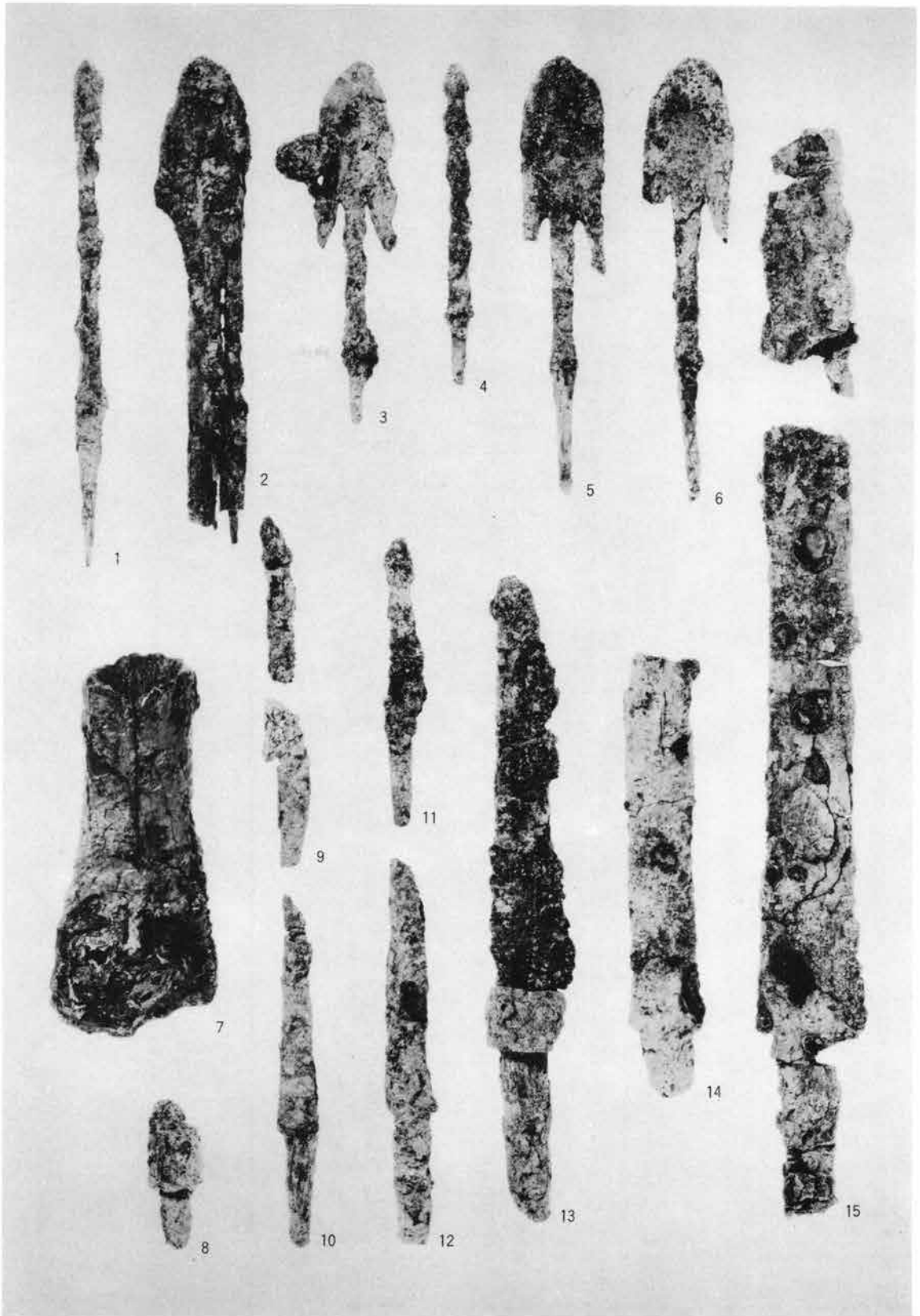
5



8







出土遺物(3)



(1) 墳丘全景 (北から)



(2) 墳丘全景 (南東から)



(1) 石室全景（羨道部より奥壁をのぞむ）



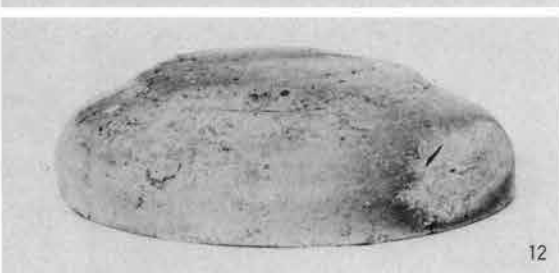
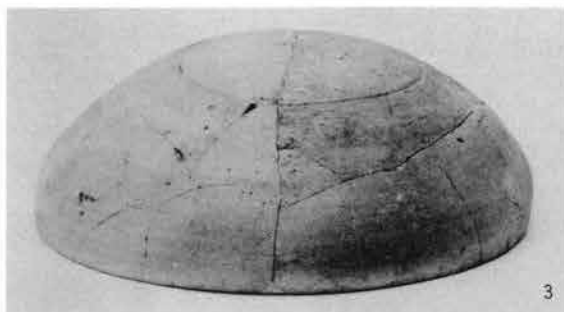
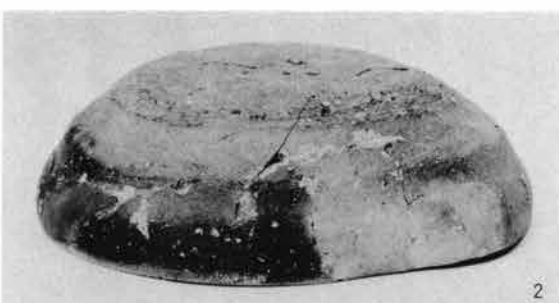
(2) 閉塞石検出状況（西から）



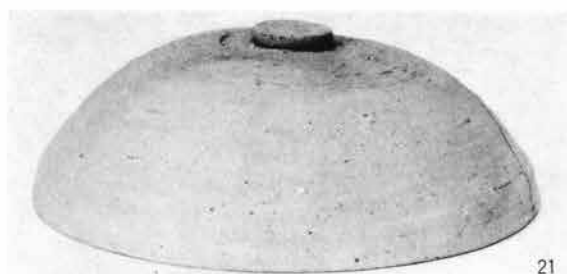
(1) 閉塞石上遺物出土状況（南から）



(2) S D01内遺物出土状況（西南から）



出土遺物(1)





(1) 東地区トレンチ全景



(2) 西地区トレンチ全景





(1) S H09内遺物出土状況



(2) S R17内遺物出土状況



出土遺物(1)



10



12



17



a



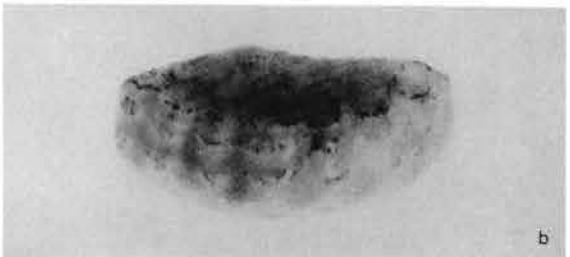
22



18



21



b

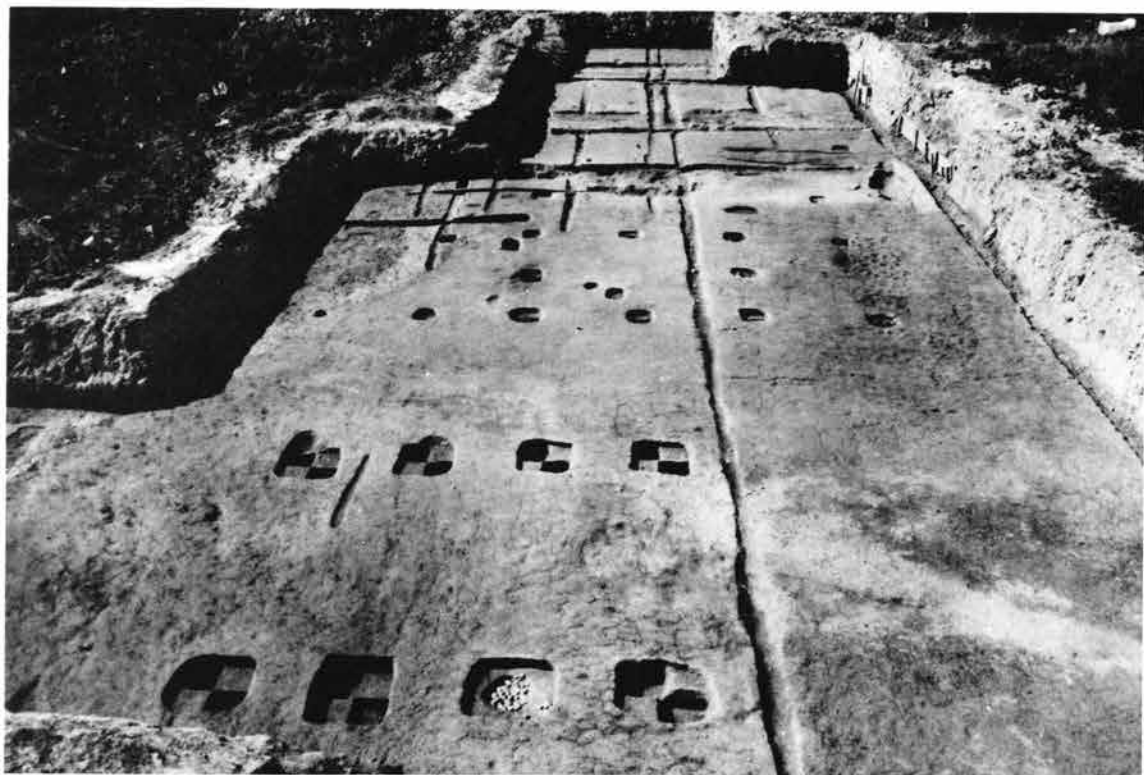
a : S H09床面出土土師器 b : 包含層出土青白磁合子  
出土遺物(2)



(1) 調査地遠景（東から）



(2) 調査地全景（西から）



(1) 調査地全景（東から）



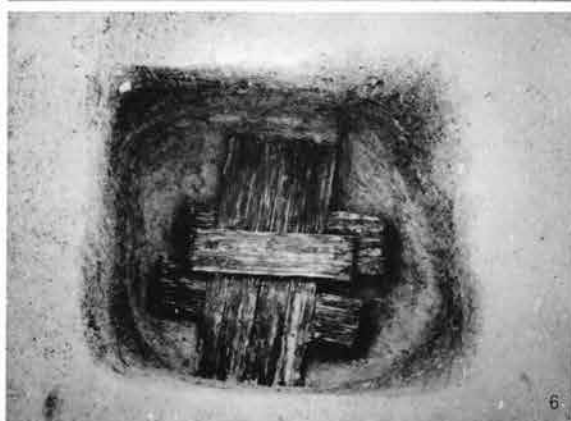
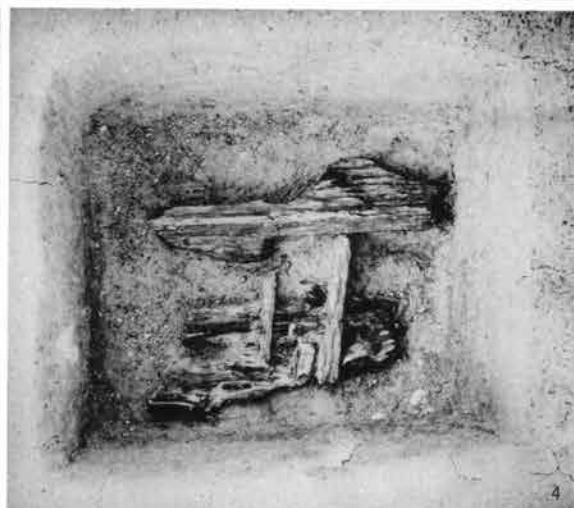
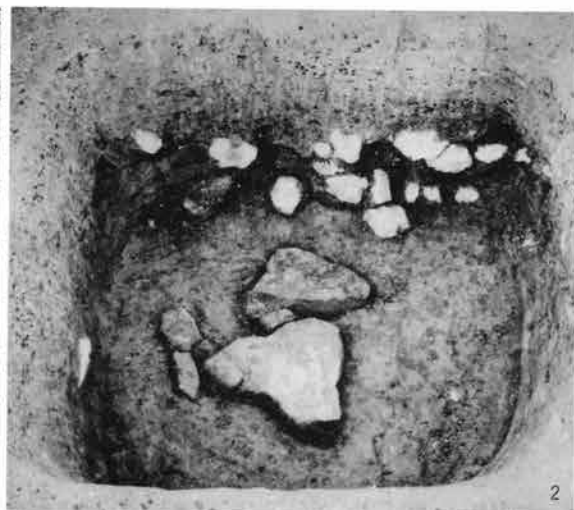
(2) 建物跡S B22620全景（北から）



(1) 建物跡 S B 22621 全景 (北から)



(2) 溝 S D 22601 全景 (南から)

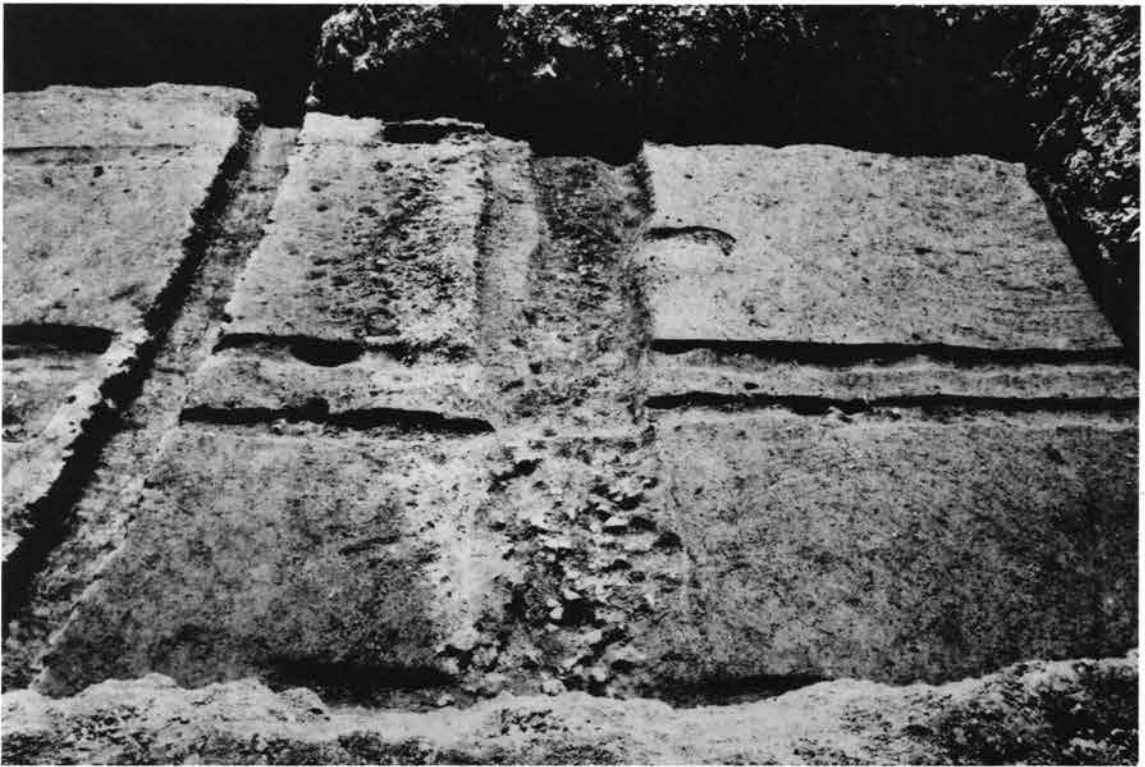


建物跡 S B22621 礎盤検出状況

1: P2 上層 2: P2 最下層 3: P1 4: P16 5: P4 6: P19



(1) 溝 S D22609全景 (南から)



(2) 溝 S D22619全景 (北から)

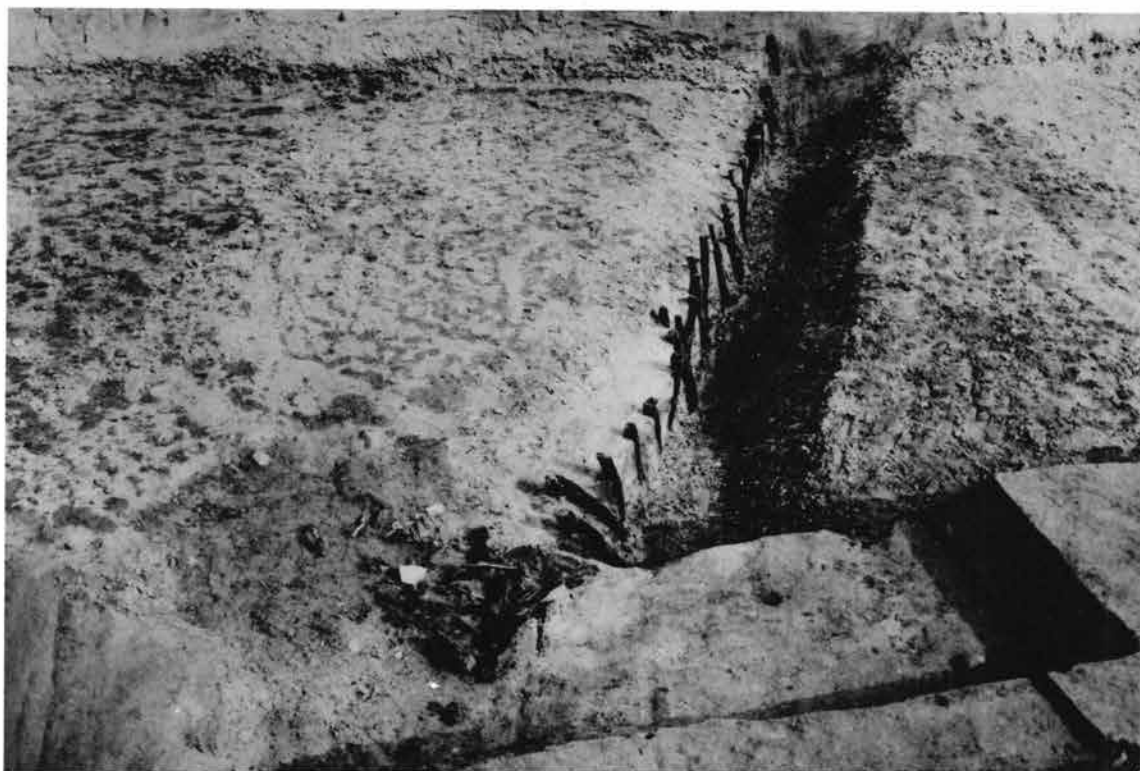




(1) 土坑 S K22610堆積状況 (南西から)



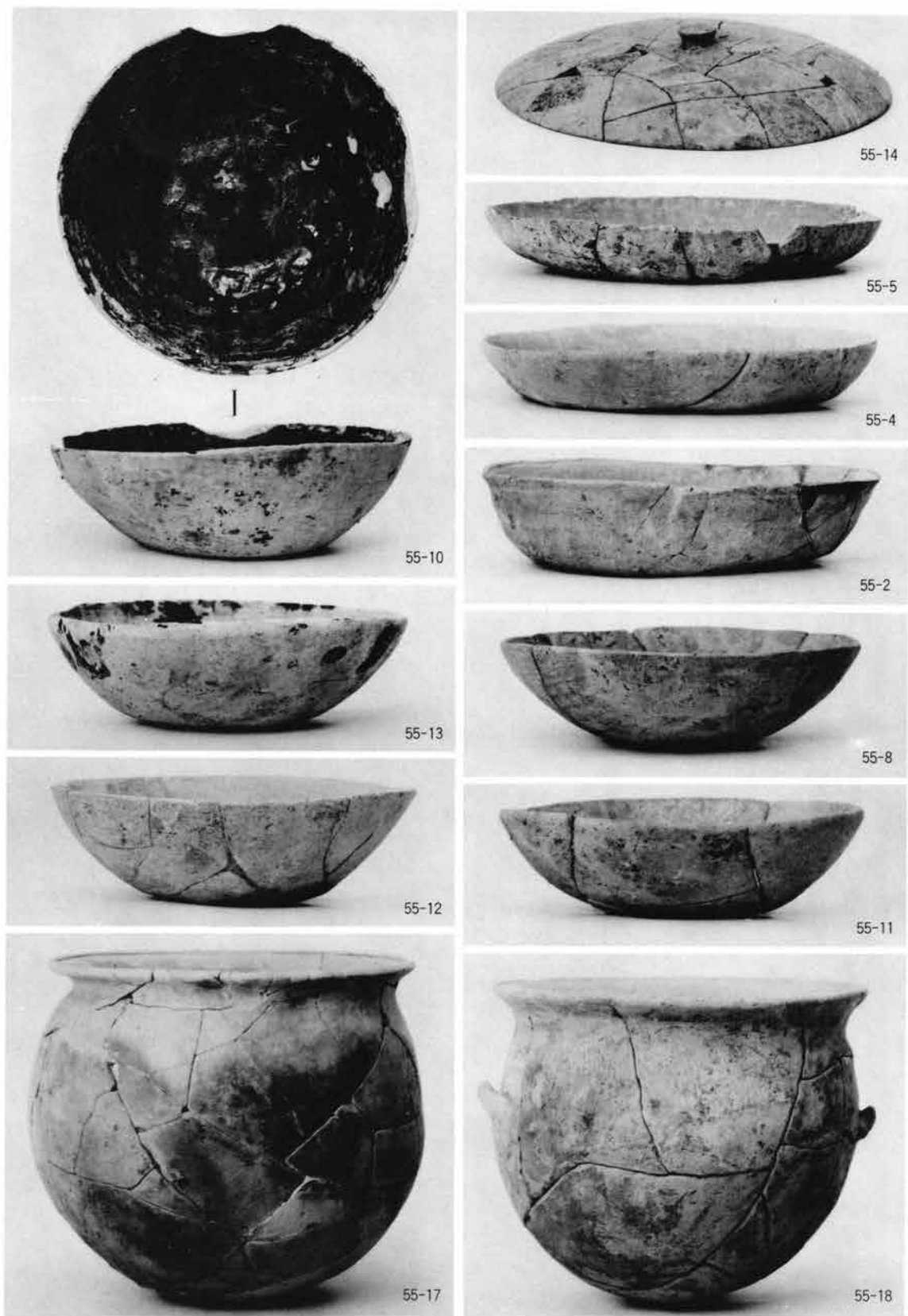
(2) 土坑 S K22622遺物出土状況 (北から)



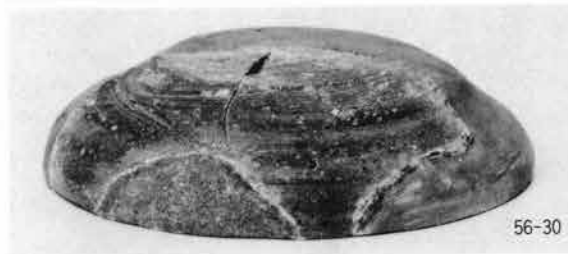
(1) 杭列 S X22624・土坑 S K22623全景 (南から)

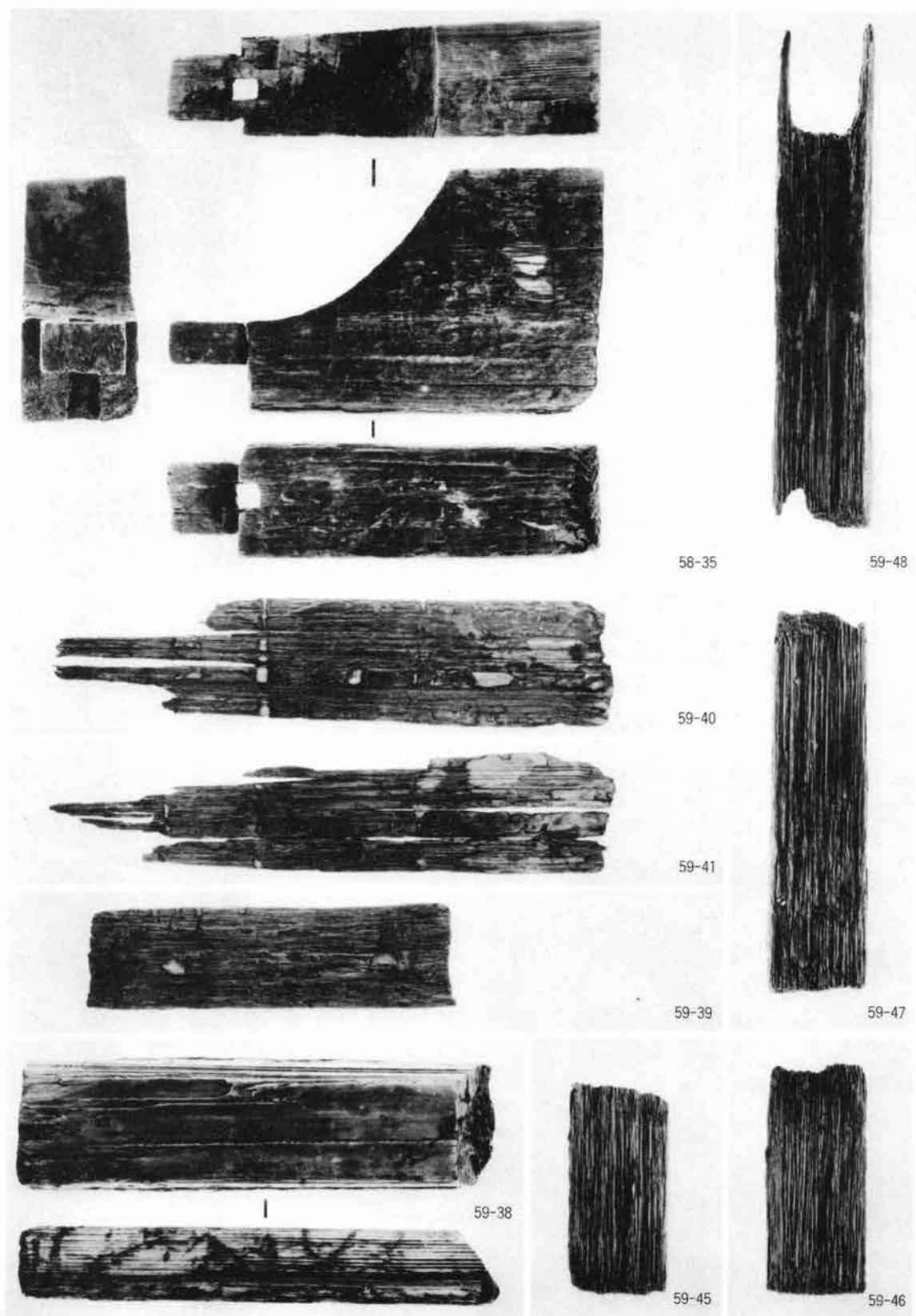


(2) 最下層掘削状況 (東から)



出土遺物(1)





出土遺物(3)

## 京都府遺跡調査概報 第39冊

平成2年3月23日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3  
TEL (075)933-3877

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入  
TEL (075)441-3155 (代)